

Quarterly

HeadLine

創刊5周年記念

臨時増刊号
2019年3月

地方再生の現場を歩く

(第3版)

2014年4月～2019年3月



地方再生の現場を歩く (第3版)

「回遊」が人口減少社会を救う 4

コンパクトシティが地方を救う

第1回 2014年10月1日
路面電車フル活用の富山市／大津波から復興目指す山元町（宮城県） 6

第2回 2015年1月1日
「青空」が復活した商店街 米子市（鳥取県） 10

第3回 2015年4月1日
「100年繁栄」目指す宇都宮市／観光資源が豊かな「坂の街」長崎市 13

第4回 2015年7月1日
進化を続ける「ものづくり」 三条市（新潟県）／小田原市（神奈川県） 18

第5回 2015年10月1日
サハリン交流に懸ける最北端の街 稚内市（北海道） 23

第6回 2016年1月1日
「龍馬」こそ最強コンテンツ 高知市 27

第7回 2016年7月1日
生物と人の多様性「東洋のガラパゴス」 奄美市（鹿児島県） 31

第8回 2016年10月1日
世界三大夕日が美しい「霧の都」 釧路市（北海道） 37

第9回 2017年1月1日
「海の京都」で公共交通の空白解消 京丹後市（京都府） 41

第10回 2017年3月27日
ネコも歩かぬシャッター街に奇跡が… 日南市（宮崎県） 45

第11回 2017年6月29日
ベンガラの里・吹屋&雲海の備中松山城 高梁市（岡山県） 49

第12回 2017年9月29日
リンゴ王国がソフトパワーで目指す「観都」 弘前市（青森県） 54

第13回 2018年1月1日
寂れた商店街が「昭和の町」で奇跡の復活 豊後高田市（大分県） 62

発行日 2019年3月29日
発行人 神津 多可思
編集長 中野 哲也
副編集長 竹内 典子
発行所 リコー経済社会研究所
〒100-0005
東京都千代田区丸の内1-6-5
丸の内北口ビルディング20F

ホームページアドレス
<http://jp.ricoh.com/RISB/>

本誌記事・写真の無断複製・転載を禁じます。
RICOH Quarterly HeadLineへのご意見やご提案は、
<https://webform.ricoh.com/form/pub/e00103/risb>
へお願いいたします。

第14回 2018年3月30日 世界文化遺産「熊野古道」で街を再生 田辺市（和歌山県）	69
第15回 2018年6月29日 瀬戸内海が育んだ「箱庭」的都市 尾道市（広島県）	76
第16回 2018年9月28日 「笑顔」で暮らせる街づくり 坂井市（福井県）	82
第17回 2019年1月1日 「米粉」発祥の地、洋上風力発電に挑戦 胎内市（新潟県）	89
2019年1月1日 126年の歴史に終止符を打つJR夕張支線 夕張市（北海道）	94
第18回 2019年3月29日 「海洋深層水」夢が膨らむ南海の離島 久米島町（沖縄県）	98
東日本大震災・被災地を歩く	
3.11を乗り越えて…陽はまた昇る 2014年4月1日 震災復興と構造改革 不撓不屈の釜石市・大槌町（岩手県）	104
トリプル被災地を駆けめぐるスーパー医師 2015年7月1日 南相馬市（福島県）	110
ゼロからの3.11復興 長くて短い5年間 2016年3月25日 巨大津波を生き抜いた「奇跡の一本松」 陸前高田市（岩手県）	111
海外ルポ	
いま、ベトナムが熱い！ 遅れて来た新興国 2014年7月1日 ＝日本のレンズ技術を継承 ハノイ育ち「匠」の素顔	115
国家の「ボトムライン」が問われる中国 2015年10月1日	122
チンギス・ハーンの末裔は今… 2016年10月1日 ＝モンゴル・ウランバートル訪問記＝	124
東京から最も近い「欧州」ウラジオストク（ロシア）2017年9月29日 ＝戦前6000人が居留した日本人街は今…＝	130

【お断り】記事中の役職や肩書き、年齢などは取材当時のものです。

「回遊」が人口減少社会を救う

宗谷岬（北海道）から久米島（沖縄県）に至るまで、全国の街を歩いて取材してきた。この国は決して小さくないし、文化も多様性に富んでいる。一方で、各地域に共通する悩みがある。もちろん、それは人口減少だ。2019年初の総人口概算値（総務省統計局「人口推計」）は1億2632万人で前年比27万人減。わずか1年間で水戸市（茨城県）に匹敵する人口がまるまる消えた計算になる。

このため、どの自治体も人口増加対策に躍起になっている。だが現実には、A市が増えてもB市がその分減るという冷酷なゼロサムゲーム。となると、定住人口（住民票に登録する市民）を競い合うより、交流人口（国内外からの観光客）や関係人口（移住しないが断続的に関わる地域外の人）を増やすべきだろう。

交流人口では、訪日外国人数が昨年3000万人を突破。来年の東京五輪・パラリンピックを待たずに、そのインバウンド消費は巨大産業に成長した。今後の課題は関係人口をいかに増やすか。それにはやはり、東京一極集中にメスを入れるしかない。

例えば国が企業に対し、社員の勤務地を1年のうち数カ月間に限り、東京から地方へ移すよう促す政策はどうだろう。企業が地方で急増中の空き家や空きオフィスを活用。社員はそこで働きながら、地域社会に溶け込むという仕組みだ。幸い、インターネットにさえ接続できれば、どこに居ても可能な仕事が増えている。超高速の次世代通信規格5Gが来年実用化されると、それはもっと拡大するはずだ。

夏は寒冷地、冬は温暖地で農漁業体験やスポーツを楽しみながら、仕事をしたい人は少なくない。だから期間限定の地方勤務は「働き方変革」にも資する。こうして日本人が「回遊」するようになれば、被災地の復興や地方の創生にも必ずプラスに働くはずだ。

バブル崩壊後、この国は言い訳と保身ばかりで問題を先送りしてきた。従来延長線上の発想から脱することができないまま、「平成」が終わりを告げる。次の時代には是非とも、既成概念を破壊する若き挑戦者が一人でも多く現れてほしい。中高年は自らに都合のよい「常識」で彼ら彼女らを潰すのではなく、物心両面から強力に支援しよう。われわれバブル世代の務めだと思う。

末筆ながら、取材に快く応じていただいた全国各地の皆様と、貴重な取材機会を与えてくれたリコー経済社会研究所の神津多可思所長、稲葉延雄常任参与（前所長）、竹内典子副編集長ほか同志に心から御礼申し上げます。

2019年3月

リコー経済社会研究所 副所長・主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長
日本危機管理学会 理事長
元時事通信経済部記者・ワシントン特派員

中野 哲也



コンパクトシティが地方を救う（第1回）

路面電車フル活用の富山市／大津波から復興目指す宮城県山元町

社会構造研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長

中野 哲也

市区町村1800の半数に消滅する可能性がある。日本創生会議（座長・増田寛也元総務相）が今年5月公表した独自推計は、全国の自治体に衝撃を与えた。少子高齢化・人口減少は決して新しい問題ではないが、先送りされてきたのが実情。自治体半減は「不都合な真実」と向き合えという警告だが、人口を増やすには長い時間がかかり、即効薬は見当たらない。では一体どうしたらよいのか。

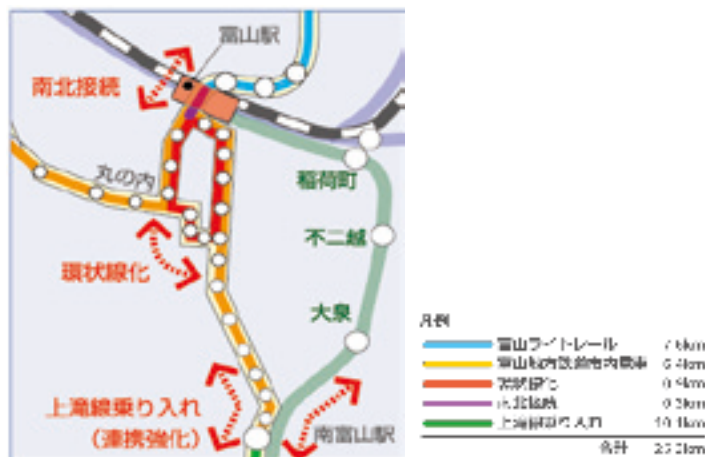
モータリゼーションが地方をクルマ社会に変え、人口は街の中心部から工場が立地する郊外に移動した。「規模の経済」の優位性が疑われず、道路や下水道、福祉といった行政サービスも郊外に拡散した。しかし、グローバル化に伴う製造業の海外移転と、少子高齢化・人口減少が同時進行すると、もはや地方は「規模の経済」を追求できない。

地方活性化の動向に詳しい、慶大大学院システムデザイン・マネジメント研究科の保井俊之特別招聘教授は「米シリコンバレーに代表される、集積効果を追求する『範囲の経済』に変わらない限り、地方自治体の生き残りは厳しい。しかし、インフラ、ハコモノ、住民のネットワークをつなぎ替えるためには、既得権を持つ抵抗勢力と闘う強力な首長の登場が必要になる」と指摘する。今回は、「範囲の経済」として注目を集めるコンパクトシティの実現に向け、難題に挑戦する二人の首長にインタビューを行い、その実情をレポートする。

「串と団子」で生き残り目指す 富山市

全国自治体の中でコンパクトシティ政策にいち早く取り組み、成果を上げているのが富山市（人口約42万人）である。森雅志市長にその本質を尋ねると、「不公平な政策」という答えが返ってきた。「人口減少が不可避になり、右肩上がり時代の市全域（約1242平方キロ）への均質な行政サービス提供は今や、砂漠に水を撒くようなもの。市全体が沈没して生き残れなくなる」という。だから中心部に投資を集中し、居住者をそこに誘導する。市の中心部の地価を維持し、固定資産税や都市計画税などの歳入を確保しようとしている。

富山県議から2002年に市長へ転じた森氏が着目したのは、市内に残っていたローカル線や路面電車、それにバス網である。こうした公共交通を「串」に、駅などを中心とする徒歩圏を「団子」に見立て、串が団子を突き刺してネットワークを形成するコンパクトシティを目指すことにした。



富山市中心部の鉄道ネットワーク（提供）富山市



富山市の森雅志市長

森市長はまず、利用客が減少していたJR富山港線（富山～岩瀬浜）を第三セクターに改め、2006年に日本初の本格的なLRT（次世代型路面電車）「ポートルム」として蘇生した。LRTは床が低いため、お年寄りでも楽に乗り降りできる。運転間隔を30～60分から10～15分に短縮し、運賃も200円均一制に。駅の数も増やし、

乗客目線でサービス向上を図った結果、開業前と比べて利用客数は平日で2.1倍、休日は3.4倍に急増した。市の調査によると、LRT開業までは歩くことの少なかった高齢者ら、新規乗降客が全体の2割を占めている。



（上）ホーム高さの違いに注目！左が現行LRT、右はJR時代（東岩瀬駅）

（右）富山市内を快走するポートルム



次に、森市長は市内電車を約900メートル延伸し、2009年に環状線「セントラム」に造り替えた。ポートラム同様、低床のLRTで運賃も200円均一制である。延伸によって市電と富山城址がコラボする美しい景観が生まれたほか、市民のライフスタイルに変化が生まれた。例えば、中心部での休日の平均滞在時間は自動車利用者113分に対し、環状線利用者は128分と15分も長い。消費金額も自動車は9207円にとどまるが、環状線では1万2102円に達する。クルマを自宅に置いて、市内で酒を楽しむ人が着実に増えているという。



(上) 富山城址とセントラム
(右) レトロな旧型電車も健在



森市長「市民にお金をもっと使ってもらおう」

農閑期の副業として始まった「富山の薬売り」に代表されるように、富山市民は働き者で質実剛健といわれる。総務省の家計調査（2012年）によると、勤労者世帯の実収入は都道府県庁所在市の中で3位。借金が少ないため、可処分所得と貯蓄率は1位である。半面、消費支出は21位、消費性向は47位にダウンする。森市長は「住宅と耐久消費財を買ったら、後はひたすら貯め込むという市民性。富山市が生き残るため、市民にお金を使ってもらおうことが私の仕事だ」と言い切る。

そこで、森市長は人口減少時代の消費のカギを握るお年寄りに外出を促そうと、「おでかけ定期券」というサービスを始めた。65歳以上の市民がこの定期券（年間1000円）を買えば、市内各地から



セントラムでお年寄りが気軽に外出

中心部までの公共交通運賃が一律100円（午前9時～午後5時）。高齢者の4人に1人がこの定期を持ち、一日平均2500人超が利用する。

また、指定花屋で花束を買って市内電車に乗ると、運賃が無料になるサービスもある。その意味を聞くと、森市長は「私も何だかよく分からないけど、何となくオシャレだし、街に行きたくなくなるじゃない」と笑みを浮かべた。「人を動かす三大要素は、楽しい、美味しい（お買い得感も含む）、オシャレ」というのが市長の持論。「その三つのどれかあれば、人は用がなくても街中に出掛けて行く」

北陸新幹線が来春開業すると…東京から2時間で

公共交通網を整えても、市民が郊外から中心部に住み替えてくれなければ、コンパクトシティは実現しない。このため、富山市は中心部に移る市民などを対象に各種の助成制度を導入している。例えば、住宅購入者に50万円、賃貸生活者には家賃補助月1万円（3年間）を支給する。建設業者の共同住宅建設に対しては、一戸当たり100万円助成する。その結果、転出が続いていた中心部の人口が2008年から転入超過に様変わりした。また、中心部の歩行者数の増加に伴い、シャッターが目立つ商店街の空き店舗率もわずかながら改善している。



中心部商店街で空室率が低下

しかし、コンパクトシティの完成度としては、森市長は「まだ60%ぐらい」という。インフラ整備では、JR富山駅で分断されているポートラムとセントラムを接続するという、難題を仕上げなくてはならない。ソフト

面でも、「コンパクトシティ化で高齢者の外出が増え、健康寿命が延びることを証明したい」と意気込む。実際、市が「おでかけ定期券」の利用者を調査したところ、一人当たりの歩数が一日1309歩増加。その医療費削減効果は一人一日約80円、定期券利用者全体では年7560万円に上るとい

今、来春の北陸新幹線開業に向けて、JR富山駅では改築工事が急ピッチで進んでいる。東京とは2時間強で結ばれるから、今より1時間以上も短くなる。日銀富山事務所の伊藤栄所長は「優秀な人材を確保するという意味で、新幹線は富山市の新たな武器になり得る」と予想する。新幹線が森市長の創造力を刺激し、富山市のコンパクトシティ政策は更なる進化を遂げるかもしれない。



北陸新幹線工事中のJR富山駅

震災後、人口が2割減少 宮城県山元町

コンパクトシティ政策は、「東日本大震災で被災した過疎地域でこそ有効に機能するのではないか」（前出の保井俊之・慶大特別招聘教授）とも期待される。ゼロからの街づくりを余儀なくされた被災自治体が、住宅や交通インフラ、公共施設を安全性の高いエリアに集約し、少子高齢化・人口減少を乗り越えようという考え方である。

東日本大震災で大打撃を受けた宮城県亶理郡山元町。斎藤俊夫町長はコンパクトシティを軸にして、町を復興しようと奮闘している。太平洋に臨む同町は「東北の湘南」といわれるほど、夏冬も過ごしやすい気候。冬もクローズしないゴルフ場には北海道などからゴルファーが集まり、イチゴやリンゴ、ホッキ貝といった幸にも恵まれる。近年は電車で40分の仙台市のベッドタウンとなり、最盛期の人口は1万8000人を超えていた。



(作成) 花原 啓



山元町の斎藤俊夫町長



巨大津波に襲われたJR常磐線

しかし、それでも少子高齢化・人口減少には抗し切れない。山元町の人口がジリジリと減り始めたところに、12メートルもの巨大津波が襲ってきた。人口の4%に当たる635人の尊い命が失われ、可住地域の6割が浸水した。唯一の鉄道であるJR常磐線が被災し、同町内の区間は未だ不通。仙台市への通勤・通学客が次々に町から出て行ってしまう、人口は震災前の1万6695人から2割以上も減り、今年7月末に1万3000人を割り込んだ。

斎藤町長は宮城県庁時代、政令市を目指す仙台市の広域合併に尽力した。2010年4月、山元町長に初当選すると、「高齢化率3分の1超の山元町は生き残れない」と危機感を抱き、秘かに隣接する



亶理町との合併構想を練り上げた。なぜなら、一般会計が50億円規模の山元町単独では、「投資的経費が6億～7億円程度しかなく、その大半が道路や排水路などの維持・修繕費に消えてしまう」からだ。

町立中浜小学校では「ブルー線」まで津波が押し寄せたが、児童全員が三角形の屋根裏部屋に無事避難

隣町との合併も…「コンパクトな街にするしか…」

ところが、翌2011年3月11日の巨大津波はこの合併構想も押し流してしまい、斎藤町長は茫然とするほかなかった。建て替え中の実家が水没し、町長も被災者となる。震災直後は車上生活。その後は町役場に泊まり込み、寝食を忘れて復興の陣頭指揮を執り続ける中、「町を再生させるには、コンパクトシティを導入するしかない」と確信するようになった。

JR東日本が常磐線不通区間を内陸側に移設した上で復旧させる方針を固めると、斎藤町長はそれに合わせて3つの市街地を新たに整備するコンパクトシティ計画を打ちだした。被災住民をこのエリアに誘導し、学校や保育所、公園、防災センター、ショッピングセンターなどを建設。開発総面積は東京ドーム約12個分の56ヘクタールに上り、2015年度に真新しい住宅757戸が誕生する。



仮庁舎のままの山元町役場

この計画を策定する前、山元町は住民に対して意向聴き取り調査を行い、約7割の支持を得た。しかしながら、新市街地や常磐線新区間から離れてしまう住民の不満は根強く、

斎藤町長は今年4月の町長選で再選されたものの、「反コンパクトシティ」を掲げた元町長とはわずか194票差だった。だが選挙後もひるむことなく、斎藤町長は「未曾有の巨大津波を経験した山元町にとって、コンパクトシティは必然的な対応。その成功こそが、全国から大変有難いご支援に対する恩返しになる」と語り、粘り強く町民の説得を続けている。

ただし、一つ深刻な問題が発生している。小さな町がこれだけの大事業を進めているのに、町役場のマンパワーが圧倒的に足りないのだ。震災前に比べると予算は10倍の560億円（2013年度当初）まで膨らんだが、職員数は1.6倍しか増えていない。しかも総勢296人のうち115人が他自治体からの派遣職員であり、その3分の2が一年で交代する。「町役場には毎日、ありとあらゆる案件が持ち込まれている。コンパクトシティを成功させるためにも、長期の職員派遣をお願いしたい」一。斎藤町長は悲痛な叫び声を上げている。



(上) 新市街地の開発現場
(下) 復興工事が続く磯浜漁港



山元町に残る唯一の本格的な宿泊施設が、江戸時代末期の創業という磐城屋である。7代目主人の斎藤次郎さん（80）は「昭和30年代までは富山の薬売りが上客だったし、その後は学校の先生がたくさん下宿してくれた。バブル期は北海道からのゴルフ客で繁盛したんだよ」と懐かしそうに話す。

斎藤さんは大津波で愛車を失い、旅館も浸水して営業不能になり、「俺の代でけじめを付けろということか…」と気持ちは廃業に傾いた。しかし、大震災後初めての盆が近づいてくると、近所から「家族や親戚が帰郷してくるのに、泊まる所がないんだよ」という声が聞こえてきた。斎藤さんはコツコツ貯めていた300万円を投じて旅館を修繕し、急きょ営業を再開した。

ところがその後、山元町が「コンパクトシティ計画の一環で道路を通したいから、旅館の建っている土地を譲ってほしい」と打診してきた。再び斎藤さんは悩み始める。「先祖代々の土地を手放してよいのか」と自問を続けているうちに、「自分が生まれ育った山元町がコンパクトシティで生き残ることができるなら…」一。斎藤さんは150年の歴史を刻み込んできた旅館と土地を手放す決断をした。



(左) 磐城屋7代目主人の斎藤次郎さん
(下) 歴史を刻み込む磐城屋の中庭



(写真) 筆者
PENTAX K-50使用



コンパクトシティが地方を救う（第2回）

「青空」が復活した商店街（鳥取県米子市）

社会構造研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長

中野 哲也

シャッター街と化した商店街はどうすれば息を吹き返すのか。少子高齢化に苦悩する地方都市の共通課題である。しかも財政事情はどこも厳しいから、投入できるヒト・モノ・カネは限られる。米子市（鳥取県）は最小の投資で最大の効果を得るため、コンパクトな街づくりを推進する。発想の転換で中心市街地の再生は成功を収めつつあり、「米子方式」が全国の自治体から熱い視線を送られている。



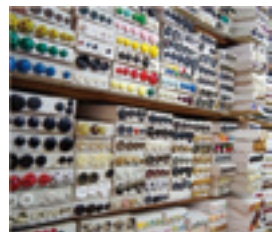
（作成）花原 啓

米子市中心部にある商店街の一角では、他の地方都市と同様、シャッターの閉まった店舗が並んでいる。交通の要衝、あるいは商都として「山陰の大阪」と呼ばれていた面影はない。

70年以上も前に開業したというボタン専門店を訪ねると、数千に上るボタンがデザインやサイズごとにきちんと整理され、うす高く積み上げられていた。色とりどりの輝きを目にする、ついつい見惚れてしまう。



店主（78）は「この商店街が最も活気にあふれていたのは昭和30年代。ここに来れば、何でも手に入ったからね。その後、郊外に大型店舗ができると、店が一軒また一軒閉まり、何もそろわない商店街に変わり果てた。最近の若い人はケータイをいじるのに忙しく、裁縫をしてくれないし…」と溜め息をつく。この店も後継者がいないため、いずれ畳まなければならない。古びたアーケードで陽射しがさえぎられ、重苦しい空気が漂う中、店主の言葉の一つひとつが胸に突き刺さる。



「このままではスラム街」「改革派」店主が…

ところが、通りを挟んで反対側の商店街には青空が広がっていた。実はこの「ほっしょうじ（法勝寺）通り」も、かつては老朽化したアーケードが通りを覆い、各店主は頭を抱えていた。2007年に落下物事故が起きてしまい、商店街は窮地に追い込まれる。「このままではスラム街になりかねない」と立ち上がったのが、創業500有余年の仏具店「石賀本店」を営む石賀治彦さん（49）ら“改革派”の店主である。



商店街復活に立ち上がった石賀治彦さん

当時、商店街の半分を空き店舗が占め、振興組合も既に解散していた。年180万円に達していたアーケードの電気代を節約するため、照明を夜だけにしたが、それでも100万円かかる。1000万円と見積られたアーケードの撤去費用を捻出できるわけもなく、石賀さんは途方に暮れる。ジャンボくじを1回10万円ずつ購入したが、当然、かすりもない。

しかし、石賀さんはへこたれない。同志と飲みながら知恵を絞り合い、街づくり会社を設立。経済産業省の補助金や米子市からの協力を受け、アーケード撤去だけでなく、商店街の「公園化」に取り組むことを決断した。石賀さんらは全国各地の商店街を視察した上で、「空き店舗を全て埋める」あるいは「全国的な観光地にする」といった非現実的な選択肢を排除し、あくまで「身の丈に合った街づくり」に取り組んだ。

石賀さんらは200メートル四方の47世帯を一軒一軒回り、粘り強く説得して商店街の再生策に同意を取り付けた。そして2011年3月、ついに商店街が生まれ変わる。幅約6メートルの道路の半分に芝生を敷き、植木鉢や木製ベンチを置いた。直線だった通りに緩やかなS字カーブを採り入れ、自転車を突っ走れなくするなど、歩行者への配慮が随所にかがわれる。そして、幼児の目線に合わせて「七福神」のモニュメントを設置した。モデルは実在する地元の人であり、「はっちゃん」や「なみちゃん」といった愛称が付いている。



石賀さんの店の倉庫はリノベーション後、「善五郎蔵」になり、お洒落なカフェが営業中。商店街には待望の新規出店も実現し、美容院と子供向け英会話教室が仲間入りした。アーケード撤去で青空が復活し、商店街を苦しめていた電気代も激減。照明にLEDフットライトを導入した結果、電気代は月2000円で済むようになったという。

「ほっしょうじ通り」の再生劇は苦難の連続だったが、今では中心市街地活性化のモデルケースとして注目を集め、全国から商業や行政の関係者が視察に訪れる。石賀さんは「最悪の商店街だったからこそ、公園化を実現できた。『ほかに選択肢がない』ことが最大の武器になる。成功率4割でも、先ずはやってみることが大事ではないか」と話す。商店街は息を吹き返したが、石賀さんは「完成度はまだ6~7割程度。最終的には公園から『森』を目指したい」と目を輝かせている。



衰退していく故郷 私財投じて遊覧船船頭に

米子市内をお手軽に散策するなら、加茂川・中海遊覧船がお勧めである。サケも遡上して来る旧加茂川沿いに白壁土蔵などが残され、中海に出れば米子城址から名峰大山（だいせん）まで一望できる。



半ばボランティアとして、この遊覧船の船頭を務めるのが住田済三郎さん（74）。米子をこよなく愛し、「少子高齢化や都市間競争の中で、故郷が衰退してしまう。何とかしなくちゃ！」と立ち上がった。還暦を過ぎてから船舶免許を取り、私財を投じて200万円の遊覧船を購入した。住田さんのガイドは歴史上の秘話を盛り込んだり、現代の政治を風刺したり…。50分間の遊覧中、退屈することがない。



遊覧船の船頭を務める住田済三郎さん

しかし、取材で訪れたのが昨年11月後半の三連休中にもかかわらず、乗客は筆者も含めて3人だけ。「米子には観光資源があるのに、それを国内外に発信できていない」一。住田さんはこうした現状に我慢ならない。

隣接する境港市は「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な漫画家水木しげる氏の故郷であり、「妖怪」を売りにした町興しで大成功を収めた。住田さんはそれからヒントを得て、河童伝説が残る旧加茂川沿いを全長300メートルの「カッパロード」にしようと孤軍奮闘している。河童のモニュメントはまだ4体だが、「全国から寄付を募り、将来は100体まで増やしたい」一。古希を過ぎてなお意気軒高である。



「生活充実都市」を目指す野坂市長

コンパクトシティ化といった地方再生の舞台裏には、米子に限らず、石賀さんや住田さんのような市民の情熱が必ず存在する。それを行政が見だし、支援していけるかが成功のカギを握っている。「生活充実都市」の実現を掲げる、米子市の野坂康夫市長（2003年就任）に街の将来ビジョンについて聞いた。



米子市の野坂康夫市長

米子市は中心市街地（約300ha）のにぎわいを取り戻すため、その活性化基本計画（第一期2008年11月～2014年3月、第二期2014年4月～2019年3月）を策定し、様々な事業に取り組んできた。しかし自治体にありがちな、再開発の美名の下でのハコモノ造りではない。野坂市長は「身の丈に合った事業に取り組み、それらの『点』と『点』をつないで『線』にしなごら、中心市街地を街の『顔』や『心臓』として復活させたい」と強調する。

中心市街地の中でも、米子市は前述した商店街のほか、図書館・美術館・公会堂などの公共施設、さらに歴史・文化遺産が集中するエリアを「にぎわいトライアングルゾーン」と定め、集客力の拡充や居住性の向上に重点的に取り組んでいる。

閉店した大型書店の建物を修繕・再活用した上で、ブティックや雑貨店に入居してもらい、「米子の代官山（東京都渋谷区）」を目指すプロジェクト。若い起業家を支援するため、情報発信のサテライトスタジオやミュージアムを併設した複合施設。お金をあまりかけなくても、にぎわいを取り戻そうという創意工夫が至る所に見られ、「選択と集中」でシャッター街をコンパクトシティに再生しようという官民の熱意が伝わってくる。



JR米子駅前の「米ッ子合掌像」

こうした中心市街地活性化策は「米子方式」と呼ばれるようになり、全国から注目を集めている。ただし、必ずしも順風満帆というわけでもない。基本計画第一期では、歩行者通行量2万1319人（2007年比5.1%増）を目指したが、実際には1万8744人（2013年）にとどまった。また、市民の憩いの場である湊山公園の入場者数や、旅行者向け下町観光ガイドの利用者数も目標に届いていない。

米子市は企業誘致に力を入れ、15万人規模の人口を必死で維持してきた。だが高齢化の荒波には逆らえず、2040年には11万6000人まで減少する（日本創生会議推計）と予測されており、いかにして観光客などの「滞在人口」を増やすかが課題だ。幸い、この点では米子市には都市間競争力が潜在する。北に日本海、東に大山、西には中海という豊かな自然に恵まれる上、山陰唯一の国際航空路線（米子～ソウル）を有する米子鬼太郎空港のほか、鉄道・高速道路も古くから整備されているからだ。

米子市は島根県の松江、出雲、安来の各市と鳥取県の境港市、西部7町村とともに「中海・宍道湖・大山圏域市長会」を構成している。産業・観光振興の協働や環境保全のほか、圏域内で連携して婚活支援事業を行うなど、県境や市境にとらわれないことなく、幅広い政策課題に取り組む。「市民一人ひとりが豊かな自然を享受しながら、働く場があって、希望と誇りを持って充実した生活を送ることができる街」（野坂市長）という目標の実現に向け、米子市はゆっくりかもしれないが、着実に前進している。



米子市が臨む中海の夕景

（写真）筆者
PENTAX K-50使用

コンパクトシティが地方を救う（第3回）

「100年繁栄」目指す宇都宮市／観光資源が豊かな「坂の街」長崎市

社会構造研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長

中野 哲也

「コンパクトシティ」と言ってもその定義は様々であり、全ての自治体に当てはまる「模範解答」は存在しない。当然、街ごとの実情に即した政策が求められる。平地が大半を占める宇都宮市（栃木県）と、山が迫り坂の多い長崎市（長崎県）の地勢は対照的だが、奇しくも両市は「ネットワーク型コンパクトシティ」を目指している。単なる中心市街の復活にとどまらず、中心と周辺の整備拠点、あるいは拠点同士を公共交通網で結びながら、人口減少・少子高齢化を乗り越えようとしている。今回は個性豊かなこの二つの県都取材して歩いた。

「餃子」が最強の観光コンテンツ 宇都宮市

東京駅から東北新幹線でわずか50分。北関東最大の都市、宇都宮市（人口約51.8万人）の玄関口であるJR宇都宮駅で降りると、ユーモラスな「餃子像」が出迎えてくれる。この街は餃子こそが最強の観光コンテンツであり、市内全域に「餃子」の看板が立ち並ぶ。その数は宇都宮餃子会の加盟店だけで80に上り、非加盟店を加えると350あるいは400に達するといわれる。



宇都宮餃子会が運営する「来らっせ」を訪ね、事務局長の鈴木章弘さん（42）に案内していただいた。ここは幾つかの名店の餃子を同時に楽しめるスポットであり、市民や観光客が月平均2万5000人も集まり、推計月45万個の餃子が飛ぶように売れる。宇都宮餃子の起源には諸説あるが、戦後の中国からの帰還兵や旧南満州鉄道（満鉄）の職員・家族が大陸の味を懐かしみ、当地で再現したらしい。小麦粉や豚肉、ニラ、白菜といった餃子の具材が宇都宮で入手しやすいこともあり、専門店が市内に続々と生まれ、家庭でも定番メニューになった。



宇都宮餃子会の鈴木章弘さん

も。「栄養価が高く、バランスも取れた『完全食』だし、飽きが全く来ないんです」と笑みを浮かべる。

老舗の一つ「宇都宮みんな」の調理場で名人芸を見せてもらう。焼き上げる時間は通常7～8分だが、「その日の天気や温度、湿度、具の野菜の状態によって微妙に違う。納得のいく餃子を提供できるまでには10年かかる」一。蓋をしてしまうから、「ジリジリ」→「チリチリ」といった音の微妙な変化で焼き上がりを判断するしかない。

餃子の一世帯当たり購入額（総務省家計調査）をめぐっては、宇都宮市と浜松市（静岡県）が激しいバトルを演じている。一昨年、宇都宮が3年ぶりの日本一に輝いたが、昨年は浜松がその座を奪還した。しかし、この統計は消費者が惣菜として購入する餃子が対象であり、外食分は含まない。

このため、鈴木さんは「1位でも2位でも気にしない」という。ただし、現状に満足しているわけではない。「“大阪のタコ焼き”“広島のお好み焼き”“札幌の味噌ラーメン”の域にまで、宇都宮餃子の知名度を引き上げたい。そのためには、万事遠慮がちな宇都宮市民が『餃子が大好き！』と胸を張って言えるよう、意識革命を起こさなくては……」一



「SMAP型」コンパクトシティを目指す佐藤市長

宇都宮市の佐藤栄一市長も無論、大の餃子好き。専門店で冷蔵餃子を買に行き、自宅の冷蔵庫で欠かしたことはない。宇都宮市もこれから人口減少が本格化するが、市内には観光資源が乏しいため、餃子を「国内外からの観光客など滞在・交流人口を増やすための武器」に位置付けている。

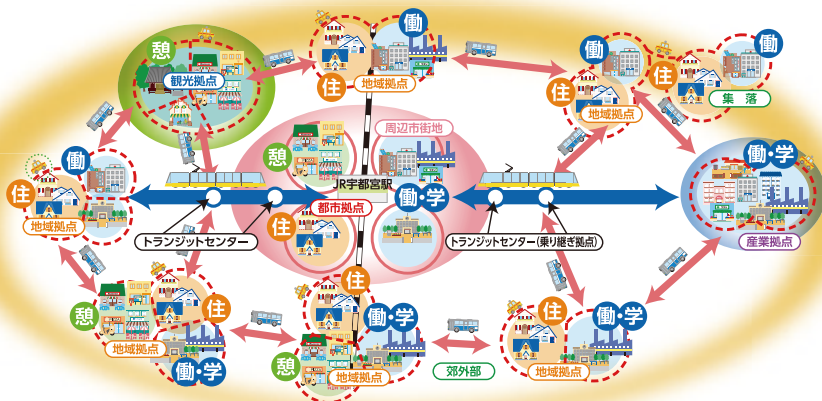
実業界から政界に転じた佐藤市長は向こう5年間、市民の居住性向上に全力を挙げると同時に、「100年繁栄都市」を政策目標に掲げる。短期と長期の「複線」行政である。「市民受けする目先の人気取り政策に走れば、市債残高をいたずらに増やすだけ。財政面でまだ余裕のあるうちに改革を断行する。これは民間企業も同じではないか」と指摘する。



佐藤栄一市長

宇都宮は広い市域（約417km²）を抱える。しかもその8割が平らで「市内各所に人と建物が張り付いている」ため、行政の効率は良くない。少子高齢化が加速すれば尚更だ。そこで佐藤市長が掲げているのが、「ネットワーク型コンパクトシティ」である。中心部を都心拠点、工業団地を産業拠点などと位置付け、拠点間は公共交通で自由に移動できるようにする。

ただし、宇都宮には街を横断する鉄道がなく、JR線で東西に分断されてきた。このため、宇都宮市はJR宇都宮駅東口から東部の工業団地を結ぶLRT（次世代型路面電車）を建設する。来年着工し、東京五輪に間に合うよう2019年開業を予定している。



(提供) 宇都宮市

LRTやバス、オンデマンドタクシーなどによって、佐藤市長は「SMAP」型のコンパクトシティを目指すという。「一人でも十分やっていける5人のメンバーが集まり、強力な国民的アイドルグループを形成している。それにならい、市内の拠点の一つひとつに独自の顔を持たせ、LRTなどで結んでネットワーク化する。それによって強力な光を放つという都市構造を目標にしたい」

東京駅から新幹線で50分という地の利は、宇都宮市に都市間競争力をもたらす。建材として有名な大谷石（おおやいし）の産地である大谷地区など、素敵な観光スポットも抱えているが、東京から近過ぎて「通過都市」になってしまうリスクもある。このため、佐藤市長が先頭に立って「住めば愉快だ宇都宮」というPR作戦を展開。大都市と宇都宮の両方に仕事や暮らしの拠点を置き、そこを行き来しながら、ライフスタイルを充実させるという「ダブルプレイス」（二地域生活）を提唱する。人口減少時代に立ち向かう、意欲的な取り組みとして注目を集めそうだ。



「軍艦島」や「世界新三大夜景」も…長崎市

徳川幕府が断行した鎖国政策の下でも、長崎市の出島だけは外国との接点となり、貿易港として繁栄した。古くから西洋文化が流入したため、市内にはグラバー邸や眼鏡橋など観光客を引き付けるスポットが少なくない。だが恵まれた環境に安住するなら、激化する都市間競争で後れを取る。市は危機感を募らせ、新たな観光資源の開発に取り組んでいる。

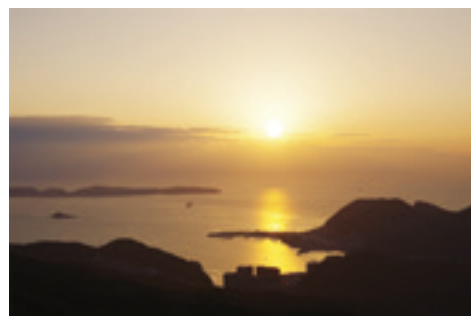


長崎港から南西約19キロの海上に浮かぶ端島（はしま）。その独特な外観から「軍艦島」の通称で呼ばれ、「どうしても上陸したい」という観光客が国内外から集まる。この島は41年前の海底炭鉱閉山で住民が一齐に引き払い、時計の針が止まったまま無人の廃墟と化している。軍艦島では三菱が海底炭鉱として開発を進め、本格操業した1891年から閉山の1974年までに1500万トン超の石炭を掘り出し、日本の近代化に貢献した。

軍艦島は周囲わずか1.2キロの非常に小さな岩礁だが、最盛期には約5300人が住んでいた。1916年に完成した日本初の鉄筋コンクリート造りの高層アパートは、石炭採掘に関わる従業員やその家族向けの社宅。幹部社員用の社宅は小高い丘の上に立ち、「全室オーシャンビュー」のリゾートマンションといった趣である。このほか、学校や採炭施設などが閉山当時のまま遺されており、島全体が「タイムカプセル」。近年、軍艦島が新たな観光資源として注目されるようになり、世界文化遺産への登録運動とともに、アジアからの観光客も急増している。



軍艦島とともに、長崎市が新たな観光コンテンツとして売り込んでいるのが、稲佐山（標高333メートル）からの夜景である。東京タワーほどの高さだが、山に囲まれてすり鉢状の長崎市街を一望できるため、眼下には宝石箱をひっくり返したような光景が広がる。反対側の東シナ海を望む夕景も旅行者のハートをがっちり掴む。長崎が2012年に香港、モナコと並ぶ「世界新三大夜景」に認定されると、中国や韓国などから見物客が押し寄せられるようになった。昨年、長崎に寄港するクルーズ船は過去最高の75隻を記録し、今年は120～130隻が見込まれるという。



「市民の下駄」はどこまで乗っても120円

長崎市は観光資源に恵まれ、その新たな開発も進めながら、交流・滞在人口の増加に努める。だが、定住人口は50万人を割り込んでいる（約43.3万人）。

平らな宇都宮市とは対照的に、長崎市の地形はすり鉢型で平地が少ないため、斜面にも住宅を建てる「坂の街」として繁栄してきた。しかし、日銀長崎支店の佐藤聡一支店長は「高齢化により、坂の多い傾斜地から平地への移住が進みつつある」と課題を挙げる。その一方で、「すり鉢はいわば天然のコンパクトシティ。中心部の街の賑わいや機能性が高まる潜在力がある」と指摘している。



コンパクトシティを目指す上で、長崎市には心強い援軍が存在する。宇都宮市はLRT新設に挑戦しているが、長崎市内には昔ながらの路面電車（長崎電気軌道）が健在なのである。4系統で市街地の各エリアを結び、日中でも5~6分間隔で走っているから、市民にとってはまさに下駄代わりだ。

私企業による経営だが、全区間均一の運賃は1984年から実に25年間も100円のまま据え置き。2009年に120円へ値上げした後、昨春の消費税増税後も変わらない。どこまで乗っても120円、一日乗車券なら500円で何度でも自由に乗降できる。東京都や大阪市、仙台市などから廃止車両を譲り受け、丁寧に修繕した上で使うなど、知恵を働かせて低運賃を維持する。また、市内ではバス路線網も充実しており、地方都市としては運賃が格段に安い。



長崎市の田上富久市長はこうした公共交通網をフル活用しながら、宇都宮市と同様、「ネットワーク型コンパクトシティ」を目指して街づくりを推進している。まずコミュニティにしっかりと自治を求め、自分たちでできなければ隣のコミュニティ、それでも不可能なら中心部に行くというイメージである。

「企業や大学、病院なども含めて全員参加型になる時、最も暮らしやすい長崎独自の街づくりが完成する」一



田上富久市長

例えば、長崎市は全国の県庁所在地の中で市立図書館の整備が最も遅れていたが、ITの活用などにより、「全国で最も効率的で利便性が高い」と自負する図書貸し出しネットワークを築き上げた。大型図書館を市の中心部、それに次ぐ規模の図書室を比較的大きな公民館、小型の図書室を小さな公民館にそれぞれ設置。小さな図書室しかないエリアの住民でも、大型図書館から読みたい本が届くという仕組みである。

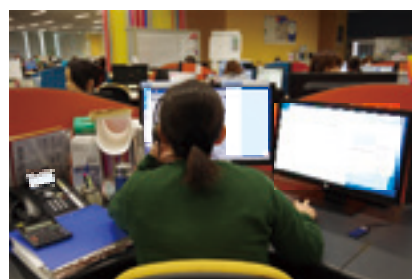
外資系保険会社のコールセンターが集中

田上市長は「長崎には豊かな自然や個性的な文化があり、落ち着ける時間が流れ、人と人の絆も存在する。ただし、仕事がない。『地元に戻りたい』という若者は多いのに、それに応えられるだけの雇用を用意できない」と打ち明ける。「市内に工場を誘致しようとしても、長崎は東京から見れば西の端にあり、水の事情が良くないから、なかなか実現しなかった」一。コンパクトシティを目指す上でも、雇用創出が喫緊の課題である。

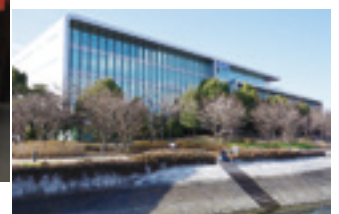
ところが近年、「西の端」という長崎市のデメリットが企業の目にはメリットとして映るようになった。東京一極集中では大規模災害が発生した時、事業を続けられなくなるため、事業継続計画（BCP）の中で一部業務を長崎市内に移管しようというわけだ。とりわけコールセンターの適地として、外資系保険会社の進出が活発化している。人口対比で市内には高校・短大・大学が多いため、優秀な女性の人材を大都市に比べて低い人件費で集めやすいという要因もある。

メットライフ生命保険は長崎ビルを東京、神戸と並ぶコールセンター拠点に位置付け、約1400人を雇用し、うち85%を女性が占める。顧客からの問い合わせから、保険商品の契約、保険料の収納、保険金の支払いまで一貫して対応している。コールセンターのオペレーターは引切りなしに掛かって来る電話をとり、常に明るく丁寧に対応しなくてはならない。このため、オフィスには暖色を基調にしたカラフルなデザインを採用し、オペレーターのストレスを軽減する。また、オペレーター同士の顔が真正面から向き合わず、「互い違い」になるよう席を配置。ストレスを感じず、しかし孤独感も無いような工夫が凝らされている。

オペレーター出身の長崎カスタマーセンターの神谷麻紀センター長は「オペレーターの体調管理に最も気を遣う。家庭環境を把握した上で、顔色が優れなければ『早く帰りなさい』と声を掛けるよう努めている」と話す。このほか、事業所内に託児所を設けるなど、同社は働く女性を強力に支援する。総務・ベンダーマネジメント部総務室の緒方直樹室長は「オペレーターが少しでも快適に仕事ができるよう、オフィス環境には最大限の配慮を行う」という。



(一部修整あり)



「どんなに行政が旗を振り、企業誘致に成功を収めても、市民の間から起業マインドが生まれなければ地方は再生しないし、コンパクトシティも実現しない」一。そう考えながら歩いていると、民間の若い力で故郷を元気にしようという芽を長崎市内で見つけた。

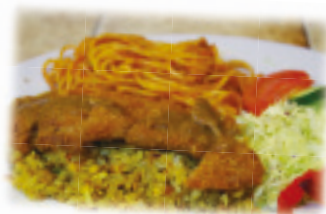
熊井英哲さん（33）は静岡県内でバーテンダーの修行を積んだ後、「女性でも気軽に入れるような英国風パブを故郷の長崎市内で開店したい」と思い立ち、7年前にスコッチウイスキーの「聖地」である英国スコットランドに向かった。あいさつ程度の英語しか話せなかったが、小さな町の観光案内所で宿を紹介してもらいながら、「アポ無し」で蒸留所を30軒以上も回って歩いた。スコッチの長い歴史を学び、製造現場をつぶさに観察しているうち、本場のパブでウイスキー論を展開できるほどの知識と英語力が身に着いた。



熊井英哲さん

2009年夏、長崎市内でバーを開いた後、JR長崎駅前に念願の英国風パブ「Mallaig」（マレイグ）をオープン。今では三店舗のオーナーである。熊井さんはこう確信している。「世界に通用するバーテンダーを一人でも多く育て上げ、店を持たせてやりたい。そうすれば長崎に独自のパブ文化が興り、愛して止まない故郷に恩返しができるはずだ」一。江戸時代以来の異文化に対する長崎市民の好奇心は健在であり、それが街の再生に大いに貢献するだろう。

（写真）筆者
PENTAX K-50使用



コンパクトシティが地方を救う（第4回）

進化を続ける「ものづくり」 三条市（新潟県）／小田原市（神奈川県）

社会構造研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長

中野 哲也

少子高齢化が加速し、財政事情も厳しさを増す中、地方行政の効率化は避けられない。各地の自治体がコンパクトシティ政策を推進・検討しているのもその一環である。ただし、それだけで地方が生き残れるわけではない。中心市街地を活性化しても、あるいは中心地と郊外の各拠点をそれぞれ効率化した上でネットワーク化しても、持続可能な産業がなければ都市は衰退してしまう。地方再生の主役はあくまで民の力であり、今回は伝統的な「ものづくり」を進化させることにより、生き残りを目指している三条市（新潟県）と小田原市（神奈川県）を訪ねた。

農閑期の鍛冶が「金物の街」に発展 三条市

新潟県の中央部に位置する三条市（人口約10.1万人）には、日本最長の信濃川のほか五十嵐川や川谷田川が流れ、日本有数の稲作地帯をもたらした。半面、河川の氾濫で深刻な水害がたびたび起こり、農民は困窮していた。そこで江戸時代の代官が江戸から釘職人を招き、雪深い農閑期の副業として鍛冶を導入する。河川を活用した水運により、鍛冶関連の商業や物流も発展。三条は包丁や鋏（はさみ）など「金物の街」として繁栄し、今も真摯（しんし）な「ものづくり」が産業の大黒柱である。



創業1926年（大正15年）の諏訪田製作所を訪ね、匠（たくみ）の技を取材した。切れ味抜群の「高級爪切り」を主力に、「SUWADA」ブランドは海外でも卓越した評価を受ける。その秘密は「切れる」を極限まで追求する経営哲学にあった。工場の中では、84歳から20代まで老若男女の職人集団が黙々と作業を続け、その背中は独特のオーラを発する。三条鍛冶の伝統、あるいは職人の意地がにじみ出る。



仕入れた鋼材を1000℃以上で熱し、400トンという強大な圧力で叩き上げると、ようやく爪切りの刃に最適な材料に生まれ変わる。苦勞して鍛造したのに、その七割を捨ててしまうほど、職人は材質にこだわり続けてきた。鍛造された材料は職人の手で何度も何度も削られ、50もの工程を経て一つの爪切りが出来上がる。

その命である刃は、極薄く慎重に仕上げたもの。「100分の1ミリの半分」という作業精度を実現できる手段は、熟練職人の「目」しかない。完成した爪切りはピカピカに磨き上げられ、最高級6万4800円の商品は「爪切りのロールスロイス」と呼ばれる。もはや「道具」の域を超え、「芸術品」の香りが漂う。

しかし、爪切り業界の頂点に立つまで、諏訪田製作所は茨（いばら）の道を歩んできた。三代目の小林知行社長（52）が父から引き継いだ20年前、日本経済のバブルは崩壊し、同社も多額の借金を背負っていた。何より経営が近代化しておらず、例えば同社には商品の希望小売価格の決定権がなく、全て問屋の言いなりだったという。

小林さんは「利益を確保できなければ、会社に明日はない」と危機感を募らせ、問屋の頭越しに小売店や最終ユーザーを一軒一軒歩いて回った。「いくらなら買ってくれますか」と尋ね、聴いた価格で売るようにしたのである。一方、問屋は面白くないが、確実に売れるから受け入れざるを得ない。同社は問屋を通すやり方を維持しながらも、次第に価格決定権を握れるようになった。



100円ショップで爪切りが買える時代、小林さんは逆転の発想で市場創造に取り組み、それに社運を賭けた。一つ1万円の爪切りを開発・投入したのである。その切れ味はプロから称賛され、国内のネイルサロンでは圧倒的なシェアを誇る。欧州でも評判になり、今や売上高のうち海外向けが2割に迫る。実は、先に紹介した6万4800円の「ロールスロイス」は一つ売れると30万円もの赤字なのだが、小林さんは「フラッグシップがあるからこそ、職人がヤル気を維持してくれる」と意に介さない。



諏訪田製作所の小林知行社長

小林さんは職人も含め社員50人が会社の決算書を読むようにしており、「会社がどうやって利益を上げ、そのうち幾らが給料に回っているか」を叩き込み、一人当たり1000万円を超える売上高を確保している。その賃金制度は「上手な人が高く、下手な人は安い」という極めてシンプルなもの。小林さんの経営手法には、トヨタ自動車など巨大企業も引きつけられ、年間2万人が視察にやって来る。

スノーピークの本社敷地は東京ドーム4個分

三条市街から車で40分ほど進んでいくと、草木以外何もない山間に突然、瀟洒（しょうしゃ）な建物が現れた。キャンプ用を中心にアウトドア製品全般の開発・生産・販売を展開している、スノーピークの本社である。東京ドーム約4個分という大草原には、本社や工場、直営店、広大なキャンプ場が設けられている。スノーピークのブランドを愛して止まないファンが全国から集まり、大自然の中でキャンプを満喫する。

同社は、三条市で金物問屋として創業。登山家だった創業者はアウトドア製品を手掛けるようになり、オートキャンプブームを牽引した。



その後「焚き火台」などのヒット商品を生み出し、アパレル製品にも進出しながら、ブランド力の向上に努めている。三条で本社機能を維持しながら、東京と大阪に営業所を設けて取扱店を全国拡大中。海外展開にも注力し、米国や韓国、台湾に拠点を設置。2014年12月には東証マザーズ上場を果たした。

スノーピークの価格設定はライバル社に比べて高めともいわれるが、総務課マネージャーの大島秀俊さんは「当社のモットーは『感動品質』の追求であり、その反対が『失望品質』になる。付加価値が高ければ、値段が高くてもお客様は購入してくださいと信じている」と話す。強風で簡単に吹き飛ばされてしまう安いテントでは、顧客のニーズを満たせないというわけだ。

「金物の街」という地の利もフルに活用している。キャンプでの調理に重宝なダッチオーブンでは、地元の鋳物成型技術を導入した「極薄鋳鉄」シリーズを開発。薄くて軽くても衝撃に強い。このほか、三条市内の業者に生産を委託するなど、スノーピークは地元との協調を重視している。



「カレーラーメン」が鍛冶職人の活力源

三条鍛冶は「カレーラーメン」というユニークな食文化も育んだ。70年余の歴史を誇り、今も市内では約70店舗が提供しており、昨今の粗製乱造のB級グルメとは一線を画す。チキン、ビーフ、カツ、激辛、さっぱり、汁無し、フルーツ、トマト、黒（竹炭）…。味や素材、スタイルは店によって様々である。この中で創業以来50年、「昭和の味」を守り続ける味方屋（あじかたや）で店主の佐藤博保さん（76）を取材した。

それにしても、なぜ三条でカレーラーメンなのか。以下のような説が有からしい。鍛冶職人は汗だくの作業を強いられ、塩分補給を欠かせない。ところが、早朝から深夜まで働き詰めだったから、外食する時間はない。このため、塩分とカロリーを十分取れるカレーラーメンが考案され、職人が出前で注文するようになった…



佐藤さんは父から店を引き継いだ半世紀前、カレーラーメンを始めた。「普通のラーメンが一杯30~40円の時代、カレーラーメンは10円増し。鍛冶屋にとってはささやかな贅沢だったんだよ。辛いから夏でも食欲が湧くし、逆に雪深い冬は体が温まるしね。毎日毎日、出前の連続で本当に忙しかった…」

佐藤さんのカレーラーメンは正統派といえるだろう。調理場で秘伝のレシピを教えてもらおうと、ラーメンスープは鰹節やニンニク、タマネギ、長ネギなど数十種類の食材で出汁をとっていた。一方、カレーソースは業務用ルーを使うが、大量のタマネギで甘みを出した上で、豚肉、ニンジン、ジャガイモを加える。隠し味はトマトケチャップと日本酒である。最初の一口は甘く感じるが、やがて「ピリッ」という辛さが口の中に広がる。



カレーラーメン一筋50年の佐藤博保さん



帰り際、「いつかまた寄らせてもらいます」と言うと、佐藤さんは「息子二人が東京と仙台で仕事しているんだ。店は今年いっぱい閉めるかも…」一。「昭和の味」がまた一つ消えてしまうのか…

「脱下請け」中小企業に価格決定力を！ 國定市長

三条市の國定勇人（くにさだ・いさと）市長は42歳の若きリーダーである。郵政省キャリア官僚だったが、三条市役所出向時代にもものづくりと大自然が共存する街に魅せられ、2006年の市長選に挑んだ。34歳で当選して全国最年少市長（当時）となり、既に3期目。家族とともに移り住み、豊かな自然とカレーラーメンをこよなく愛する。

三条市は元々、76km²の面積に約8.4万人が暮らし、ものづくりを中心にコンパクトシティの性格が強かった。ところが、平成の大合併で旧下田町などと一緒にになった結果、市域が432km²まで一気に拡大した。人口は10万人程度にしか増えていないから、行政は効率性の面で課題を抱える。國定市長は「ものづくりのエリア、高齢化が加速する“まちなか”、自然に恵まれた過疎化地域をそれぞれ維持する。あえて『多極分散型社会の堅持』を打ちだし、それぞれの極がコンパクトになるよう目指していけば、その結果としてネットワーク型コンパクトシティの概念に近づくだらう」一



2008年のリーマン・ショック後、國定市長は三条の大黒柱であるものづくりに大きな疑問を抱いた。「自動車産業が冷え込むと、金属加工業を中心とするこの街の生産もパタッとストップした」からである。実はこれまで、地元経営者は「川上（＝取引先）は多種多様。一つが倒れてもほかが生き残っているから、中小企業は総体として地盤沈下することはない」と口を揃えていた。しかし、リーマン・ショックはそれが“都市伝説”にすぎないことを証明し、市長の期待は「見事なまでに裏切られた」一

國定市長は「自動車産業への依存度を下げて取引先を多様化し、同時に下請け構造からの脱却を実現しない限り、ものづくりに明日はない」と判断し、中小企業の再生を急いだ。とりわけ、諏訪田製作所が自力で実現したような「価格決定力」の確保である。「親元から『景気が悪くて…』『為替が円高だから…』と言われてしまい、中小企業は値切り交渉で負けの連続だった」一

例えば、包丁メーカーが「屑のこぼれないパン切包丁」を開発するため、三条市は同社が受ける民間コンサルティングの費用を財政支援。その代わりに、対象企業の財務状況や在庫管理などをオープンにし、その改善プロセスや成果を他の業者が共有できるようにした。「『一番星』を目指す企業はリスクをとっているのだから、その挑戦には正々堂々と公金を使う」一

ものづくりが抱えている閉鎖性や後継者不足といった問題を改善するため、國定市長は地元企業の製造現場を一般公開する「工場の祭典」を開くほか、子供向け職業訓練テーマパークを運営するキッズニアと連携して市内小中学生にものづくりを体験させている。「日本の理系は研究主体であり、技能を体系化して実学に昇華させている大学がない」と考え、「ものづくり大学」の創設も視野に入れる。

「総理大臣ではないから、『この街さえ生き残っていければよい』と割り切れることが、市長や地方行政という仕事の良さ。それぞれの市町村がこういう考え方をすれば、日本全体として前進できる」一。部分最適は全体最悪を招くと考えがちだが、課題設定と政策手段が妥当であれば、全体最適を実現できるかもしれない。閉塞感が強まる一方の政治や巨大組織の現状を打開する一つのヒントを、ものづくりの街で見つけることができた。



三条市の國定勇人市長

（写真）筆者
PENTAX K-50

再生可能エネルギーの“聖地” 小田原市



コンパクトシティに似た概念は、古くからこの国に存在していた。例えば、戦国～江戸時代の「城下町」である。領主の居城を中心とする防衛機能のほか、エリアごとに行行政や商工業の施設が集まり、小さくても機能的で個性豊かな都市が形成されていた。その幾つかは

今も当時の街並みを受け継いでおり、神奈川県小田原市（人口約19.4万人）もその一つ。武士や町人が活躍した時代の香りが漂い、歩いているだけで楽しくなる街である。

神奈川県の西部に位置する小田原市は戦国時代、北条氏の城下町として繁栄した。江戸から東海道を西進すると、箱根越え直前の宿場町となり、江戸時代に重要性が増す。今もJR東海道新幹線や東海道本線、小田急電鉄、箱根登山鉄道、伊豆箱根鉄道が



乗り入れる交通の要衝である。山と海の幸に恵まれ、蒲鉾（かまぼこ）のほか、干物、梅干し、提灯（ちょうちん）、寄木細工など競争力の高い名産品も少なくない。

この街のシンボルは小田原城の天守閣である。北条時代、「難攻不落」と恐れられ、上杉謙信や武田信玄の軍勢を跳ね返した名城。現在の天守閣は1960年に復元されたものだが、その優美な姿は武士の誇りを映し出している。また、市内の見る場所によって、あるいは時刻によって受ける印象が変わり、城マニアでなくても何度でも見たくなる天守閣である。



創業150年の鈴廣「老舗にあって老舗にあらず」

今年で創業150年の鈴廣かまぼこは、小田原を代表する蒲鉾の老舗（しにせ）。市内風祭に「かまぼこの里」を建設。本社、工場のほか、手づくり体験コーナーを併設するかまぼこ博物館、古民家風のレストラン、ありとあらゆる蒲鉾を扱う売店などが集積する。蒲鉾のテーマパークのような趣であり、取材当日は平日にもかかわらず、観光客が朝から詰め掛けていた。

「老舗にあって、老舗にあらず」一。これは鈴廣の揺るぎない社是である。同社の代表取締役副社長で小田原商工会議所会頭も務める鈴木悌介（すすき・ていすけ）氏にその意味を解説していただいた。

(1) 150年前も今日も変わらないのは、鈴廣のかまぼこを召し上がりたくて、お金をくださるお客様がいらっしゃるということ。お客様のいない商いは存在しないし、お客様や世の中の役に立つからこそ商いは存在を許される。

(2) 「老舗にあって」=どんなに時代が変わっても、商売には変えてはいけないものがあり、頑固に守り抜いていく。それはお客様の真正面を向いて仕事をする姿勢である。

(3) 「老舗にあらず」=その一方で、勇気をもって変えなくてはならないものもある。お客様の嗜好や技術革新、自然環境、原料事情などの変化を見極め、仕事のやり方はどんどん変えていく。変えていかないと、本来守るべきものを守れない。

(4) 「老舗にあって」と「老舗にあらず」は50%ずつバランスを取るのではなく、両方とも欲張りに100%を目指して商売する。



鈴廣の新社屋（建設中）と鈴木悌介代表取締役副社長



世の中の大半の企業が「顧客志向」を標榜しているが、実際には供給側の論理が優先してしまい、掛け声倒れに終わっているケースも多々ある。しかし、鈴廣の社は蒲鉾一筋で150年の歴史という結果を出しており、説得力がある。しかも、「お客様第一」という究極の目標を実現するために、古いやり方に固執することなく、常に新しいものを採り入れている。伝統を守りたいからこそ、「創造的破壊」に絶えず挑んできたのだろう。

例えば、鈴廣は現在、蒲鉾に保存料や化学調味料を一切使用していない。工場内や従業員の衛生管理を徹底することにより、保存料を使う他社製品に劣らない日持ちを実現できたからである。鈴木氏は「食う」という行為を、「人間の身勝手な理由で生き物の命を使うこと」と定義する。だから、「日本人は食事の前に『（あなたの命を）いただきます』と感謝の言葉を発する」一

また、鈴木氏にとって食品産業とは、「生き物の命をお客様に移し替えること」である。このため、「命を捻じ曲げたり、歪（いびつ）にしたりしてはいけない」一。そう考えると、確かに保存料などは使えなくなってしまう。

さらに、鈴木氏は「食」という漢字を「人」を「良」くすると分解し、「食べ物を口にする人が健康になってもらい、幸せになってもらうことこそ食品産業の使命」と確信している。出張以外は必ず毎日20~30種類の自社製品を味見し、鈴木氏は微妙な変化がないか確認する。「味づくりは毎日が勝負です」一

今夏竣工の新社 エネルギー消費量を54%削減

鈴木氏独自の経営哲学は食にとどまらず、対象をエネルギーの領域にまで拡大する。東日本大震災と東京電力福島第1原発事故を受け、同氏は日本のエネルギー政策について「これはヤバイ」と痛感した。また、計画停電によって鈴廣も15%節電が義務付けられ、蒲鉾というナマモノを生産する同社に死活問題が発生する。

しかし、鈴木氏は危機を好機ととらえ、「原発に依存しなくてよい水準まで節電しよう」と決断。10の製造ライン（5日操業、2日休業）を7つに減らし、週7日間フル稼働させた。それにより生産量を維持しながら、ピーク時の電力使用量を引き下げたのである。また、レストランの空調設備には井戸水と地中熱を使うシステムを導入。真夏に35℃になる外気を井戸水の中に通し、25℃程度にまで冷やす。逆に、冬は外気を地中熱で温める。結果、空調の負荷を大幅に軽減することができた。

こうした企業努力により、鈴廣は電力の原発依存度（東日本大震災前）に匹敵する20~25%の節電を実現した。今年8月竣工予定の新社ビルでは井戸水の活用に加え、断熱壁や二重窓ガラス、自然光の活用など節電対策を一層強化し、エネルギー消費量の54%削減を目指している。

日本商工会議所青年部会長を歴任した鈴木氏は、全国の中小企業経営者をつなぐネットワークを築いている。それを利用しながら2012年3月、再生可能エネルギーによる地域のエネルギー自給体制の確立などを目指す「エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議」（エネ経会議）を旗揚げし、代表理事に就任した。地元の小田原市では「ほうとくエネルギー」という発電会社を設立。メガソーラーのほか、小学校の屋根などを借りてソーラー発電を始めている。

「エネ経会議」の会員は350人に増え、「ほうとく」のような地産型の発電会社も全国で60を数える。ただし、鈴木氏は「原発は不要。だが、単なる反対運動はしない」と語る。危機に対して脆弱な中央集権型ではなく、分散型のエネルギー社会の実現が目標なのである。取材中、鈴木氏の口は”機関銃”になり、アイデアを次々に発していた。だが、それを実現してしまう行動力こそが最強の武器であり、最大の魅力である。創造的破壊によって「老舗にあって、老舗にあらず」という社是をしっかり守りながら、鈴廣は創業200年に向けて歩み出した。



(写真) 筆者 PENTAX K-50

コンパクトシティが地方を救う（第5回）

サハリン交流に懸ける最北端の街 稚内市（北海道）

産業・社会研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

今年8月半ば、記録的な猛暑が続いていた東京を飛びだし、宗谷岬（北海道稚内市）を目指した。現地に着くと寒暖計は16度を示していたが、強風が吹きつけてくるから、体感温度はもっと低い。日本が実効支配する国土では最北端に位置するため、真夏でも肌寒いわけだ。海の向こう側には大きな島、すなわちロシア領サハリン（旧樺太）が浮かんでいる。その間わずか43キロ。サハリンは歴史上、日露両国の威信と権益と武力が衝突する舞台となり、日本側の「玄関口」である稚内も翻弄（ほんろう）されてきた。

樺太を「島」と確認した間宮林蔵

19世紀初め、欧米各国が植民地政策を展開する中、徳川幕府はロシアの南下を恐れていた。しかし、幕府は自らの鎖国政策によって情報流入を極端に制限していたから、ロシアに関する知識に乏



しい。正確な地図がないため、領土や領海の境界もはっきりしない。例えば、古くから樺太の存在は知られていたものの、それがユーラシア大陸につながる「半島」か、あるいは切り離された「島」なのか。激しい論争が起こっていた。

このため、幕府は間宮林蔵らに樺太を探検するよう命じた。間宮は農家に生まれたが、算術や測量の特異な能力を見いだされ、厳格な身分制度の時代にもかかわらず、幕府の下役人として抜擢されていた。間宮は後に日本全図を作成した伊能忠敬に測量技術を学んだ上で、幕府隠密として稚内から樺太へ渡航する。ロシアに決して察知されてはならない極秘の探検だった。

氷点下の厳しい寒さと未知の大自然に対する恐怖を乗り越え、間宮は1809年に樺太縦断に成功。それが「島」であることを確認し、論争に終止符を打った。だから、世界地図ではユーラシア大陸とサハリンの間の海が「間宮海峡」と記されているのである。



「これが最後です。さようなら、さようなら…」

樺太とその周辺海域は水産物や鉱物の宝庫と目されていたから、日露関係にはたびたび軋轢（あつれき）が生じた。ようやく1875年に交換条約が締結され、ロシアが樺太を編入する一方で、日本は千島（ちしま）を領土とする。しかし、日露戦争で明治政府が勝利を収めると、樺太は南北で分断され、日本は北緯50度以南の南樺太を獲得した。鉄道が敷かれて鉱工業や漁業が発展し、南樺太の人口は最盛期に40万人を突破。同時に、稚内はその「玄関口」となり、資機材の供給基地として急速に発展を遂げた。



ところが、ソ連は太平洋戦争末期の1945年8月8日、日ソ中立条約を一方的に破棄した。南樺太に侵攻し、罪なき命を奪い続ける。郵便局で電話交換に従事していた若い女性9人は最期まで職場を離れず、ソ連兵が迫り来る中、「皆さん、これが最後です。さようなら、さようなら…」一。全員が青酸カリを服毒して自決したのは、終戦から既に5日が過ぎた8月20日のことだった。



戦後のサンフランシスコ講和条約によって、日本は南樺太の領有権を放棄した。ただし、ソ連が署名しなかったため、日本政府は南樺太の帰属について国際法上「未確定」の立場をとるが、今もロシアがサハリン州として実効支配を続けている。



日本の南サハリン放棄とともに、戦後の稚内は「玄関口」の機能を喪失した。だが幸い、日本海とオホーツク海に挟まれ、豊かな漁場に恵まれていた。戦後、稚内は北洋漁業の基地となり、ニシンやサケ、マス、タラ、カニなどを大量に水揚げする、国内有数の漁業の街として栄えるようになる。

ところが、ソ連が1975年に200海里漁業専管水域の設定を宣言すると、北洋漁業は壊滅的な打撃を受けた。止むなく稚内の漁業関係者はソ連からのカニ輸入に生き残りを懸ける。しかし、ソ連がロシアに変わると、今度は資源保護政策が厳しくなり、再び稚内漁業は窮地に追い込まれた。街は衰退して過疎化との戦いが始まり、人口は最盛期の5.5万人から今では3.6万人まで減っている。



対サハリン「草の根外交」に踏み切った稚内市

宗谷海峡を挟んで大国ロシアと対峙する地勢は稚内の宿命であり、それが最北の街を翻弄してきた。そこで街の人々は発想を転換し、目と鼻の先に浮かぶサハリンを「経済資源」として活用しようと考えた。

前述したように、ソ連がサンフランシスコ講和条約に署名せず、日本とロシアは未だに平和条約を締結していない。一方、稚内市はサハリンとの文化交流に踏み切り、1972年にネベリスク市と友好都市協定を結んだ。今ではコルサコフ、ユジノサハリンスク両市とも友好都市であり、国家レベルとは別の次元で「草の根外交」を独自に推進している。サハリンとの交流は経済分野に拡大し、その象徴である定期航路のフェリーが夏場、稚内～コルサコフ間を5時間半で結んでいる。



稚内の街中を歩けば、道路標識や店の看板などにロシア語の表記が目につく。市内唯一のロシア料理店「ペチカ」を訪ねると、サハリン出身の女性シェフが腕を振るっていた。彼女は「北海道の新鮮な食材を使い、サハリンの家庭料理と全く同じ味を再現できる」と自信を示し、市民もボルシチに舌鼓を打つ。日本で最も身近にロシアを感じられる街、それが稚内である。



稚内市の粘り強い努力が実を結び、サハリン交流の経済効果は年間3億円を超える。しかし、定期船を運航していた民間業者が撤退を表明するなど、先行きは予断を許さない。市は第3セクター方式で定期船を存続させるとともに、首都圏などでのサハリン航路の知名度アップを目指し、PR活動を強化する方針だ。

サハリン交流の旗振り役を務める稚内市の工藤広市長は、毎年のように現地を訪れ、独自の人脈を築き上げている。最近ではロシア人の日本食に対する関心をひしひしと感じており、「スイカやメロン、タマネギといった農産物の輸出が期待できる」と話す。



稚内市の工藤広市長



お年寄りが歩いて生活できる駅再開発

人口が3.6万人まで減少した稚内市だが、市域は761km²に達する。面積は仙台市（宮城県）とほぼ同じで、人口は30分の1に過ぎない。1970年代、市主導で郊外に団地が造成される一方で、中心部が空洞化する「ドーナツ現象」が加速した。しかし、お年寄りは郊外には住みづらくなり、市は高齢化に対応した街づくりへの転換を図り、その切り札としてエリアごとにコンパクトシティの実現を目指している。

ただし、稚内市のサハリン交流政策は必ずしも順風満帆というわけではない。市のサハリン課によると、サハリン大陸棚の石油・天然ガス開発（サハリン・プロジェクト）の最盛期には、定期船の年間輸送量が貨物約7000トン、旅客約6000人に上った。しかし、今ではそれぞれ1000トン弱、約4500人まで減っている。このため、稚内市は市内に2泊以上するサハリンからの来航客に対し、フェリー運賃4万円のうち1.5万円を補助。また、市内の業者がサハリンに輸出する際は、1件当たり5万円を支給するなど、交流拡大を積極的に支援している。



例えば、中心部の再開発で誕生した「キタカラ」にはJR稚内駅や道の駅、バスターミナルのほか、市内で22年ぶりに復活した映画館、飲食店、物販店、コンビニなどが集積。さらに、高齢者向けのグループホームやサービス付き住宅も併設されており、工藤市長は「北海道は国内有数のクルマ社会だが、お年寄りが歩いて生活できるエリアを実現した」という。



市内には日本最北端の宗谷岬をはじめ、夕日が素晴らしいノシャップ岬、70本もの円柱が連なる北防波堤ドーム、海拔240メートルの開基百年記念塔…。予想以上に見所が多いし、もちろん随所で新鮮な海と山の幸を存分に楽しめる。



(写真) 筆者
PENTAX
K-S2使用

工藤市長はこうした観光資源で交流人口の拡大を目指す一方で、「環境の稚内」も売り込んでいる。一年中強い風が吹きつける稚内は「風力発電の最適地」とも指摘されており、氷河期に形成された宗谷丘陵には国内最大級の風車群がある。また、東京ドーム約3個分の敷地に太陽光パネルを敷き詰めたメガソーラー発電所も稼働している。

風車は増設が予定されており、再生可能エネルギーだけで市内の電力需要を賄える計算になる。また、近隣地域への電力供給に向け、国に働き掛けて送電網の整備も進める。工藤市長は「企業には稚内を環境技術の研究開発に活用してもらい、将来は環境関連産業の集積地を目指したい」と期待している。

日本の未来の担い手は子供たち。それなのに全国で少子化に歯止めが掛からず、稚内市もその例外ではない。しかし、この街は市民ぐるみで取り組む「子育て運動」を展開し、たくましい子供たちを育て続けている。その中で生まれたものに「南中ソーラン」がある。アップテンポに編曲した民謡「ソーラン節」に合わせ、子供たちがチームを組んで熱く激しく踊るのだ。

8月22日、市内の公園では南中ソーラン全国交流祭が開かれ、幼児から小学生、中学生まで約1500人が自慢の踊りを披露した。小中合わせて15人しかいない学校は、中学生が小学1年生を優しく導きながら、心を一つにして踊りまくる。離島から駆けつけた日本最北の中学校の生徒は、EXILEのようにカッコ良く演じ切り、観衆から喝采を浴びていた。子どもたちは皆、一心不乱に南中ソーランを踊りながら、「遠い、寒い、雪が多いというハンディキャップ」(工藤市長)を吹き飛ばすパワーだ。その真剣な顔はどれもキラリと光り、無限の可能性を感じた。

コンパクトシティが地方を救う（第6回） 「龍馬」こそ最強コンテンツ 高知市（高知県）

産業・社会研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

太平洋に臨む高知市・桂浜。荒波が岩礁に激突するたび、純白の飛沫（しぶき）が宙を舞う。その先には青い海原が果てしなく広がり、水平線が地球の丸さを証明するだけ…。しかし、この幕末の志士には「何か」が見えていた。坂本龍馬は歴史の偶然と必然の間を全力で疾走し、近代日本の起点となる大政奉還を実現した。だがその直後、京都で暗殺されてしまう。33年間の生涯はあまりに短く劇的であり、謎にも包まれている。時空を超えて輝き続けるアイコンとして、龍馬は今なお日本人の心をつかんで離さない。

龍馬が生まれ育った高知市には一年中、国内外のファンが押し寄せている。まるで巡礼者が聖地を訪れるかのように…。だから、この街は龍馬を「キラークンテンツ」として最大限に活用する。冒頭の桂浜をはじめ、高知龍馬空港やJR高知駅、商店街など至る所で、「龍馬」が来訪客を出迎える。生誕地では市が「龍馬の生まれたまち記念館」を運営し、日本郵政は「龍馬郵便局」を営業する。高知県も桂浜に「坂本龍馬記念館」を開設し、「リョーマの休日」と名づけた観光キャンペーンを展開している。

歴史上の人物に対し、行政がこれほど関与するケースは珍しい。高知市の岡崎誠也市長も「高知県外の方からは、『龍馬に頼り過ぎではないか』と怒られますが…」と苦笑する。だが、看板を降ろす気は毛頭ない。「歴史上のヒーローはたくさんいるが、常に若いファン層の再生産が続いているのは龍馬だけ。いつの時代も『龍馬大好き!』という子供はたくさんいるが、『織田信長が好きや』という子は…。姉から可愛がられて育った龍馬の本質は家族愛にあり、それを子供は本能的に分かるのではないか」



岡崎誠也・高知市長



「酒は呑むべし」の市民性でグルメ王国に

市内を歩き始めると、この街の人々が龍馬に限らず、歴史をこよなく愛し、大切にしてきたことに気づく。高知城は天守閣や追手門といった本丸の構造物が、江戸中期に再建された姿のままで保存されている。追手門からの路上では1.3キロにわたり、300年以上の歴史がある「日曜市」が毎週開かれる。終日営まれる路上市としては国内最大。400店超がテントに入り、毎回約1.5万人を集める。季節の野菜・果物・海産物から、骨董品、植木、金魚まで、「人間以外、全てのものを売っている」といわれる品揃えだ。



高知城の追手門と天守閣



山内一豊像

「酒は呑むべし」という龍馬の教えを守り、高知の人は実によく飲む。岡崎市長が「儲かってもすぐ飲んでしまい、蓄財しない市民性」と解説するほどだ。中心部にある「ひろめ市場」は和食・洋食・中華の店から好きなものを注文できる、巨大なフードコート。地元の人に観光客が加わり、昼間から「乾杯！」一。人懐っこい土佐っ子は、見知らぬ者ともすぐ仲良くなる。

藁（わら）で豪快に焼き上げられたカツオのタタキは実に香ばしい。すっきりした口当たりの地酒がぐいぐい進んでしまう。魚に限らず、鳥料理や屋台ギョウザ、市民のおやつ「帽子パン」など、味覚水準の極めて高いグルメ王国なのである。

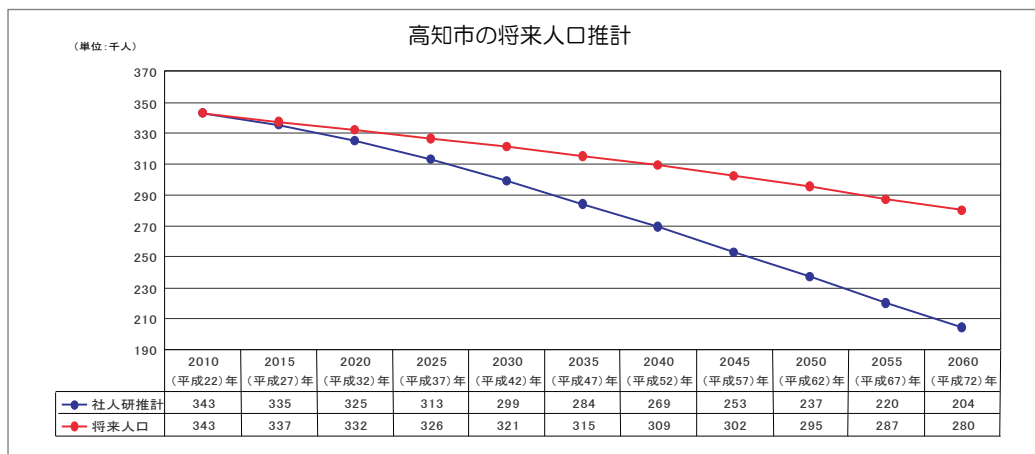


移住事業で28万人死守！中山間部に「一貫校」

高知市の人口は33.8万人に達し、県内人口（73.1万人）の46%が集中する。県内第2位の南国市（4.8万人）の7倍であり、日本の地方都市では仙台市（宮城県）や京都市（京都府）などと並んで典型的な「プライメイトシティ」（2位以下を大きく引き離す一極集中型の都市）といわれる。

しかし、プライメイトシティの高知市であっても、少子高齢化の荒波からは逃れられない。国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の推計によると、市の人口は2010～2060年の半世紀に34.4万人から20.4万人まで激減し、岡崎市長は「推計通りならば、経済も社会保障も維持できない」と危機感をあらわにする。

このため、高知市は2060年の目標人口を28万人に設定し、それを死守するため、独自の政策を積極的に展開している。その三本柱が、①合計特殊出生率の上昇（2013年1.46→2019年1.60→2035年2.07）②死亡率の改善③転出超過の抑制・移住の促進一である。社人研の推計20.4万人+①4.4万人増加+②0.7万人増加+③2.4万人増加≒28万人という計算になる。



(提供) 高知市

①の具体策として高知市は全国の県庁所在地で初めて、第二子の保育料の無償化に踏み切った。年間3億円近くもかかり、市にとって小さな額ではない。しかし、岡崎市長は「親の経済負担が大きいから、子供が増えない。本来は国がやるべきだが、やってくれないので先行して取り組んでいる。そのうち、国が追いついてくるのではないかと指摘する。②に関しては男性の死亡率を全国平均レベルまで改善し、「子供から高齢者まで暮らしを支援する街づくり」を推進している。

③では移住事業が非常にユニークである。子育て世帯の移住を促すため、中山間地域に小中一貫教育校「土佐山学舎」を開校。通常の6・3制ではなく、4・3・2制（前期＝夢を描く、中期＝自分を見つめる、後期＝道を拓く）を採用し、前期1年生（＝小1）から英語を習い、後期9年生（＝中3）で英検2級（高校卒業程度の英語力）の合格を目指す。電子黒板やタブレットをフル活用する一方で、中山間地域の地元住民が学校運営に参画する。市街地から通う生徒のため、スクールバスも用意した。全校生徒98人で発足後、予想以上の人気を博し、地域外の子供の入学は抽選になった。今春130人前後まで増やし、将来は200人規模を目指すという。

この小中一貫教育に注目が集まり、「土佐山学舎」周辺の空き家はほとんど無くなった。そこで高知市はこの地域に市営住宅を10戸建てたが、すぐ満室になり、2016年度に増設する予定。また、中山間地域への移住希望者を対象に、市は体験滞在施設「しいの木」も開設した。1室1泊1080円（最初2泊は各3240円）で最長6カ月借りられる「お試し住宅」である。ここを生活拠点として地域住民と交流を重ねた上で、移住を決断できる。昨夏オープンしたばかりだが、施設の稼働率は60%を超える。

高知市は2014年4月に移住・定住促進室を設け、この事業に本腰を入れた。子育て世代のほか、世界各地を転戦してきたプロサーファーや和紙・染物の職人など、多彩な人材を引きつけており、昨年度だけで112組（118人）が市内に移住した。向こう3年以内に年間200組（400～450人）の移住を実現し、人口減を少しでも食い止めようと懸命な努力を続けている。

高知市の対策は創造性に富み、レベルが非常に高い。自治体としては精一杯だと思う。だが前述した通り、それでさえ50年間で6万人も減ってしまう。となると、ある程度の人口減を前提として、一人当たりの生産性をいかにして高めていくのか。従来発想の延長線上では対処できず、この国の社会システムを土台から改革しなくてはならない。自治体や地域の自助努力だけでは、もはや限界ではないだろうか。

日本最古の路面電車は危機を乗り越えたが…

少子高齢化が加速する中、多くの自治体が行政コストの削減を目指し、コンパクトシティ政策に着手した。その点、高知市は地勢上の優位性がある。東西に細長い平野部に、人口の9割が集中するからだ。また、土佐藩主の山内一豊が江戸時代初期、コンパクトな城下町づくりを進めたこともあり、その遺産も受け継いで中心部の活性化に取り組む。今、市と高知県は共同で図書館などの複合施設「オーテピア」を建設中であり、岡崎市長は「完成後は中心部への人口回帰が加速する」と期待を寄せている。



西浜の夕暮れ（A-HDR撮影）

市内には、欧州のコンパクトシティでは重要な路面電車も健在だ。この「とさでん交通」には、現存する国内の路面電車以最古の歴史（1904年開業）、最長の軌道線（25.3km）、逆に最も短い停留所区間（63m）、国内や欧州の各都市から譲り受けたクラシックな車両群がある。鉄道ファンでなくても魅力にあふれる。最大の繁華街「はりまや橋」を中心に、市街地を十字型に横断・縦断する。



はりまや橋から後免町（ごめんまち）行きに乗ると、電車のモーターが「ブーン」という懐かしい唸（うな）り声を上げ、「ガタン、ゴトン」と動き出した。途中、清和学園前で下車すると、一つ先の一条橋は目と鼻の先。まるで「おもちゃの国」にいるような気分だ。ここが日本で最も短い「駅間」であり、63メートルしかない。慢性運動不足の筆者でも、走れば十数秒？でも、この停留所があるからこそ、地元の中高生は安心して毎日通学できる。



※清和学園前に停車中の電車を一条橋から撮影



実は、路面電車を運行していた土佐電気鉄道は業績不振に不祥事が重なり、危機に陥っていた。結局、高知県や高知市、沿線自治体が出資し、同社と路線バスの高知県交通などを統合した上で、2014年10月に「とさでん交通」が発足した。

日本最古・最長の路面電車は危機を乗り越えたが、前途は決して楽観できない。岡崎市長は「病院や買い物に行くお年寄りや、通学生の足を確保するため、路面電車は絶対に残さないといけない」と言い切る。その一方で、「運営は民間のままでも、資本は全て税金になった。人口が減っていく中で、経営の効率化と『住民の足を守る』という使命をいかに両立させていくか…」と難しい課題も認める。

路面電車はカラフルな企業広告を車体に掲載し、少しでも収益を上げようと必死に走っている。筆者の乗車中、運転士は下車するお年寄りに「(降りた後)クルマ見てね～」と注意を促したり、土地に不案内な客には「〇〇ホテルは(路面電車より)タクシーのほうが便利ですよ」と助言したり…。おもてなしの精神が根づけば、「とさでん」は国内外からの観光客にも愛されるだろう。

300年以上の「魚の棚商店街」でも後継者難

路面電車で中心街に戻り、木製アーケードの美しい「はりまや橋商店街」から路地に入る。すると、時計の針が逆戻りしたような空間が広がっていた。この「魚の棚(うおのたな)商店街」は道幅3メートル、長さ100メートルほどの小さな買い物通り。江戸時代初期、山内家から特別な許可を得て日除けのための庇(ひさし)を導入し、魚などを並べて売り始めたという。それから300年以上、庶民の台所として親しまれてきた。

「土佐干物」を扱う岡本海産物店は終戦直後の創業。店主の西村和子さん(71)は「昭和30年代、私が学校から帰って来ても、お客さんが一杯で店の中に入れなかったのよ…」と振り返る。人通りはめっきり少なくなったが、今でも西村さんは朝8時～夜7時まで店先に立つ。週3回は朝4時起きて、市場まで仕入れに行くという。しかし、伝統ある商店街でもシャッターが一つ、そしてまた一つ閉まっていく。「向かいの魚屋さんはご主人が亡くなり、店を閉めちゃった。うちも後継ぎがないから…」

後継者問題は商店街に限らず、農山漁村や中小工場など全国のあらゆる分野で深刻化している。コンパクトシティをつくっても、ショッピングセンターやコンビニが主役を務めるなら、日本の街は「金太郎飴」と化して個性と輝きを失う。手遅れになる前に政官民で英知を振り絞り、難題の解を見つけなくてはならない。幕末、龍馬は幕藩体制の破綻を見抜き、「ニッポンを今一度せんたく(洗濯)いたし申し候」と最愛の姉に誓った。もし現代に蘇ったとしたら、きっと同じ台詞(せりふ)を吐くに違いない。



岡本海産物店の西村和子さん



桂浜の日の出

(写真) 筆者
PENTAX
K-S2使用

生物と人の多様性「東洋のガラパゴス」 奄美市（鹿児島県） コンパクトシティが地方を救う（第7回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

鹿児島空港から南西へ約400キロ、約1時間で奄美大島に到着した。ちょっと歩くと、タイムカプセルで保存されているかのように、太古からの自然が手付かずで残されたまま。この地域にしか生息していない動植物が数多く、「東洋のガラパゴス」と称される。また、「シマ」と呼ばれる集落が島内に点在し、個性豊かな文化を築いて守り続けている。生物も人も「多様性」を最大限に尊重しながら、奄美市（人口約4.4万人）は少子高齢化時代に立ち向かう。



奄美市の中心・名瀬地区



サンゴ礁の美しい土盛海岸



あやまる岬から太平洋を望む

支配者が変遷 按司～琉球～薩摩～米軍～日本復帰

「あまみ」は1300年を超える長い歴史を持ち、日本書紀の657年の項に「海見（あまみ）島」という記述を確認できる。大化の改新（645年）の頃、既にこの地域は独特の海洋文化を築いていた。中でも、サンゴ礁に棲むヤコウガイ（夜光貝）は真珠のようにキラキラと輝き、奈良や京都の貴族に珍重されたことから、本土との貿易が拡大した。また、遣唐使が日本～中国を往復した航路のうち、南島路は奄美大島を経由した。中国の僧、鑑真（がんじん）もこの航路を使い、両眼失明という苦難を乗り越えて日本へ渡って来た。



古代、奄美大島では按司（あじ）と呼ばれる首長が群雄割拠し、それぞれが集落を治めながら、貿易商人としても活躍した。中央集権の必要な農業ではなく、貿易が経済の柱だったため、島全体を統一する王や政権は登場しなかったらしい。ところが、尚巴志（しょうはし）が琉球（沖縄）を統一すると、奄美大島へ侵攻してきた。征服された奄美は15世紀半ば～17世紀初めの約150年間、琉球王国の支配下に入る。

中国との貿易で繁栄していた琉球王国に対し、島津氏の薩摩藩が出兵する。1609年、その途中で奄美大島を征伐し、事実上の直轄地として治めた。薩摩藩は巨額の借金を抱えて財政危機に陥り、奄美大島の農民にサトウキビ栽培・黒糖生産を強制し、厳しい搾取を続けた。薩摩から赴任・監視する役人と少数の大土地所有者の下で、家人（やんちゅ）と呼ばれる人々が奴隷のように働かされていた。

奄美料理を代表する「鶏飯」（けいはん）は当時、薩摩役人をもてなすために作られたという。なお、西郷隆盛は幕末の一時期、薩摩藩に命じられて奄美大島に潜居し、島妻の愛加那（あいか）との間に二人の子供をもうけている。



奄美料理を代表する「鶏飯」



「ハリセンボンのから揚げ」も…居酒屋「若大将」の大郷夫妻



伝統を守る手作り黒糖（水間黒糖）



西郷隆盛の上陸碑



島内に点在するサトウキビ畑

明治維新に伴い、奄美大島が鹿児島県の一部になった後も、島民は貧しい生活を余儀なくされた。第二次大戦終戦の翌1946年、米軍は北緯30度以南の奄美大島や沖縄などを統治下に置き、日本本土との渡航を全面禁止。奄美大島では食料品や日用品が絶対的に不足し、島民はやむなくソテツの実などで飢えをしのいだという。

にもかかわらず、米軍政府はインフレ対策を名目に配給食糧の三倍値上げを指令した。このため、14歳以上の島民の実に99.8%が本土復帰を求めて署名し、集団断食など命懸けの運動を展開。それに折れる形で、ダレス米国務長官が1953年8月に奄美大島の返還を表明し、ようやく同年12月に日本復帰が実現した。

「奄振」で2兆円超投入、インフラは整備したが…

日本復帰を果たしたものの、当時の奄美大島は疲弊・荒廃しており、戦後復興が進む本土との経済格差が著しく開いていた。このため、国は1954年に奄美群島復興特別措置法を制定し、奄美地域と本土の格差是正に乗り出す。5年間の時限措置だったが、延長に次ぐ延長で今に至っている（現在は奄美群島振興開発特別措置法＝奄振）。この奄振に基づいて、奄美群島には公共事業に対する国の補助率かさ上げや税制上の優遇措置などが講じられ、これまでに2兆円以上が投入された。

おかげで空港や道路、港湾などのインフラ整備が急速に進んだ。1972（昭和47）年に沖縄が本土復帰するまでは、奄美群島が事実上の「日本最南端」観光地だった。ベテランのタクシー運転手に聞くと、「関西方面から新婚旅行客などが詰め掛け、昭和40年代が最も忙しかった」と懐かしそうに振り返った。

ところが、奄振は強烈な副作用をもたらした。奄美群島で日刊紙を発行している南海日日新聞社の松井輝美・常務取締役編集局長は次のように指摘する。「島民が奄振に慣れ切ってしまい、補助金で食いつなぐ経済になってしまった。しかし、どんなに補助金を投じても伝統産業は衰退する一方で、新たな地場産業が興らない。若者は島外に職を求め、人口流出に歯止めが掛からなくなった」—



創刊70周年の南海日日新聞社

伝統産業の大黒柱が、1300年余の歴史を誇る高級絹織物の大島紬（おおしまつむぎ）。だが、着物文化の衰退や安価な輸入紬の流入に伴い、壊滅的な打撃を被った。大島紬の生産額は1980年に286億円を記録したが、今では数億円でしかない。

本土復帰当時に20万人を超えていた奄美群島全体の人口も現在、12万人を割り込んでいる。奄美市名瀬末広町の永田橋市場。軒先で島ラッキョウの皮を剥きながら、泰多江さん（89）は「昔はここも活気があったんだよ。でもね、若い人が島から出て行ってしまい、人通りがなくなっちゃった…」—



高級絹織物の大島紬



永田橋市場を守り続ける泰多江さん（右）と小俣菊栄さん（左）

奄美では公共事業に対する国の補助率が手厚いとはいえ、地元自治体は一定額を負担しなくてはならない。インフラ完成後は、補修費用の負担も重く押し掛かってくる。その結果、自治体の借金が増えて財政は著しく悪化し、マスコミは奄美市を「（財政破綻した）第二の北海道夕張市」と形容した。奄美大島の支配者は琉球王国、薩摩藩、米軍と移り変わり、日本復帰後も「補助金で『霞が関』に支配されてきた」（鹿児島県地方自治研究所「奄美戦後史」南方新社）という指摘もある。

元々、奄美大島（本島）は名瀬市、笠利町、住用村、龍郷町、瀬戸内町、大和村、宇検村の1市3町3村に区分されていた。このため、国は「平成の大合併」で再編を促した。しかし、町や村の名前が消えることには激しい抵抗もあり、紆余曲折を経て結局、名瀬市、笠利町、住用村だけで飛び地合併し、2006年に奄美市が誕生した。

旧1市1町1村の起債残高は2006年度の561億円から、2014年度は505億円まで9%減少。職員数も2006年度の714人から、2015年度は16%減の602人にスリム化した。「痛み」を乗り越えて、合併が行政コストの削減効果をもたらしたことは間違いない。その一方で、総人口は合併時の約4.8万人から10年間で一割強減っており、人口減少には歯止めが掛かっていない。



奄美市名瀬地区の中心商店街

奄美地域の今年4月の有効求人倍率は0.69倍であり、職を求める100人に対して69人分の仕事しか提供されていない。東京の2.02倍、全国平均の1.34倍に遠く及ばず、鹿児島県全体の0.97倍とも大きな格差が生じている。雇用創出は喫緊の課題だが、即効薬は見当たらない。

再来年、世界自然遺産への登録を目指す

しかし今、奄美大島の前途に一筋の光が差し込み始めた。二年後の「奄美・琉球地域」の世界自然遺産登録への期待が高まり、官民一体となって運動を展開しているのだ。

奄美大島では1970年代、世界最大級の石油精製工場の建設計画が持ち上がったが、地元の反対運動で頓挫した。また、沖縄のような大規模なリゾート開発も諸般の事情で進んでいない。結果的に太古からの貴重な自然が維持され、世界自然遺産登録が視野に入ってきたというわけだ。

アマミノクロウサギやルリカケスなど、この地域にしか生息していない希少動物が長年、人間と共生してきた。国内第二位の面積を誇るマングローブ原生林や、シダの一種である巨大なヒカゲヘゴの原生林が広がり、そのスケールは見る者を圧倒する。ハブは危険な存在だが、そのおかげで山間部の乱開発が阻止されてきた側面もあり、まるでブロッコリーのように密度の高い森林が島を埋め尽くす。また、奄美大島は太平洋と東シナ海に挟まれ、海の幸も非常に豊かだ。「東洋のガラパゴス」という看板通りに、「生物多様性」が見事なまでに維持されている。



マングローブの原生林



ヒカゲヘゴの原生林



防風林としても役立つ観葉植物「アダン」



奄美市役所で朝山毅市長にインタビューすると、島の再生策を熱っぽく語ってくれた。「大きな資本が入り、山を削って海を汚すという開発ではいけない。太古からの自然と現実の生活の調和を図りながら、（大規模リゾート開発が主体の）沖縄とは似て非なる奄美オンリーの観光政策を推進していきたい。本土の若い人からたびたび、『奄美大島は沖縄県じゃないの?』と言われるから、認知度も上げていかないと…」



奄美市の朝山毅市長



世界自然遺産登録を目指す奄美市役所

南海日日新聞の松井氏も「奄振がもたらした補助金頼みの経済や社会が、少しずつ方向転換している。世界自然遺産登録への運動をきっかけに、地元の資源を活かした自立型の街づくりを目指す機運が見え始めた」と言う。

松井氏は「離島が生き延びるためには、①モノを外へ②ヒトを内へに愚直に取り組むしかない」と指摘する。②については、羽田～奄美間の日本航空直行便に加え、格安航空会社（LCC）のバニラ・エアが昨年、成田～奄美間の直行便を開設し、首都圏からの観光客が増え始めた。世界自然遺産のブーム到来に備え、奄美空港の施設拡充も進められる予定だ。

しかし①については、大島紬に代わる「四番打者」がなかなか見つからない。それでも、若い世代の中にチャレンジ精神が生まれてきた。例えば、大島紬を取り扱う老舗呉服店の三代目、川畑裕徳さん（38）は大島紬と皮革細工の「融合」に取り組み、財布やアクセサリなどの企画・製作・販売を独りでこなす。

川畑さんは奄美市内の高校卒業後、上京して自動車メーカーに就職。だがそれに飽き足らず、退職してオートバイで日本列島を走破した。さらにビル解体作業などでお金を貯め、働きながらオーストラリアを周遊。ある日、先住民族が伝統楽器とドラム、ベースなどの現代楽器をコラボレーションさせ、全く新たな音楽を創り出す光景に出くわす。「これだ！」。川畑さんは奄美市の実家に戻り、大島紬+皮革細工の専門店「かすり」（奄美市名瀬港町）を起業した。

毎年、奄美市内の高校を卒業する400～500人のうち、ほとんどが就職・進学のため島から出て行く。その際、川畑さんの店で故郷の香りの漂う品を手に入れ、新天地へ旅立つ若者が少なくない。「おかげ様で開業前の予想より、売り上げは伸びている。将来は従業員を雇えるようになり、Uターン就職を希望する若者に職場を提供したい」と張り切っている。



「大島紬+皮革」コラボに取り組む川畑裕徳さん（奄美市名瀬港町の「かすり」）

シマを元気に！「奄美オンリー」の街づくりを

大切に守り続けてきた「生物多様性」によって、世界自然遺産という“配当”を受け取ることができれば、奄美大島は飛躍を遂げるに違いない。だが島を取材して歩くと、動植物だけでなく、人間の「多様性」も大事にしてきた文化の重みを強く感じる。

奄美大島では、島内に点在する集落を「シマ」と呼ぶ。南海日日新聞の松井氏は「シマは三方を山で囲まれ、逃げ道が海しかない。そういう厳しい制約条件が、独自の文化を育ててきた」と解説する。島唄は実はシマ唄であり、奄美が発祥である。集落ごとに独自の方言や音階で受け継がれ、庶民の喜怒哀楽が巧みに込められている。



奄美大島に点在するシマ（集落）



シマは「ミニ国家」であり、「天然のコンパクトシティ」と言って良いかもしれない。朝山市長も「シマが違くと、言葉は東京弁と関西弁ぐらい違うこともある」と言う。実際、筆者の利用したタクシー運転手は言葉遣いから、通りがかりのお婆ちゃんが同じシマ出身だと分かり、手を取り合って喜んでいた。

前述したように奄美市は10年前に名瀬市、笠利町、住用村が飛び地合併して誕生したが、朝山市長は「それぞれの集落の文化や伝統、風習や行事は守り抜いていく」と強調する。奄美市は今、「1集落1ブランド」事業を展開し、シマを元気にしようと努めている。

大量生産第一の高度成長期は画一性が要求され、それによってハードパワーの生産性向上が最大目標とされてきた。しかし、ポスト工業化社会ではソフトパワーが主役になり、多様性が創り出す価値こそが生命線になる。シマという多様性によって活力を維持できれば、この地域は生き残っているはず。今後、「奄美オンリー」の街づくりを大いに期待したい。



東シナ海に沈む夕日



【参考文献】

- ・麓純雄「奄美の歴史入門」南方新社
- ・鹿児島県地方自治研究所「奄美戦後史」南方新社
- ・名瀬（現奄美）市立奄美博物館「奄美博物館展示図録」
- ・奄美市企画調整課「奄美市市勢要覧2016」など

（写真）筆者
PENTAX K-S2 使用

世界三大夕日が美しい「霧の都」釧路市（北海道） コンパクトシティが地方を救う（第8回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

釧路市は北海道東部の政治・経済の中心都市である。石炭や木材などの積出港として発展し、魚介類の水揚げ高も全国一を誇っていた。しかし、こうした産業がグローバル化の荒波に呑み込まれて衰退し、人口はピークとなった1980年の約22.7万人から現在は約17.5万人まで減少。このため、市は「暮らし」に必要な都市機能を市内8つの拠点に集約した上で、それぞれを公共交通で結ぶ「ネットワーク型コンパクトシティ」を目指し、少子高齢化に立ち向かっている。

大湿原と阿寒湖 2つの国立公園を抱える釧路市

原生林の間を歩き続けて展望台に出ると、まるで競い合うように濃い緑と淡い緑が眼下に広がっていた。サバンナのような大地は地平線まで続き、その中を川が悠々と流れる。人間の手の及ばない、広大で神秘的な光景。それに圧倒されていると、やがてすべてが濃い霧に包まれて姿を消した…



サテライト展望台から望む釧路湿原

この釧路湿原の誕生はおよそ3000年前にさかのぼり、日本最大の低層湿原である。水鳥など湿地の生態系を守る、ラムサール条約の登録湿地として1980年に国内で初めて指定。1987年には国立公園に指定された。面積は約2.9万ヘクタールに達し、東京ドームを6000個以上も呑み込んでしまう広さだ。

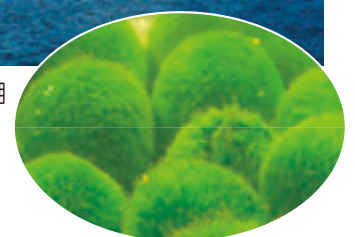
ヨシやスゲを主体とする湿原には、国の特別天然記念物タンチョウのほか、国内最大の淡水魚であるイトウやキタサンショウウオなどがひっそりと生息している。太古からの自然の力と、近年は人間の努力によって、極めて貴重な生物多様性が奇跡的に保護されてきた。



2005年、釧路市、阿寒町、音別町が合併し、新生「釧路市」が誕生。その結果、釧路市は釧路湿原、阿寒という二つの国立公園を抱えることになった。釧路市街からバスに2時間ほど乗ると、阿寒湖に到着する。国の特別天然記念物・阿寒湖マリモ（毬藻）が湖底に眠るほか、温泉街やアイヌ民族のコタン（集落）があり、訪日外国人観光客の間でも人気を呼んでいる。



マリモが生息する阿寒湖



最大30センチにも生長



伝統文化を守るアイヌコタン

釧路の市街地にもオンリーワンの個性がある。その中心となるスポットが、釧路川に架かる幣舞橋（ぬさまいばし）。橋上では四体のブロンズ像が四季を表現する。それと夕日が重なり合う時刻になると、市民や観光客が集まって来る。その夕日の美しさは、いつしか世界各港を回る船員の間で評判になり、釧路はバリ島（インドネシア）、マニラ（フィリピン）と並んで「世界三大夕日の街」と称される。また、釧路は「霧の都」とも呼ばれ、幣舞橋が白いベールに包まれていく光景はファンタジー映画の一シーンのようだ。



「世界三大夕日の街」と称される釧路（A-HDR撮影）



夜霧に包まれる幣舞橋

幣舞橋の周辺には釧路フィッシャーマンズワフ「MOO（ムー）」や、北国ならではのガラス張りの全天候型緑地「EGG（エッグ）」、旧釧路新聞社に記者として一時勤務していた石川啄木ゆかりの史料を展示する「港文館」などがあり、遠方から訪れた者を裏切らない魅力にあふれている。



啄木像（港文館）から望む、釧路フィッシャーマンズワフ「MOO」と全天候型緑地「EGG」

また、釧路はグルメの街でもある。JR釧路駅に近い和商市場は市民の台所であり、超新鮮な魚介類が毎朝大量に並ぶ。小皿に少量盛られた刺身や魚卵を買い、自分だけの「勝手丼」を作ることまでできる。「炉端焼き」発祥の地ともされ、炭火で丹念に焼き上げる職人技によって、海山の幸の美味しさが見事に引き出されていく。



魂を込めて焼き上げる「かじか」の川越洋二さん（釧路市栄町4-2 ☎0154-22-2526）

高速道路が到達するまでに59年が…

幣舞橋を中心に魅力が幾つも輝く一方で、市街地には「影」も見受けられる。鉄道の玄関口となるJR釧路駅は閑散としており、駅前やメインストリートの北大通には空きビルが目立つ。駅に近い商業ビルも今夏で閉店した。人口減少と少子高齢化は、この街からも確実に体力を奪っている。冒頭で紹介したように釧路市の人口は約17.5万人まで減少。日本創成会議は2040年には約10.6万人まで減ると推計し、消滅可能性都市の一つに挙げている。



JR釧路駅



空きビルが目立つ市街地



釧路市役所を訪ね、蝦名大也市長（えびな・ひろや=57）にインタビューを行った。市長は「戦後、この国は東京のインフラ整備を優先し、非常に効率の良い社会を築き上げる一方で、地方の開発を後回しにした。例えば、1957年に釧路に通じる高速道路の計画ができていたのに、（2016年3月に道東自動車道が阿寒ICまで延伸して）実現するまで59年もかかった」と溜め息をつく。釧路で生まれ育った市長は「高校卒業の同期で地元に残っているのは一割しかない。ほとんどが進学や就職で札幌や東京などに出ていったまま。働く場さえあれば…」と肩を落とした。



釧路市の蝦名大也市長

このため、蝦名市長は地元の雇用創出に力を入れる。ただし、「大企業の工場を誘致する時代ではない」と認識しており、市が企業に対して独自のアンケート調査を実施。求められる人材をキメ細かく聴きだし、それを学校現場にフィードバックするなど、地道な努力を積み重ねている。

また、市長は「北海道を食料供給基地ではなく、食料基地にしたい。大量生産時代は原料供給を担っていたが、これからは農林水産業に地元でモノづくりの要素を加えなければ生き残れない」と強調する。インタビューを行った市役所応接室のソファも、カラマツの枠にエゾシカの皮張りという「メイド・イン・釧路」。市の面積の74%を森林が占めるため、市は造林・造材業、製材業、建設業者などによる「円卓会議」を設け、森林資源の活用に知恵を絞り合う。

訪日外国人2000万人時代を迎え、釧路市もインバウンド消費の取り込みに躍起だ。前述したように市内に二つの国立公園を抱え、観光資源に恵まれている。しかし蝦名市長はそれに安住することなく、行政の垣根を越えて課題に取り組む。例えば、国内最高の透明度を誇る摩周湖を持つ弟子屈町（てしかがちょう）と連携し、「阿寒国立公園」を「阿寒摩周国立公園」に名称変更するよう国に働きかけている。釧路市は外国人宿泊客数を倍増させ、2020年には延べ約27万人に引き上げたい考えだ。



国内最高の透明度を誇る摩周湖（弟子屈町）

また、最高気温が東京より10度も低いという夏場の冷涼な気候を利用し、釧路市は「避暑生活」を積極的に提案する。その結果、4日間以上の長期滞在者数とその滞在日数は2011年度に道内1位となり、5年連続でトップの座にある。立地制約の少ないIT関連企業や大企業のサテライトオフィスなどが「涼しい釧路」に注目すれば、雇用も拡大していくだろう。



真夏は「ヒアガーデン」で乾杯

釧路市の再生策について、日銀釧路支店の植木修康支店長に見解を尋ねると、明快な答えが返ってきた。「食料も観光もブランド化、あるいは高級路線を追求したほうが良い。ものすごい数の観光客に来てもらう必要はなく、欧米の富裕層といったクオリティーの高いインバウンドに照準を合わせるべきではないか」

お年寄りが歩いて暮らせる街に

人口が22万人を超えていた1980年前後、当時の釧路市は25万人の街を目標に据えていた。将来人口の増加を前提に市街が拡大したが、期待とは裏腹に人口は減少に転じてしまった。その結果、肥大化した市街地を、人口減で乏しくなる財政で支えなければならない。蝦名市長は「これでは中心市街地が空洞化するのも無理ない。と言って、市街地を昔のように小さくできるわけもない」と顔を曇らせる。

そこで釧路市は「暮らし」をキーワードに掲げ、買い物・医療・福祉といった生活に欠かすことのできない機能を市内8カ所の「拠点」に集約し、コンパクトな街を創ろうという政策に転換した。北海道は圧倒的なクルマ社会だが、拠点同士をバス中心の公共交通機関で結び、「お年寄りでも歩いて暮らせる、ネットワーク型のコンパクトシティを目指す」（蝦名市長）という。

これに関して、前出の植木支店長は「道路が広いのにクルマの数は少ないから、自動運転が進展してきた場合、真っ先に採り入れることが容易な地域。ドローン（無人飛行機）の導入にも向いている。イノベーション（技術革新）に対し、柔軟に対応できるように進めていくなら、ネットワーク型のコンパクトシティは非常に良いコンセプトだと思う」と評価する。

中国など新興国は固定電話の時代を経ず、いきなり携帯電話の社会を築き上げた。それによって電話回線網などのインフラ投資負担が軽くなり、先進国にはない優位性を得た。日本の地域社会も東京の縮小相似形を目指していたら、未来への道は決して開かれない。イノベーションを巧みに活用しながら、不利を有利に変える「逆転の発想」で街づくりが期待される。



七色に変化する釧路の夕景（A-HDR撮影）



（写真）筆者
PENTAX
K-S2 使用

「海の京都」で公共交通の空白解消 京丹後市（京都府） コンパクトシティが地方を救う（第9回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

JR京都駅から特急に2時間ほど乗ると、日本三景の一つに数えられる天橋立。ここ丹後半島は近年、「海の京都」として注目を集めている。さらに西に進むと、日本海に臨む京丹後市（京都府）に入る。峰山、大宮、網野、丹後、弥栄、久美浜の6町が「平成の大合併」で一緒になり、2004年4月に市制が施行された。総面積は501平方キロに達し、東京・山手線の内側の約8個分に相当する。旧6町がコンパクトな街づくりを進めながら、京丹後市は6つの個性を公共交通でネットワーク化したアイデア。

しかし長年にわたり過疎化が進み、人口は約5.7万人まで減少。高齢者の比率が非常に高く、移動手段の確保が年々難しくなっている。このため行政と市民が一体になり、「ささえ合い」をキーワードに公共交通の空白地を解消しようと懸命に取り組んでいる。

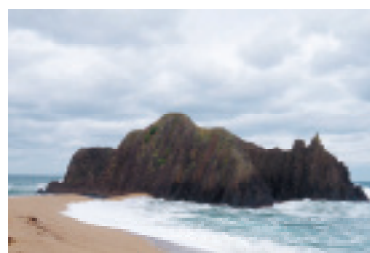


日本三景の天橋立（京都府宮津市）

日本海沿いに絶景が連続する「間人」（たいざ）

「間人」と書いて「たいざ」と読む。京丹後市丹後町にある小さな集落だが、歴史のロマンが漂い、日本海沿いの海岸線には風光明媚なスポットが幾つもある。言い伝えによると、聖徳太子の母である間人（はしうど）皇后が一時この地に身を寄せ、「はしうど」を地名として授けた。しかし、地元の人々は恐れが多いため、皇后が当地から「退座」した後、間人を「たいざ」と読むようになったという。

海岸には間人皇后・聖徳太子の母子像が造られ、その前に高さ20メートルに達する立岩（たていわ）がそびえる。島のような安山岩の巨岩。伝説では鬼が封じ込められており、日本海の荒波がぶつつかると号泣する鬼の声が…。この海岸線には「屏風岩」や「丹後松島」といった名勝もあり、絶景が連続するドライブコースになっている。冬場、間人港で水揚げされる松葉ガニは「間人ガニ」と呼ばれ、1匹数万円もする高級食材として知られる。



立岩



屏風岩



間人皇后と聖徳太子の母子像



間人ガニ

このように間人を中心とする丹後町は、歴史と自然が織り成す魅力にあふれる。だが、少子高齢化の荒波から逃れることはできない。同町の人口は広域合併前の約7100人から、2016年4月には約5600人まで減少。この間に65歳以上の高齢化率は30.5%から40.0%へ上昇し、京丹後市全体の34.2%を大きく上回る。一日十数本の路線バスはあるものの、幹線道路が主体である。支線道路の沿線でクルマの運転ができない人は「交通難民」になってしまう。人口が減ると民間交通機関の採算がとれないという悪循環に陥り、2008年には丹後町で唯一のタクシー会社営業所も撤退してしまい、「タクシー空白地」となった。

京丹後市は危機感を強め、2014年にNPO法人「気張る！ふるさと丹後町」に委託する形で「市営デマンドバス」の運行を始めた。2路線でそれぞれ隔日10人乗りの車両を運行し、運賃は上限200円に抑えた。NPO法人との協働による京都府下で初のデマンドバスは住民に喜ばれる一方で、幾つかの問題点も浮き彫りになった。例えば、運行が隔日の上、乗車には前日午後5時までの予約が必要であり、路線バスに比べると利便性が劣る。だが運行本数を増やしたくても、NPO法人はバス運転手を確保できない。

このためデマンドバスを導入しても、公共交通の空白地（自宅から最寄りの駅あるいはバス停まで500メートル以上離れている地域）はなかなか解消できない。京丹後市企画政策課公共交通係長の野木秀康さんは「クルマを運転できる80歳過ぎのおじいさんが善意から、近所に住む90歳のおばあさんを病院まで送り届けている。その姿を見て、『何とかしてあげたい』というNPO法人の熱い想いに触れ、行政として出来る支援をしたいと思います」と話す。

「ウーバー」アプリ導入で「ささえ合い交通」

そこで野木さんが制度面でアドバイスを行い、市役所OBでNPO法人専務理事の東和彦さんがマイカーを保有するボランティアドライバーを確保した上で、そのドライバーと移動したい住民をマッチングさせる「ささえ合い交通」の検討が始まった。マッチングには、米国で急成長中の配車サービス会社Uber（ウーバー）のスマートフォン用アプリを導入することにした。ウーバーの配車システムを自家用有償旅客運送に活用するのは、日本で初めての試みである。



「ささえ合い交通」で使われるマイカーと野木さん（左）、東さん（右） ※一部修正あり

NPO法人が運行主体となり、国土交通大臣から道路運送法に基づく自家用有償旅客運送の登録を受け、2016年5月26日に「ささえ合い交通」がスタートした。運行管理者の東さんは安全運転を確保するために、各ドライバーの体調や車両の整備状況をキメ細かくチェックする。登録ドライバーは18人（うち女性4人）で平均年齢62歳。利用時間は毎日午前8時～午後8時である。

運賃は最初の1.5キロまで480円。その後は1キロ毎に120円加算だから、通常のタクシーの半額程度である。東京海上日動火災保険の協力により、通常の車両保険（対人・対物無制限補償）に加えて、二次的保険が提供された。その結果、ドライバーがお年寄りを車両に誘導する際に発生した事故などもカバーされるという。

筆者も「ささえ合い」に乗車するため、ウーバーのアプリをスマホにダウンロード。クレジットカード番号の入力が必要だが、予想以上に簡単に登録できた。アプリは45カ国語に対応しており、もちろん訪日外国人が観光目的で乗ってもかまわない。間人のレストランからスマホで配車を依頼すると、程なくワゴン車が現れた。赤い統一ジャケットを着ているから、一目で「ささえ合い」のドライバーだと分かる。



丹後松島

当日のドライバーは地元出身の岡本昌明さん（69）。大阪で仕事をしていたが、今は故郷でのボランティアに携わり、「人の役に立っているという実感があるし、色々な人との出会いが楽しいですね」と笑顔を浮かべる。途中、撮影するために数カ所で停車してもらいながら、丹後町から隣の網野町まで約1時間乗車。運賃は3071円で領収書がすぐにメールで届いた。クレジットカード決済だから、ドライバーとの間で現金のやり取りは全く無い。



路線バス市内運賃は上限200円



ローカル色豊かな京都丹後鉄道

スマホが無くても「代理サポーター」が配車依頼

「ささえ合い」は地域住民と行政、NPO法人などの熱い思いを乗せて走り始めた。だが、牽引役の東さんは決して満足しておらず、「行きはヨイヨイ、帰りはコワイを何とかしたいのですが…」と悔しそうな表情を見せる。現行のルールでは、丹後町で乗車した利用客は京丹後市全域で降車できるが、帰りは丹後町外から乗車できないからだ。

このように既得権が絡む規制が立ち上がるものの、「ささえ合い」は着実に前進している。昨年10月には、お年寄りの視点に立ってサービス改善に踏み切った。スマホやクレジットカードを持っていない人に代わり、配車依頼をしてくれる「代理サポーター制度」を導入したのだ。利用者は①代理サポーターに電話をかける②氏名や配車場所、電話番号を伝える③「ささえ合い」に乗車する④3日以内に代理サポーターに現金で支払うという手順を踏めばよい。

過疎地域における路線バスの運行を維持するために、全国的に行政が財政支援を行なっている。こうした中、京丹後市は市内運賃の上限を200円に抑制。「700円×2人」ではなく「200円×7人」に発想を逆転し、年間利用者数を17.3万人から39.8万人に拡大した。また、丹後町と同じくタクシー空白地となった網野、久美浜両町には、電気自動車（EV）を使った乗り合いタクシー（初乗り運賃500円/人）を導入した。また、唯一の鉄道である京都丹後鉄道も、高齢者や高校生にとって欠かせない足になっている。

こうした施策の着実な実施により、京丹後市は公共交通空白地の人口を6町合併前の1万1800人から、2024年には100人まで減らそうとしている。三崎政直市長にインタビューすると、「Uber方式の前途にハードルがあるのは事実だが、何とかクリアしていきたい」と述べ、「ささえ合い」を維持する考えを示した。

また、三崎市長は運賃上限200円バスについても、「高齢者はバス停まで歩いていくのが厳しい。だから、主要道路という幹だけでなく枝葉までバスを走らせないと、住んでいただけなくなる。空気を運ぶぐらいなら、運賃を安くして少しでも多くの人に乘ってもらいたい」という。さらに、「都市部の若い人がクルマを持たなくなった。せめて30分に1本ぐらいの頻度の公共交通を整えないと、移住者が来なくなるのではないかと述べ、公共交通を整備する理由として都会の若者のクルマ離れも挙げる。



京丹後市の三崎政直市長

松本清張が愛した木津温泉の宿

元々、京丹後市のある京都府北部は高級絹織物「丹後ちりめん」の産地として奈良時代から栄えていた。戦後の最盛期は、「ガチャマン」（織機が「ガチャ」と音を鳴らすたび、1「万」円を稼ぐ）と呼ばれるぐらい繁盛していた。ところが着物文化の急速な衰退とともに、生産量はピーク時の数%にまで激減した。それでも、生き残った業者は歯を食いしばって伝統を守り続ける。網野町にある田勇機業を取材すると、三代目の田茂井勇人社長が「丹後ちりめんはパリ・コレクションにも出品されています。これからは海外市場の開拓が楽しみです」と目を輝かせながら、各工程を丁寧に説明してくれた。



松本清張が愛した「糸びすや」

市役所のある峰山町では、日本で唯一という狛猫（こまねこ）や日本一短いアーケードを見つけた。また、京丹後市は海の幸だけでなく、農産物も豊かだ。特に米の美味しさは格別であり、「丹後コシヒカリ」は食味ランキングで最高評価「特A」を西日本最多の12回獲得している（日本穀物検定協会）。街並みに派手さはないが、歩いているとほっとする。ここでは戦後日本の原風景のようなシーンに何度も出会えるからかもしれない。



ちりめん1反に繭（まゆ）約3000個

創業85年の田勇機業

このほか網野町には、日本海がオレンジ色に染まる「夕日ヶ浦海岸」などの絶景スポットもある。京都府下最古の温泉である木津温泉では半世紀前、松本清張が「糸びすや」に2カ月投宿して名作「Dの複合」を書上げたという。この文豪が滞在した部屋と書斎は当時のまま見事なまでに保存され、全国から清張ファンが見学にやって来る。女将の蛭子智子さんは「大正時代の建築ですから、補修する時は京都市内から宮大工を呼ばなくてはなりません。維持は楽ではありませんが、清張先生のファンのためにも頑張ります」



夕日ヶ浦海岸（A-HDR撮影）



金刀比羅神社の「狛猫」



日本一短いアーケード「御旅市場」（約52メートル）



（写真）筆者
PENTAX K-S2

ネコも歩かぬシャッター街に奇跡が… 日南市（宮崎県） コンパクトシティが地方を救う（第10回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

いつの時代も人間にとって海は特別な存在。食の源として恵みを与えてくれる一方で、時には荒れ狂って命を脅かす。だから古代から人々は海を畏れ、祈りを捧げてきた。鵜戸神宮（宮崎県日南市）はそんな海洋信仰の聖地の一つだ。荒波と奇岩に迎えられながら、太平洋に突き出す磯の上の参道を歩く。

鵜戸と書いて「うど」と読み、空（うつ）+洞（うろ）が語源とされる。実際、鵜戸神宮の本殿は洞窟の中にどっしりと鎮座していた。創建は古事記・日本書紀の時代にさかのぼるといふ。現代の土木技術をもってしても難工事だったに違いないが、一体どうやって千数百年も前に造られたのか。その謎とロマンに吸い寄せられるように、鮮やかな朱塗りの本殿を一目見ようと参拝客が国内外からやって来る。



荒波と奇岩が連続する参道



洞窟に鎮座する鵜戸神宮本殿



「鬼の洗濯板」と呼ばれる液状岩が不思議な日南海岸

宮崎県南部に位置する日南市は、「神話の時代」からの長い歴史と文化を誇る。市内の飫肥（おび）は江戸時代に伊東氏の城下町として栄えた。「九州の小京都」といわれるように、飫肥城大手門や武家屋敷通りなどが美しい街並みを形成し、タイムスリップしたような感覚を味わえる。

飫肥藩は財政難を乗り切るため、山野にスギの植林を進め、強度と機能性が抜群の特産品「飫肥杉」に育て上げた。また、次世代を担う人材教育に力を入れ、その藩校から小村寿太郎らを輩出した。明治維新直後、小村は政府の海外留学生に選ばれて渡米、ハーバード大学で法律を学び、帰国後は外交官から外相に就任。日露戦争後の1905年、日本全権としてロシアと厳しい交渉に当たる。困難を乗り越えてポーツマス条約の調印に成功。日本外交の礎を築いて世界史に名を遺す。



飫肥杉で復元された大手門



小村寿太郎の銅像

一方、市内の油津（あぶらつ）は天然の良港。江戸時代は飴肥藩が船倉を置き、堀川運河を造って飴肥杉を港まで輸送した。明治以降、油津は漁業基地として繁栄し、昭和初期はマグロ景気に沸く。赤レンガ館などが往時の勢いを今に伝え、中でも1932年に建てられた銅板葺きの「杉村金物本店」は圧倒的な存在感を示す。今なお現役の金物店であり、店内は昭和の道具が並んでいてタイムカプセルのようだ。幾多の台風被害を乗り越え、行政から補助金も受けず、3階建て店舗を80年以上保存してきた店の努力に頭が下がる。



堀川運河



杉村金物本店

日南市は広域合併の先駆けであり、1950年に飴肥、油津、吾田（あがた）の各町と東郷村が合併して誕生。その後も何度かの町村編入を経て、2009年に平成の大合併で北郷（きたごう）、南郷（なんごう）の両町と一緒に、今の（新）日南市に至る。北郷は「美人の湯」と森の街であり、南郷は一本釣りカツオで日本一の漁獲量を誇る。市役所は市域のほぼ中央に位置する吾田にあるが、市は旧町村の個性を尊重するネットワーク型コンパクトシティを目指している。



特産のキンカン



人気急上昇「カツオ炙り重」

広域合併によって面積は536km²になり、東京・山手線内側の8個分以上に拡大。しかし、他の地方自治体と同じく少子高齢化の荒波に呑み込まれた。人口は1950年代のピーク時から4割も減り、今や5.3万人。その一方で、65歳以上の高齢化率が35%を超える。

JR日南線（宮崎県・南宮崎～鹿児島県・志布志）は市内を走る唯一の鉄道だが、利用者はピーク時の約1割まで減った。通学高校生やお年寄りには不可欠の「足」だが、旧国鉄時代は廃線の危機に直面し、辛うじて乗り切った。

しかし昨年、JR九州が上場したことから、株主から赤字路線を問題視する声が強まる恐れが出てきた。危機感を強めた日南市は同社との関係強化を目指し、厳しい財政事情の中で1000万円の予算を組んで株式を取得した。また、市職員が宮崎市内の県庁などに出張する際は、公用車ではなくJRを原則使うように改めた。行政が先頭に立ち、市民に日南線の利用を訴えている。



市民の「足」JR日南線

中心市街地の油津商店街は1965年にピークを迎え、百貨店やスーパーのほか、最先端のアーケードの下に80店舗が軒を連ねた。ところがその後、日南市外への人口流出が加速した上、大店法（大規模小売店舗法）の規制緩和で市の郊外や宮崎市に商業の中心が移り、油津商店街の衰退が加速する。石油ショックやバブル崩壊で衰退に拍車が掛かり、ついには6店舗まで減少。スーパーの閉店後、地元の人は「ネコも歩かぬシャッター街」と呼んで寄り付かなくなったという。

40年近くにわたり、一人の男がこの商店街の盛衰に真正面から向き合っていた。黒田泰裕さん（63）は日南市出身で鹿児島大学に進学。大手証券会社から就職内定をもらい、「東京でバリバリ働くぞ」と夢を膨らませる。だが入社1カ月前の1978年3月、入社前研修に励んでいた黒田さんの元に突然、実家から連絡が…。「お父さんが倒れた。すぐに帰って来い」一

幸い、父親は一命をとりとめたが、黒田さんに「このまま実家に残ってくれ」一。黒田さんは「大学の同級生は証券会社や銀行でこれから活躍するのに、なんで俺だけが…」と抵抗したが、最終的に親の願いに従う。地元は就職難だったが、偶然にも日南商工会議所に空席が出る。以来、2014年末に事務局長で定年退職するまで、商議所一筋で働き続けた。

黒田さんは「当初は全くやる気がありませんでした」と振り返るが、故郷の衰退を目の当たりにしながら、次第に街づくりに使命感を抱く。そして、「このままでは日南市は“消滅都市”になってしまう」と危機感を募らせ、ついに立ち上がった。2014年3月、黒田さんと「九州パンケーキ」で大成功を収めた経営者の村岡浩司さん、日南市が月給90万円で公募した「再生請負人」木藤亮太さんの三人が30万円ずつ出資し、街づくり会社「油津応援団」を創設したのだ。



シャッター街と黒田さん（右）、木藤さん（中）村岡さん（左）
（提供）油津応援団

まず手始めに、応援団はシャッター街で15年前に閉店した喫茶店に目を付けた。コンセプトは単なるリフォーム（改築）ではなく、新たな価値を創造するリノベーション（刷新）。世代を超えてコミュニケーションを楽しめるカフェ「アブラツコーヒー」として再生させ、応援団が直営した。2014年4月のオープン後、浮き沈みはあったが、今では月商1500万円で黒字が定着する。

この成功体験が起爆剤となり、旧呉服店がモダンな豆腐料理店に生まれ変わる。次に、応援団の主導で撤退スーパーの広い跡地はモールになり、多世代交流施設「油津Yotten」と屋台村「あぶらつ食堂」がオープン。一人でも経営できるコンテナ型ガーデンも登場し、お洒落なスイーツやパンの店などが入居した。



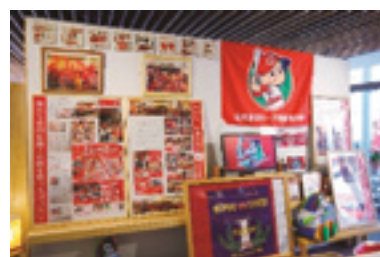
商店街復活の起爆剤「アブラツコーヒー」



和洋中の逸品を味わえる「あぶらつ食堂」

ところで、冬の日南市にはキラーコンテンツがある。毎年、プロ野球の広島東洋カープや埼玉西武ライオンズがキャンプ地としているのだ。中でもカープのキャンプは50年以上の歴史があり、油津商店街から歩いて5分ほどの天福球場で汗を流す。昨年の25年ぶり優勝の効果により、今年の日南キャンプへの来訪客は1.5倍の8.5万人に上り、日南市は経済効果を6億円規模と試算する。

ただ、球場で練習を見学した後、ファンが集う場がない。そこで応援団は「油津Yotten」の一角に「油津カープ館」を開設。カープ応援歌を一年中流し、新旧スター選手のサイン入りユニフォームなどを展示する。ネットでは売らない限定Tシャツなど、オリジナルグッズがキャンプ期間中は飛ぶように売れたという。カープファンの「聖地」となるよう、球場から商店街に通じる道を横断歩道まで赤く染め上げる徹底ぶりだ。



油津カープ館と赤い道

応援団の努力が実り、6つにまで激減していた商店街の店舗数は30近くにまで復活し、人通りも2.5~3倍に増えた。黒田さんは振り返る。「わずか3年でこれほどまでに変わるとは…。奇跡が起きたんです」。出資を希望する市民株主も続々と名乗りを上げ、資本金は90万円から1600万円に。現在は黒田さんが応援団の代表取締役を務め、「油津スタイルを全国の商店街に広めていきたい!」と還暦過ぎてなお意気軒昂である。

油津商店街に奇跡は起こったが、日南市はそれで満足していない。依然として人口減少に歯止めが掛からないからだ。そこで木藤さんと同じく民間から市に招聘された「ヨソモノ」が、商工政策課マーケティング専門官の田鹿倫基（たじか・ともき=32）さんである。田鹿さんは地元の宮崎大学を卒業後、リクルートに入社。宮崎県内の町興しにボランティアとして関わる中で、当時県庁に勤務していた崎田恭平・現日南市長と出会ったという。

田鹿さんは崎田市長から「外貨」獲得や街のブランディングなどを任せられ、雇用創出に奮闘を続ける。既にIT系企業10社が進出を決定し、60人分の雇用効果をもたらすという。油津商店街で勤務してくれば、週末に比べてぐんと減ってしまう平日の通行量・消費額の下支えも期待できる。



マーケティング専門官の田鹿さん

また今年2月、現役の名古屋大学生でやはり「ヨソモノ」の奥田慎平さん（21）が経営するスポーツバー& hostel「fan!」も商店街にオープンし、地元市民とIT企業の出張者、カーブファン、外国人観光客などとの交流の場が新たに生まれた。

進出企業には、顧客をサポートするチャットセンターを開設するところが多い。東京と比較すると、家賃が7分の1程度、人件費も約8割の水



現役名大生の奥田さんが経営する「fan!」

準で済むという。ただし、人材の安売りはしない。田鹿さんは「正社員・月給18万円以上・賞与ありが原則です。条件が悪ければ、入社しても転職してしまいますから」と話す。

日南市を持続可能な街にするために、田鹿さんは「ドラム缶型（=各世代の人口が等しい）の人口ピラミッドにではなくてはなりません」と指摘する。そのためには、①半分以上が転出する高卒者に少しでも留まってもらい、社会減にブレーキを掛ける②20~30歳代の地元出身者にUターンしてもらう③初婚年齢引き下げや子育て支援、世帯所得の引き上げによって出生数を増やす—といった施策が必要になるという。

そのマーケティングの哲学を聞くと、「ゆるキャラなどで同じ土俵に載らない、つまり他の自治体とケンカしないことです。『戦略』とは『戦（いくさ）を略（はぶく）』という意味じゃないですか。ほかがやらないことをやります」と言い切った。

このように「ヨソモノ」が触媒となり、市民の意識を少しずつ変革しながら、日南市は挑戦を続ける。その陣頭指揮を執る崎田恭平市長（37）は田鹿さんら「ヨソモノ」を行政と民間企業の間に入る「通訳者」と呼び、「日南市役所の最大の強み」と話す。

また、崎田市長は「日本一企業と組みやすい市」を標榜する。決して豊かではない財政の下、民間企業から知恵・活力・資金を引き出しながら、持続可能な街づくりを進めていくという。最近もディスプレイ業界大手の乃村工藝社と「地域活性化に関する包括的連携協定」を結んだ。「城下町・饂飩の観光地としての魅力を最大限に引き出すため、街全体を空間として捉えてプロデュースしていただきたい」と期待する。

日南市の日照時間は国内トップクラスであり、冬でも暖かくて過ごしやすい。海や山の幸は豊富だし、城下町や温泉、大企業の工場もある。何でも揃っているだけに、市民気質はおっとり。今後は恵まれた資源を活用しながら、「ヨソモノ」がこの街の潜在能力をどれだけ引き出すのか—。



崎田恭平市長

将来再訪した時の変化に期待を膨らませながら、日南線・北郷駅から一両編成の列車に乗り込んだ。

（写真）筆者
PENTAX K-S2

ベンガラの里・吹屋&雲海の備中松山城／高梁市（岡山県） コンパクトシティが地方を救う（第11回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

岡山県中西部の中山間地に位置し、広島県県境に接する高梁（たかはし）市。広域合併によって市域は約547平方キロに達し、東京・山手線の内側面積の8個分以上になる。だが、かつて5万人を超えていた人口は約3.2万人にまで減少した。少子高齢化が加速する一方で、「備中の小京都」は「歴史の証人」というべき観光資源に恵まれており、それを活かしたユニークな街づくりが官民一体で進められている。



高梁市の中心部

JR伯備線・備中高梁駅から車で山間を上っていくと、40分ほどで吹屋（ふきや）ふるさと村（高梁市成羽町）に到着した。通りに足を踏み入れた瞬間、魔法にかかったかのように、「ソクッ」というショックを受けた。ベンガラ色と呼ばれる赤銅色の鮮やかな屋根の古民家が、整然と軒を連ねていたからだ。時間がゆっくりゆっくり流れ、町並みは日本の「昔」をぎっしり詰め込む。まるでタイムカプセルの中にいるようだ。



吹屋の町並み



吹屋は標高550メートルの山間部にあり、陸の孤島のような集落。だが、町の歴史は1200年を超える。9世紀初め銅山が発見され、戦国時代は尼子氏と毛利氏が熾烈な争奪戦を展開した。江戸時代は幕府直轄の天領となり、住友財閥前身の泉屋などが銅を採掘。明治維新直後、岩崎弥太郎の三菱が銅山を買い取って経営を近代化し、吹屋は日本三大銅山の一つとして繁栄した。



山神社の鳥居に残る「三菱マーク」

それに加え、ベンガラ（「弁柄」「紅殻」とも表記）が吹屋に巨万の富をもたらした。硫化鉄鉱の良質で豊かな鉱脈が見つかり、それを元にベンガラと呼ばれる鮮やかな赤色、あるいは褐色をした顔料の生産が18世紀初めに始まったのだ。ベンガラは九谷焼や伊万里焼など全国各地の高級陶磁器の絵付けや重要建造物の塗装などに使われ、吹屋は国内最大の生産拠点となる。

その結果、江戸時代半ば以降の吹屋には豪商が出現。彼らは豪邸の建築を競い合う一方で、当時では大変珍しいことに、町並みに統一デザインを導入した。すなわち、石見（いわみ＝今の島根県西部）から赤褐色の石州瓦（せきしゅうがわら）を大量購入し、町全体をベンガラ色で染め上げたのである。画期的な民間主導の「都市計画」によって、吹屋に欧州のような煉瓦色の町並みが生まれたというわけだ。

しかしながら、ベンガラ生産は1960年代半ばに途絶え、1972年には銅山も閉山。吹屋は第二大産業を失い、過疎化の波に呑み込まれた。赤銅色の町並みの維持も難しくなったが、地元関係者の努力で今日まで受け継がれてきた。行政もサポートに乗りだし、岡山県は1974年に吹屋を「ふるさと村」に指定。国も重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定して支援する。



広兼邸は城郭のような外観、映画「八つ墓村」のロケも

それでも、町並みの維持は並大抵ではない。人口減少・高齢化が加速し、集落の人口は300人を割り込んでいる。吹屋ふるさと村の「村長」を務める戸田誠さんは「町の会合に出るのは80歳代が主体。64歳のわたしなんか若者扱いですよ」と苦笑する。戸田さんは元教員。小学校校長を定年退職後、「育ててもらった吹屋の町並みをどうしても後世に残したい」と立ち上がった。今は観光ガイドから移住者の受け入れ、イベントの企画まで一手に引き受けている。さらに主（あるじ）を失った古民家を引き取り、夜でも楽しめる飲食店とゲストハウスに再生しようと汗を流している。



戸田さんが再生を目指す古民家

若年層の流出に悩まされてきた吹屋だが、最近
は町並みに惹き付けられて移り住む人も現れてい
る。小倉邦子さんもその一人だ。岡山県新見市で
整体を仕事にしていたが、今は「下町ふらっと」
でベンガラ染めに精を出す。「煉瓦色の町並みに
一目惚れしてしまい、思い切って移住しました」
一。小倉さんらはTシャツやストールなどを一つひ
とつ丁寧に、味わい深い赤銅色に染め上げていく。
代表の仲田芳子さんは「完全に手作業だから同じ
ものはありません。雨の日は染物を干せませんか
ら、店はお休みです」一。ここで働く女性はみな
若々しく、笑顔がキラキラ輝いていた。



吹屋に移住してきた小倉邦子さん



二人一組で染物を天日干し



「下町ふらっと」代表の仲田芳子さん（左）と皆さん

吹屋から市街地に下り、高梁市が誇るもう一つ
のキラコンテンツ「備中松山城」に向かう。国
から重要文化財の指定を受け、天守の現存する山
城では日本で最も高い所（標高430メートル）に
そびえる。秋～冬の早朝に運が良ければ、「雲海
に浮かぶ天守」を見ることができる。外国人の間
でもその幻想的な姿が人気を呼び、またNHK大河
ドラマ「真田丸」でも映像が使われたため、来訪
者は過去10年間で約2万人から約10万人に増えた
という。登山道に入ると急坂が続き、息切れしな
がら「難攻不落の名城」を実感した。



雲海に浮かぶ備中松山城（提供）高梁市

築城は1240年に
さかのぼり、江戸時
代後期からは備中松
山藩の板倉氏が城主
に。幕末、藩主の板
倉勝静（いたくら・
かつきよ）は将軍・
徳川慶喜から筆頭老
中として重用される。
だがそのために明治
維新では朝敵となり、
禁固刑に処せられる。
藩名も四国の伊予松
山藩と紛らわしいた
め、高梁藩に改称さ
れてしまう。



山田方谷像（郷土資料館）

その際、勝静の家臣で陽明学者の山田方谷（や
まだ・ほうこく）の尽力により、備中松山城は無
血開城となった。そのおかげで「雲海の山城」は
破壊されずに生き延びたから、高梁市民は今も方
谷のことを「先生」と呼び敬愛して止まない。



備中松山城の天守

1805年、方谷は武家から落ちぶれた農商の子として当地に生まれた。神童として知られ、4歳で大人顔負けの達筆を披露し、5歳になると新見藩の儒学者・丸川松隠の塾に入門。8歳で「論語」を読破していたという。京で朱子学、江戸で陽明学をそれぞれ学んだ後、備中松山藩に帰り、桑名松平家から養子に入った板倉勝静の教育係を任された。

藩主になった勝静は方谷を現代の最高財務責任者（CFO）に当たる元締役（もとじめやく）に起用し、藩士の贅沢がたたって危機に瀕していた藩の財政改革を命じた。当時の備中松山藩の歳入は公称5万石でも実際は1.9万石にすぎず、大坂の商人から巨額の借金をしていた。このため方谷は「上下節約」の目標を掲げ、痛みを伴う大改革に着手。藩士の給与を削減したほか、宴会・供応・贈答・絹織物着用などを禁止した。自らの給与も中級藩士の水準まで引き下げたという。

歳出全般にメスを鋭く入れる一方で、方谷は歳入を大幅に増やす成長戦略も立案・実行した。鉱山開発によって砂鉄を採り、備中鋤（くわ）に代表される農具や刃物などを生産。タバコや茶、柚子（ゆず）といった特産品を育て上げ、藩の専売収入を飛躍的に拡大したのである。方谷の改革着手からわずか8年で備中松山藩は借金10万両を完済し、逆に資金10万両を蓄えたという。方谷は全国から集まった門弟に改革の要諦を授け、その中の河井継之助は越後長岡藩に帰って藩政改革を断行した。

また、方谷は西洋式の兵法を導入し、軍制改革も推進した。土農工商の身分制度を打ち壊して「農兵隊」を組織し、これが長州藩・高杉晋作が組織した「奇兵隊」のモデルになったという。購入した米国製の帆船は江戸への特産品輸送に使うだけでなく、有事の際は軍艦に転用できるようにした。こうした先進的な改革が実を結び、5万石の備中松山藩は20万石クラスの大藩に匹敵する軍事力を備えるようになった。【注】山田方谷生誕200年記念事業実行委員会「山田方物語」を参考にし、一部を引用させていただきました。



ご当地ゆるキャラ「ほうこくん」（高梁市役所）

「備中の小京都」といわれるように、高梁市の中心部には方谷が活躍した時代の町並みが残されている。石火矢町ふるさと村の武家屋敷には、今も江戸時代の空気が漂う。このほか、築100年を超える尋常高等小学校の校舎（現郷土資料館）や醤油で財を成した豪商の邸宅（現商家資料館）、備中松山城が外堀とした紺屋川筋美観地区、映画「男はつらいよ」のロケ地となった薬師院…。コンパクトな市街地に「歴史の証人」がひしめき合う。

まるでタイムカプセルのように、この街は多数の貴重なコンテンツを見事に維持している。その理由を尋ねると、高梁市の近藤隆則市長からは「揺れない安全安心な街なんです」という答えが返ってきた。地盤が安定しており、日本国内では大地震の発生する確率が最も低い地域のひとつとされるのだ。実際、最大震度7の阪神・淡路大震災（1995年）や同6弱の鳥取県中部地震（2016年）の際も、高梁市は同3でとどまったという。「揺れない街」の知名度が向上すれば、リスク分散や事業継続計画（BCP）の観点から、産業界が高梁市に大きな関心を寄せるかもしれない。



高梁市の近藤隆則市長



武家屋敷



商家資料館



紺屋川筋美観地区

山田方谷の発揮した進取の精神を受け継ぐかのように、近藤市長はユニークな施策を展開している。今年2月にはJR備中高梁駅に隣接する形で高梁市図書館をオープン。入館者は開館からわずか3カ月で20万人を突破し、年間目標を達成した。その秘密の一つが併設されたお洒落なカフェ。近藤市長は「スターバックスが国内出店した街の中で、最も人口が少ないのが自慢です」と笑みを浮かべる。図書館の運営をカルチャー・コンビニエンス・クラブに委託し、蔦屋書店や観光案内所もある。図書館は約12万冊の蔵書を抱え、年中無休で朝9時から夜9時までオープンしている。



高梁市図書館の外観と入口

来館者のおよそ6割は倉敷や総社、新見などの市外から。例えば、倉敷市民が高梁市図書館で本を借りた場合、倉敷市内の図書館で返却できる。岡山県西部を流れる高梁川を共有する7市3町がスクラムを組み、共同で施策を展開しているからだ。観光や教育・子育て、農業など幅広い分野で発展を目指す「高梁川流域連携」は、市町境を越えて少子高齢化に立ち向かう行政の挑戦である。

近藤市長によると高梁市の人口動態は現在、1日に2人亡くなり、2日に1人生まれる計算になるといふ。市は少子化・子育て対策に歯を食いしばって取り組み、移住者の受け入れも進めているが、人口減少にブレーキを掛けることは極めて難しい。このため、限られた資源を最大限有効に活用するため、市長は図書館に象徴されるように中心部でコンパクトシティ化を推進する。

その一方で、広域合併前の各町の役場所在地も定住圏として維持し、ダイバーシティ（多様性）を尊重している。山間部の「買い物難民」を救うため、移動図書館車にパンや日用品を積み込んで販売したり、診療所の2階を高齢者向け住宅にしたり…。「すべてのお年寄りに市街地に住めと言うのは無理。とはいえ、広い市域全体に何でもかんでも用意するのも無理なんです」—

近藤市長と同じ悲痛な叫びは全国各地から聞こえてくるし、これからは大都市圏でも人口減少が本格的に始まる。定住人口を増やせないなら、国内外からの観光客など交流人口を拡大するしかない。その点、高梁市は「吹屋ふるさと村」と「備中松山城」という二大キラーコンテンツを持ち、潜在能力は決して低くない。

そして何よりも、「方谷の末裔」の人懐っこい開放的な市民気質が魅力である。撮影しながら街中を歩いていると、お年寄りや高校生が笑顔で「ご苦労さんです」「こんにちは」と声を掛けてくれる。全国を取材しているが、こういう街にはそうお目にかかれない。「ひと・まち・自然にやさしい高梁」を目指す市長の街づくりの展開に期待したい。



ご当地グルメ「インディアン・トマト焼きそば」
昭和50年代に小学校給食で大人気

(写真) 提供以外は筆者
PENTAX K-S2

リンゴ王国がソフトパワーで目指す「観都」／弘前市（青森県） コンパクトシティが地方を救う（第12回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

人類の長い歴史の中で最も身近な果物、それはリンゴかもしれない。旧約聖書において「知恵の樹」として登場し、英語圏ではaで始まる「Apple」が最初に習う単語になる。このため、リンゴには知性や知的といったイメージが強く、創造者に愛されてきた。例えば、アップル・レコードを設立したビートルズは音楽によって革命を起こした。スティーブ・ジョブズが築いたアップル・コンピューター（現アップル）は今、携帯電話やパソコンで世界を席巻する。

一方、日本では古くから和リンゴの花が愛され、食用というより仏前の供え物として大切に扱われてきた。江戸時代末期に今の西洋リンゴの苗木が米国から伝来すると、明治政府は寒冷地の農業振興策としてその苗木を各地に送る。それに先立つ1875（明治8）年のクリスマス、弘前市（青森県）では米国人宣教師が生徒にリンゴを振る舞っていた。以来、旧藩土の屋敷畑で栽培が広がり、改良の上に改良が重ねられ、今や弘前市は全国生産量の2割を占め、日本一の「リンゴ王国」に発展を遂げた。

弘前市の葛西憲之市長にインタビューすると、「日本一というより、クオリティーでは世界一のリンゴ」と言い切った。市は「りんご王国推進会議」を設置するなど、リンゴの観光資源化や内需・輸出拡大に努めている。とりわけ台湾で人気に火が付き、市長自ら現地の百貨店に乗り込んで6年前からプロモーションを展開中だ。また、市内では50店舗以上がアップルパイを販売し、そのガイドマップを制作するという熱の入れようだ。地元産のシードル（リンゴ酒）も有望視されており、弘前市りんご公園の一角に醸造所も設けた。



弘前市の葛西憲之市長



市内50店以上でアップルパイを販売



弘前市りんご公園（提供）弘前市

弘前市の誇るキラコンテンツはリンゴに限らない。東京ドーム10個分を超える約50ヘクタールの弘前公園には、52品種・約2600本ものサクラが植えられている。リンゴ農家の技術を導入した独特の剪定（せんてい）方式に支えられ、樹齢100年超のソメイヨシノは400本を数える。弘前城外濠の水面をサクラの花びらが覆い尽くす「花筏（はないかだ）」を一目見ようと国内外から観光客が詰め掛け、今春の「弘前さくらまつり」期間中の人出は251万人に達した。

弘前市は「桜文化の情報発信基地」として国内外の知名度を上げるため、地道な努力を積み重ねてきた。例えば、中国・武漢市に対しては、サクラの木を贈り、その難しい手入れを担う「桜守」も派遣。今では中国一とも称される桜園が誕生したという。また、今年1月就航した定期チャーター便の効果もあり、中国から弘前へツアー客が訪れるようになり、葛西市長の「桜外交」は結果を出し始めた。来春、弘前公園のさくらまつりは100周年を迎え、知名度の更なる向上を期待する。



弘前さくらまつり（提供）弘前市

この弘前公園の中心が弘前城である。全国に12しか残っていない、江戸時代以前からの現存天守の一つである。リンゴやサクラと並ぶ弘前市のキラコンテンツだが、近年危機に直面した。1811年に完成した現在の天守が傾き、本丸の石垣も膨らむなど老朽化が深刻化していたのだ。石垣を修理するためには巨大な天守を移動させる必要があり、市は工事期間中に貴重な観光コンテンツを失ってしまう…

葛西市長は悩みに悩み抜いた末、決断を下した。天守の移動や石垣の修理といった全工程を見える化し、イベント開催によって観光資源にするというものだ。いわば「逆転の発想」で危機を好機に変えたのである。目論見はズバリ当たり、天守を持ち上げてゆっくりゆっくり仮天守台に移動させるという作業（曳屋＝ひきや）が国内外で大きな話題に。米欧の有カメディアも「天守が動く」と驚きをもって盛んに報道し、葛西市長は「25億円規模の宣伝効果」と試算する。現在、移動後の天守はどっしりと地面に鎮座し、作りかけの巨大なプラモデルのようにも見える。2020年には修復工事が終わり、元の位置に戻されるという。



「曳屋」で移動した現在の天守



修復工事中的の本丸石垣

弘前城を計画したのは、津軽地方を統一した津軽為信（ためのぶ）。2代藩主・信枚（のぶひら）がそれを受け継ぎ、1611年に完成した。城を中心とする緻密な都市計画によって街づくりが進められ、それに基づいて寺社や家臣団、商人などが移住する。例えば、弘前城の南西には防衛拠点として33もの曹洞宗の禅寺が集められ、非常に珍しい「禅林街」が今も健在だ。また、4代藩主・信政（のぶまさ）の時代に建立された最勝院の五重塔は、高さ25.4メートルの威容と華やかさを誇り、観る者を圧倒する。



津軽為信の像



高さ25.4メートル、最勝院の五重塔



全国でも珍しい「禅林街」と
長勝寺の三門



津軽藩は優れた武家文化を育んだ。今回、その伝統を受け継ぐ匠（たくみ）を取材する機会をいただいた。この二唐（にがら）刃物鍛冶所（弘前市金属町）は、およそ350年前に津軽藩から刀作りを拝命した鍛冶の名門だ。今は刀鍛冶7代目の吉澤俊寿さん（59）と8代目の剛さん（30）の親子が門外不出の製造技術を守り、「良品は声無くして人を呼ぶ」という家訓を信じて精進を重ねる。

津軽地方をはじめ北東北では古代から製鉄が盛んであり、奈良・平安時代の鉄製刀も多数出土する。江戸時代の弘前城下では津軽藩主の庇護の下、100軒以上の鍛冶屋が活躍していたという。だが、明治政府が帯刀を禁止したため、刀鍛冶は存亡の危機に陥る。このため二唐は名刀の切れ味を和包丁などへ応用しながら、幾多の危機を乗り越えて必死にそして見事に生き抜いてきた。

とりわけ俊寿さんの祖父、5代目の二唐國俊氏は1931年に意を決して東北大学附属金属材料研究所（仙台市）の門をたたく。当時世界最強の永久磁石鋼であるKS鋼を発明した、「鉄鋼の父」こと本多光太郎博士に長期講習生として師事したのだ。そして、國俊氏は江戸時代からの刀鍛冶に最先端の金属理論を導入する。

第二次大戦中は展覧会で内閣総理大臣賞や陸軍大臣賞などを受賞し、押しも押されぬ名匠に。それが仇（あだ）となり、終戦後は駐留米軍に目を付けられた。だが、米軍もその技術力の高さに驚いて一目置くようになり、國俊氏を刀鍛冶や刀剣鑑査官として重用する。

俊寿さんは「戦後、二唐の包丁は蟹工船など水産業向けに売り上げを伸ばしたが、漁業の衰退とともに売れなくなった」と振り返る。そこで刀鍛冶の技術を応用する形で、建築用の鉄骨製造事業を拡大した。

例えば、「鍛冶屋が造る鉄骨製カーポート」は2メートルの積雪に耐え、雪国の市民が苦しむ雪降ろしの負担を軽くする。前述した弘前城の曳屋においても、実は二唐の鉄骨技術が大活躍。本丸作業構台や仮天守台の基礎造りを担い、時空を超えて津軽藩主に奉公したというわけだ。

もちろん、伝統の刃物部門も進化を続けている。俊寿さんは後継ぎに悩んでいたが、長男の剛さんが8代目を引き受け、今は「父子鷹」で伝統を守る。剛さんは「学生時代は小説家になりたかったし、ゲームの企画にも興味があった。東京でフリーター生活を送っていたら、母から『お願いだから後を継いでくれ』と泣いて頼まれ…」

連日、剛さんは1200度の炉と向き合い、鋼（はがね）と地鉄を打ち合わせながら、一丁一丁に魂を込めて和包丁を作り続ける。全工程を一人で担い、完成までには数日を要する。同じものは二つとなく、価格は一丁数万円、高級料亭の料理人ならば20万円もの包丁も愛用するという。鋭くキラリと光る和包丁はもはや道具の域を超え、芸術作品のように見える。

海外では日本食ブームとともに和包丁の人気が高まり、二唐はフランスやドイツの見本市に出展。世界自然遺産・白神山地の滝がつくる波紋からヒントを得た、「暗紋」という二唐独自のデザインは欧米での評価も高い。最近も剛さんは中国・広州の郊外まで出張し、「高級包丁に対する関心をひしひしと感じた」という。今、国内の人口減少に打ち勝つため、輸出に活路を見出そうと静かに闘志を燃やす。

刀鍛冶という創業以来のコア技術を大事にする一方で、時代がもたらす技術革新を貪欲に吸収する。こうして二唐は生き抜いてきた。変えてはならない最も大切なものを守りたいからこそ、常に変化を求めて挑戦を続けてきたのだ。老舗（しにせ）といわれる企業に共通する経営哲学だと思う。

だが、足元では人手不足が難題だ。俊寿さんは「刃物部門は若い人の感性が必要だから、4~5人増やしたい。相手の目を見て話すことができ、やる気さえあれば、わたしが一から鍛え上げる」と全国の若者に刀鍛冶への挑戦を呼びかけている。



製造途中の和包丁



「父子鷹」で守る刀鍛冶



完成した和包丁と
独自デザイン「暗紋」



二唐の鉄骨技術は意外なところでも活躍する。江戸時代から伝承されてきた「弘前ねぶたまつり」（例年8月1日～7日）で、ねぶたの骨組みを製作しているのだ。ねぶたの起源には諸説がある。中でも、暑さが厳しく農作業の忙しい夏に襲って来る睡魔を追い払う「ねむり流し」が始まりという説は興味深い。青森市では「ねぶた」を「ラッセラー」という掛け声で引くが、弘前は「ねぶた」で掛け声は「ヤーヤドー」。しかし、祭りに懸ける熱い思いに変わりはない。寝食を忘れてねぶたを製作し、街中を引いて歩いて燃え尽きる。老いも若きも男も女も、真夏の夜に夢をみる。



「弘前ねぶたまつり」初日
(2017年8月1日)

弘前ねぶたは町会単位で出すのが基本だから、コミュニティを支える子供からお年寄りまでが団結して練り歩く。その手作り感が実に微笑ましい。弘前ねぶたは扇型が主流であり、その正面の「鏡絵」は三国志や水滸伝などの勇将を題材にしたものが多い。対照的に、裏面の「見送り絵」は美人画が主体である。

弘前のユニークな伝統文化は、「食」の分野でも大切に受け継がれていた。戸田うちわ餅店もこうした老舗の一つである。創業時期は定かでないが、江戸末期から明治初期にさかのぼるといふ。うちわ餅にはゴマの餡（あん）がたっぷり掛けられ、香ばしい風味が口の中一杯に広がる。餅は絶妙な歯ごたえがあり、伝統の重みを味わえる逸品。これが一つ130円では、何だか申し訳ない気持ちになる。店を支える戸田しのぶさん（60）は「正直言うと、ゴマや砂糖、片栗粉などが値上がりし、この値段では厳しいんです。でも、高校生が買いに来てくれますから…」

5年前、この伝統の味に危機が突然襲いかかってきた。5代目が亡くなり、うちわ餅が作れなくなったのである。男の子が三人いたが、上の二人は家を出ており、五代目の妻しのぶさんは目の前が真っ暗に…。すると、三男の当時高校生だった陽介さん（24）が立ち上がり、「オレが店をやるよ」一。津軽海峡を単身渡り、北海道函館市にある製菓の専門学校に入学。菓子作りの基礎を学んで店に帰り、独学でうちわ餅作りに挑んだ。



戸田うちわ餅店



ゴマ餡たっぷり「うちわ餅」

5代目は一冊のノートを陽介さんに遺していた。それが一子相伝のレシピである。陽介さんは読み進むうち、「季節や気温、湿度によって作り方が変わることを知り、びっくりした」一。試行錯誤の末、ようやく満足なうちわ餅を作れるようになり、昨年3月に店を4年ぶりに再開する。その心意気に対し、弘前市民は長い行列でこたえた。

6代目となった陽介さんは毎日午前3時に起床し、母と二人で精魂込めて200個近くを作り上げる。陽介さんは「地元で愛されてきた店だから、変わることなく続けていきたい」一。趣味の海釣りもしばらくお休み。父の背中を思い出しながら、うちわ餅作りの腕上げに集中する。



戸田うちわ餅店6代目陽介さんと母しのぶさん

このほかにも市街地には、海山川の新鮮素材を活かし、美味美酒を提供する飲食店が並んでいる。また、「弘前ラーメン」の店はあちこちにあり、懐かしい醤油味でほっと一息つける。



添加物使わずに素材の味を引き出す
(芝田商店の相馬映江さん)



「弘前ラーメン」
懐かしい醤油味

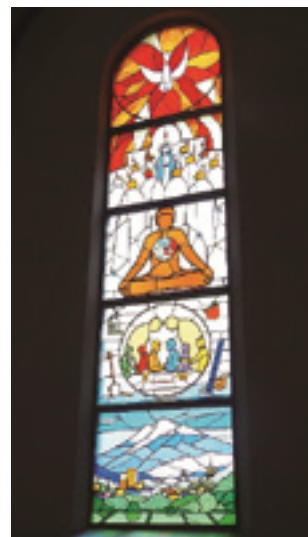
江戸時代に城下町として繁栄した弘前市には、明治維新以降、西洋文化が急速に流入した。市街地は大規模な自然災害や戦禍を免れてきたため、今も明治・大正時代のレトロモダンな建物が幾つも健在であり、シャッターを切る回数がかいつの間にか増えている。



旧第五十九銀行本店本館（現青森銀行記念館）



カトリック弘前教会聖堂と郷土色豊かなステンドグラス





日本聖公会弘前昇天教会教会堂



旧弘前市立図書館



商店街のシンボル「一戸時計店」

日清戦争後の1898年、弘前市には陸軍第八師団が設置され、「軍都」と呼ばれるようになった。同師団が対ロシア開戦に備えて厳冬の青森・八甲田山で雪中行軍訓練を行い、死者199人を出した遭難事件は小説や映画になった。なお大正ロマンの雰囲気漂う師団長官舎は今、スターバックスコーヒーの店舗として活用されている。



旧陸軍第八師団長官舎
(現在はスターバックスコーヒーの店舗)

弘前市では、津軽藩の藩校を受け継ぐ形で1872年に私立学校・東奥義塾が開校。1920年には旧制弘前高校が設けられ、「学都」としての性格も強めた。今も市内には国立大学法人・弘前大学など六つの高等教育機関が存在する。学生約1万人と教職員約2000人を合わせると、市の人口の6%強を占める。

これまで紹介してきたように、弘前市はリンゴや桜、弘前城、伝統工芸、豊かな食文化、レトロモダン建築といった多彩なコンテンツに恵まれ、時代の変化に対応しながら、城下町→軍都→学都と進化を遂げてきた。

しかし、弘前市も少子高齢化の荒波からは逃れられない。人口は2016年の17.6万人から2035年には14万人まで減り、逆に65歳以上の高齢化率は29.8%から37.0%まで上昇する見通しだ。このため、市は「日本一のリンゴ産地でも高齢化で担い手が不足し、その高齢者を支える看護師・介護従事者も不足する」（葛西市長）と危機感を募らせ、周辺自治体に先駆けて都市再生特別措置法に基づく「立地適正化計画」を今年3月末に策定した。

この計画の中で、弘前市は①都市的魅力の中核となる「中心地区」②日常生活を支える都市機能を備えた「地域拠点」③学都の拠点となる「学園地区」という三種類の「都市機能誘導区域」をバランス良く設定。その周りに居住を維持・誘導すると同時に、各誘導区域間を公共交通ネットワークで結ぶという構想だ。ネットワーク型コンパクトシティを目指すものであり、市はその形が似ていることから「りんごの花」型の都市構造と呼ぶ。葛西市長は「拡散した市街地を元に戻すことは難しい。郊外の拠点も尊重する『コンパクト・プラス・ネットワーク』のほうが、持続可能な社会を実現できるのではないか」と指摘する。



弘前市の中心地区と岩木山



「津軽富士」とも呼ばれる岩木山（標高1625メートル）



利用客数が回復中の弘南鉄道大鰐線（おおわにせん）



真冬の風物詩「雪燈籠まつり」（提供）弘前市

弘前市がコンパクトシティを志向する背景には、雪国独特の事情もある。毎年の雪降ろしは市民にとって大きな負担であり、高齢者になれば尚更だ。このため、市は除雪から融雪に舵を切り、歩道の雪を溶かしてお年寄りが冬でも気軽に外出できるようにしたい。だがコストを考えると、広い市域全体に整備することは難しい。このため、「できるだけ集積して住んでもらい、融雪ネットワークをしっかりと整備する」（葛西市長）というわけだ。

そして定住人口の減少が不可避ならば、恵まれた各種コンテンツによって国内外から観光客を呼び、交流人口を増やそうというのが弘前市の生き残り戦略である。葛西市長は青森県庁職員時代、縄文時代の大規模集落跡が発見された「三内丸山遺跡」（青森市）の公園整備を担い、有数の観光資源に仕立て上げた実績がある。ソフトパワーの集客力とその重要性を学び、それが弘前市政でもリング王国のPRや弘前城天守移設の見える化などの施策に活かされている。

今、弘前市は市街地の古い赤レンガ倉庫とその周辺を再開発し、美術館を核とする文化交流施設を2020年に整備する計画を進めている。世界的な現代美術アーティストの奈良美智（なら・よしとも）氏は弘前で生まれ育ち、赤レンガ倉庫の一角にも同氏の作品がある。葛西市長は「弘前のキラコンテンツは歴史・文化」と強調し、ソフトパワー全開で人口減少時代を乗り切る考えだ。この街は城下町→軍都→学都を経て、次は「観都」として発展する基礎を築き始めた。



再生する赤レンガ倉庫と奈良美智氏の作品



（写真）提供以外は筆者 PENTAX K-S2

寂れた商店街が「昭和の町」で奇跡の復活／豊後高田市（大分県） コンパクトシティが地方を救う（第13回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

大分県豊後高田（ぶんごたかた）市は国東（くにさき）半島の北西部にある。江戸時代から商業や農林水産業が盛んで半島一の賑わいをみせていた。ところが、戦後の高度成長が始まると、若年労働力は都会へ大量流出し、典型的な過疎地域に…。地元の商店街や商工会議所、行政は街の衰退に危機感を強め、スクラムを組んで再生に乗り出した。試行錯誤の末、寂れていた商店街は昭和30年代（1955～1964年）の懐かしさを観光客に体験してもらおう「昭和の町」として息を吹き返し、今では年間35万人以上が訪れるキラコンテナになった。

大分空港からバスに乗り、50分ほどで豊後高田バスターミナル（BT）に到着する。乗降場は鉄道の駅ホームのようだ。なぜなら旧宇佐参宮線（大分交通）の駅舎をBTに転用したからだ。1965年の同線廃止以降、豊後高田市は鉄道の無い街なのである。昔の駅改札口を出ると、「豊後高田昭和の町 駅通り商店街」のアーチが歓迎してくれた。それをくぐると空気が変わり、「昭和」の匂いが漂い始める。



駅が消えても「駅通り商店街」は健在

江戸時代初め、豊後高田は島原藩の飛び地になり、陣屋（＝藩の出張所）が置かれた。太平洋戦争前は蠟（ろう）の原料となる櫛（はぜ）の木が巨万の富をもたらし、全国有数の長者も出現した。戦後は関西方面に向けて竹やコメなどが盛んに出荷され、昭和30年代の港や商店街、飲食店は大いに賑わう。干潟では海苔（のり）の養殖が盛んであり、山と海の幸がこの街を支えた。現在の豊後高田市全域の人口は約2万2000人だが、最盛期には5万人を超えていた。



昭和37
（1962）年
当時のガソリンスタンドを復元



宇佐参宮線で活躍した独クラウス社製SL（宇佐神宮）

昭和30年代「三種の神器」洗濯機・冷蔵庫・白黒テレビ



ところが、高度成長によって戦後生まれのベビーブーマー世代が街を去り始めると、豊後高田は急速に衰えていく。干拓事業によって干潟が消え、海苔養殖をはじめ水産業は壊滅状態に陥る。農業も後継者不足が深刻になり、前述したように宇佐参宮線も過疎化とモータリゼーションの波に呑み込まれた。

中心部の商店街ではスーパーが撤退し、二つの銀行の支店も国道沿いに移転。人通りはめっきり減り、廃業に追い込まれる商店も…。祭りやタイアップした売り出しや各種イベント、朝市の定期開催なども集客面では不発に終わり、商店街の3分の2がシャッターを下ろす苦境に陥った。「人よりも犬・猫のほうが多い」と揶揄されるほど衰退してしまっただのである。

1980年代後半、日本列島がバブルに沸き立つ中、豊後高田の商店街も復活に向けて動き出した。だが…大失敗に終わった。豊後高田市の河野真一・商工観光課長は「『商業活性化構想』を外部に委託して策定してもらったが、街の身の丈を超える大掛かりな構想だった」と指摘する。商店街の関係者は原点に戻り、「自分たちの街の活性化は自分たちで考える」という結論に達する。そして、三つの方向性を打ち出した。すなわち、①お金を掛けず、大都会を追わない②この街ならではの個性を活かす③商業と観光を一体的に振興する一である。

しかし、既に日本経済のバブルは崩壊しており、商店街再生には強烈な逆風が吹き荒れていた。また、城下町や明治、大正をテーマにした街づくりでは全国にライバルが多数存在するため、勝ち目がない。一方で、豊後高田は「急激に衰退したため、市に再開発する財政余力もなく、商店街は全盛期の昭和30年代のまま“瞬間凍結”の状態が続いていた」（河野氏）一



旧共同野村銀行

豊後高田商工会議所が徹底的に調査すると、お金を掛けずに個性を活かして商業と観光の一体的振興を実現するには、最終的に「昭和」しか残らなかった。商店街の建物の70%が昭和30年代以前に建築されていたことが分かり、商店街と商議所、行政が一体となって「レトロモダンな街づくり」を目指すことにした。

こうして「豊後高田昭和の町」プロジェクトが2001年に本格的に始動する。昭和30年代の街並みを整備するに当たり、①昭和の建築再生（昭和の街並み景観をつくる）②昭和の歴史再生＝一店一宝（店で眠り続けていた「お宝」を店頭で展示する）③昭和の商品再生＝一店一品（昭和を感じさせる店自慢の商品を販売する）④昭和の商人再生（昔ながらの接客でもてなし、「ご案内人」が「昭和の町」の語り部となる）一といった四つの「再生」が掲げられた。「昭和」にマッチするよう修景を施した認定店舗は、当初の7店舗から今では44店舗にまで拡大している。



昭和30年代に修景



「昭和の町」のアイドル犬「ゆきちゃん」
（松田はきもの店）

「ご案内人」の日浦勝彦さんにガイドをお願いし、「昭和の町」を歩き始めた。日浦さんは町をこよなく愛し、隅から隅まで知り尽くす。「かつては本当に犬と猫しか歩いていなかったんです。道幅も狭いままでしょ」一。いつの間にか幼少期にタイムスリップし、漫画「三丁目の夕日」（西岸良平）の世界に引きずり込まれる。商店街は全長550メートルに過ぎないが、「お宝」の山をじっくり見て歩くと丸一日かかりそうだ。



「ご案内人」日浦勝彦さん

観光拠点となるのが、「昭和ロマン蔵」である。明治から昭和にかけて「大分県一の富豪」と称された野村財閥が、1935年前後に米蔵として築造。当時はコメ1万俵を蓄えていたが、今はリノベーションされて昭和のミュージアムに。おもちゃや駄菓子、民家のタイル貼り流し台など、どれも懐かしいものばかりだ。「昭和の夢町小学校」には木製の机・椅子や黒板が備えられ、先生に叱られた記憶がよみがえる。1時間3100円でレンタルできるから、同窓会での利用もあるという。



80年以上前の米蔵をリノベート「昭和ロマン蔵」



タイル貼り流し台



「千嶋茶舗」は「お宝」の山

「昭和ロマン蔵」から商店街に入ると、前述した「一店一宝」や「一店一品」に目を奪われ、カメラのシャッターを切り続けた。この町で最も古い佐田屋の創業は1694年。醤油や味噌などの醸造業で財を成し、現在は12代目。10代目が札幌農学校（現北海道大学）で学び、この店が日本で初めて「通信販売」を始めた。寒冷地で栽培する甘藍（かんらん、キャベツの別名）を温暖な九州でも育つよう品種改良に成功。郵便で注文を受け付け、その種子を全国に販売したという。

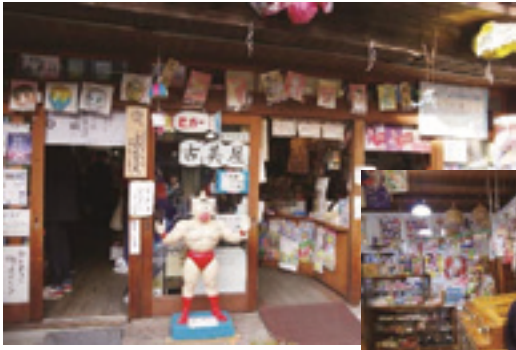


小学校の教室を再現



日本初の通信販売を始めた「佐田屋」





駄菓子「古美屋」と川谷ちず子さん

「中野鮮魚店」の中野久美さんは75歳になっても元気一杯。御主人の啓吾さんが病を患った後は、朝5時起きで市場に仕入れに行く。突然の取材にもかかわらず、久美さんは「若い人が魚を調理しなくなったから、ナマ物は売れなくなっちゃった。だから茹でたり焼いたり揚げたり忙しいんだよ」と飛び切りの笑顔で話してくれた。店は朝9時から夕方4時までで定休日はない。「色んな人と話ができるから、仕事をしているほうが楽しくて元気なんだよ」ー

「昭和の町」が誇るたくさんの「お宝」の中で、最も価値が高いのは町の人のごく自然にももちろん無料で提供してくれる笑顔だ。それこそが、昭和が遺してくれた最高のレガシーだと思う。



アイスキャンデー「森川豊国堂」と森川多賀子さん

「昭和の町」では地元出身者ばかりではなく、「ソトモノ」も活躍している。餅や煎餅を製造・販売する二代目餅屋清末「杵や」の清末素子さんは新潟県出身。東京で百貨店に勤務していた時、今の御主人と知り合い結婚。銀行員だった御主人が家業を継ぐため、2000年に故郷の豊後高田へUターンした。素子さんは「当時は犬・猫どころか、狸しか歩いていませんでした…」と苦笑する。今は名刺に「おもてなし担当」と刷り込み、店頭で焼き立ての煎餅を振る舞う毎日だ。



「中野鮮魚店」と中野久美さん

この町は昭和の味の宝庫でもある。揚げパン、コッペパン、鯨の竜田揚げ、ソフト麺…。カフェ&バー「ブルヴァール」は、懐かしい学校給食を古い金属製の食器とともに提供する。また、大寅屋食堂は実に1980年から価格を据え置いており、今もチャンポンやカレーライス、ナポリタンを350円、カツ丼も450円で提供する。空き店舗も生まれ変わり、旧共立高田銀行の店舗をリノベートした「アルフォンソ」は、売れ切れるパンが続出している。



二代目餅屋清末「杵や」と清末素子さん



焼き立てパン「アルフォンソ」(旧共立高田銀行)

「昭和の町」のシンボリックな存在が、2009年に復活したボンネットバス（いすゞ自動車製1957年式）である。土日や祝日を中心に無料で運行され、ほぼ満員になるという人気者だ。今年「還暦」を迎えたから、故障も多くてメンテナンスは大変。それでも関係者の努力により、商店街をのんびり走り続けている。このほか、「昭和ロマン蔵」には往年の名車が丁寧に保存されている。



商店街をのんびり走るボンネットバス



昭和の名車がズラリ

スタジオのセットではなく、生身の人間が毎日生活している舞台だからこそ、「昭和の町」には作り物ではない本物の強みと説得力がある。このため、映画のロケに利用され始めている。だがそれが実現するまでには、関係者の並々ならぬ苦労があった。

豊後高田市フィルムコミッションの努力が実り、ついに「昭和の町」でのロケが決定。2017年2月、3週間にわたり撮影が行われ、市民170人がエキストラとして参加し、商店街も炊き出しや差し入れでロケを精一杯応援した。

それが2017年9月に公開された「ナミヤ雑貨店の奇蹟」（原作・東野圭吾、主演・山田涼介、監督・廣木隆一）である。豊後高田市観光まちづくり株式会社の水田健二さんは「完成した映画を観ると、涙がこぼれ落ちそうになった。『昭和の町』を『映画の町』としても売り出していきたい」と話す。今、ロケ地を新たな「観光素材」として懸命にPRしている。

こうして2001年にスタートした「昭和の町」はゆっくりだが、着実に成長を続けてきた。実質ゼロだった観光客は10周年の2011年には40万人を突破。犬・猫も歩かなかった町に「奇蹟」が起きたのである。



映画にも登場したボンネットバスと水田健二さん



映画「ナミヤ雑貨店の奇蹟」のロケ地に



市民エキストラとして出演した長岡洋子さん
（豊後高田市観光まちづくり株式会社）

過疎化に苦しんできた豊後高田市は「昭和の町」で息を吹き返した。都会の縮小相似形を目指すのではなく、「無」を武器にした心のこもった再生戦略が、国内外から集まる観光客のハートをつかんだのである。

しかし、豊後高田市は成功体験に酔うことなく、次のステージを視野に入れる。佐々木敏夫市長にインタビューを行うと、「自治体は過疎対策や平成大合併に伴う周辺部対策に追われ続け、国は地方創生を掲げてきた。しかし、いずれにも特効薬は無い」と言い切った。豊後高田市の場合、観光をメインにして観光客など交流人口を地道に増やしていくしかないというわけだ。



豊後高田市の佐々木敏夫市長

観光政策を推進する上で、佐々木市長が「次の魅力ある素材」と指摘するのが、ユニークな仏教文化である。国東半島の六つの郷には奈良時代から寺院や行場が点在し、六郷満山（ろくごうまんざん）と総称される。険しい山々と奇岩の数々が山岳信仰を生み、これが伝来仏教や宇佐神宮（大分県宇佐市、全国に4万超ある八幡宮の総本宮）の神仏習合と結びつき、独特の信仰文化を築き上げた。豊後高田市内には、日本最大級の石仏である熊野摩崖仏（くまのまがいぶつ）や国宝の富貴寺（ふきじ）大堂など歴史遺産が少なくない。



宇佐神宮（宇佐市）



川の中の巨石に刻まれた川中不動



熊野磨崖仏
約8メートルの不動明王と
約7メートルの大日如来



国宝の富貴寺大堂

六郷の一つである田染（たしぶ）は荘園時代からの稲作が健在であり、これを含む国東半島・宇佐地域は世界農業遺産に認定されている。



世界農業遺産・田染荘（たしぶのしょう）



佐々木市長は「数年以内にインドや中国から仏教作品を集め、2018年に開山1300年を迎える六郷満山に仏器文化のテーマパークを構築したい」という。それにより年間70万人の観光客を集め、「昭和の町」の集客能力40万人と合わせて110万人の来訪を見込んでいる。

また、市内には六つの温泉が点在し、「全市民がクルマでおおむね10分で温泉に浸かることができる」（佐々木市長）。ミネラル分の豊富な世界有数の炭酸泉もあり、温泉は豊後高田の新たな観光資源の候補になる。海岸部に足を運ぶと、長崎鼻と呼ばれる岬や夕日の美しい真玉海岸、海に突き出た珍しい粟嶋社など、観光スポットは予想以上に多い。もちろん新鮮な魚介類も堪能できる。



海に突き出た粟嶋社



鱧（はも）七味焼き

茹で「岬ガザミ」
（ワタリガニ）



また、豊後高田市は減り続けてきた定住人口も増加に転じるよう施策を打ち出している。子育て支援として、2018年4月から高校生までの医療費と中学生までの給食費を無料化する。佐々木市長は「子どもに罪は全く無いのに、親が給食費を払えないと子どもが後ろ指を指されてしまう。保護者の負担を軽減できれば、『もう一人産んでもいい』ということになる」と考え、出生率の向上に懸命に取り組んでいる。

市内には工業団地が三つあるが、「従業員の半分以上が市外から通勤してくる」（佐々木市長）。このため、宅地を市が無償提供し、市内に居住してもらう政策も検討している。市外からの移住を促し、政策総動員で少子高齢化に歯止めを掛け、人口増が実現するよう躍起になっている。インタビューの最後、佐々木市長は「市長選のマニフェストで約束したから、逃げるわけにはいかない。子どもたちの笑顔があふれる街にする」と力を込めた。これからも「昭和の町」は力強く進化を続けていこう。

（写真）筆者
PENTAX K-S2

世界文化遺産「熊野古道」で街を再生／田辺市（和歌山県） コンパクトシティが地方を救う（第14回）

産業・社会研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

人間の定義は様々だが、ある一面では「目標を定める動物」と言えるのではないか。古代から高い目標を掲げ、その実現に向けて努力を重ねてきたからだ。神の救いを得たいという一心から、長く厳しい道を歩き続ける巡礼もその一つである。

紀伊半島南部にある熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社）は二千年前から神々の宿る聖地とされ、巡礼者は幾多の困難を乗り越えながら、三つの大社を目指した。平安時代から京都の皇族・貴族の熊野詣が盛んになり、12世紀の後白河上皇は33回も行ったと伝えられる。女人禁制が当たり前の時代でも、熊野の神々は非常にオープンであり、男女や浄不浄、貴賤を問うことなく巡礼者を受け入れた。このため江戸時代の庶民の間では、熊野詣が伊勢参りと並んで熱狂的なブームを起こした。



その参詣道が「熊野古道」と呼ばれ、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。現在の田辺市（和歌山県）の市街地は「口熊野」と称され、古くから聖地の入口として栄えてきた。熊野古道には幾つかのコースがあり、そのうち熊野の聖域は中辺路（なかへち）の滝尻王子から始まる。熊野古道沿いには、「王子」と呼ばれる御子神が祀られた休憩所が数多く設けられていた。滝尻王子に一歩足を踏み入れると、突然、空気が重くなり、背筋が伸びるようなオーラを感じた。ここから先、巡礼者は神の救いを信じ、ひたすら険しい山道を進んでいく。



聖域の入口「滝尻王子」



世界文化遺産に2004年登録



険しい山道が続く熊野古道

このように田辺市には長い歴史があり、数多くの英雄や文化人を生んできた。中でも市民が誇りとする三大偉人が、源義経に仕えた豪傑・武蔵坊弁慶、孤高の科学者・南方熊楠（みなかた・くまぐす）、合気道の開祖・植芝盛平（うえしば・もりへい）である。

JR紀伊田辺駅の改札口を出ると、まずは精悍な弁慶像に目を奪われる。歌舞伎や講談の人気キャラクターで今なお抜群の知名度を誇るが、その実態は謎に包まれている。田辺が彼の生誕地であるという説が有力とされており、市内には弁慶ゆかりのスポットも少なくない。



弁慶と湛増の親子像



弁慶像（JR紀伊田辺駅前）

地元の人から「権現さん」と親しまれてきた闘雞（とうけい）神社は熊野三山の別宮的な存在であり、2016年に世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に追加登録された。その境内には弁慶とその父とされる湛増（たんそう）の親子像がある。

熊野三山を統括する別当を務めていた湛増は源平合戦の際、どちらに味方すべきか苦悩する。そこで神の意思を確認するため、本殿の前で平家の紅と源氏の白を象徴する鶏を7回闘わせた。すると白鶏が全勝したため、源氏側につくことを決断。熊野水軍の精鋭を壇ノ浦（山口県）に送り込み、源氏の勝利に大きく貢献したという。このため今も、闘雞神社は「勝運導きの神様」として御利益があるとされる。



弁慶腰掛の石



弁慶産湯の井戸



世界文化遺産「闘雞神社」

熊野の大自然は、「100年早かった智の人」(国立科学博物館)も生み出した。南方熊楠、その人である。世界最高水準の学術雑誌といわれる英国のネイチャーに51本の論文が掲載され、個人投稿では今なお最多記録といわれる。

明治維新前年の1867年、熊楠は現在の和歌山市内で誕生。鍋屋を営んでいた父が山積みしていた鍋や釜を包む反古紙(ほごがみ=書き損なった書道用紙)に囲まれ、それに書かれていた文字や絵をむさぼり読んで育つ。和漢三才図会という当時の百科事典全105巻をはじめ、各種書籍や新聞を手当たり次第に読み、書き写し、記憶した。まさに神童である。

熊楠は和歌山中学に進学後、植物採集に精を出す。とりわけ博物学で才能を発揮し、英語の書籍を参考にしながら、「動物学」と題するオリジナルの教科書を書き上げた。鼻が高かったため、「てんぎゃん」(=天狗さん)というあだ名を付けられる。本人も気に入り、写本の表紙に天狗の絵を描いていた。

1883年、上京して神田の共立学校(現開成高校)に入学。英語を教えていた高橋是清(後の首相、二・二六事件で暗殺)が南方を「ナンポウ」と呼んで生徒を笑わせていたという。翌年、大学予備門(現東京大学教養学部)に進む。同級生には夏目漱石や正岡子規らがいた。熊楠は「授業など心にとめず、ひたすら上野図書館に通い、思うままに和漢洋の書物を読みたり」と読書・筆写に明け暮れたため、落第して和歌山に帰郷する。

だが、熊楠は故郷にじっとしてられない。西洋の最新の科学思想を学びたいとの思いを募らせ、1887年に渡米してミシガン州立農学校に入学。米国人学生との衝突などで退学した後も、植物採集のためにフロリダやキューバまで足を延ばし、地衣類(藻類と共生する菌類の一種)の新種を発見した。

1892年、熊楠は大西洋を横断してロンドンに上陸。大英博物館の幹部に才能を見いだされ、同館を学問の拠点とする。前述したようにネイチャーへの投稿を始め、東洋の科学思想を紹介するデビュー作「東洋の星座」などを発表した。「さまよえるユダヤ人」など比較民俗学に関する論文も執筆している。また、中国の革命家・孫文と親交を深めるなど、グローバルな人脈を築き上げ、和歌山の神童はいつしか超人になった。

しかし、実家からの仕送りが滞り、困窮した熊楠は1900年に帰国を余儀なくされる。1904年に田辺に居を定め、熊野の植物採集に精を出す。結婚して子を授かり、波乱万丈の人生もようやく落ち着く…。という展開にはならなかった。



熊楠を物心両面で支えた平沼大三郎

明治政府が推進していた神社合祀政策(一町村一社に整理統合)に、熊楠は猛然と噛み付いたのである。合祀された神社の森が伐採されると、熊楠が研究対象とする微小な生物の棲み処や、神社を中心とする共同体の風習が破壊されてしまうからだ。熊楠は「エコロジー」という言葉を使い、生態系を守るべきだという思想を説いて回った。環境保護運動の先駆者なのである。



南方熊楠(南方熊楠顕彰館の所蔵写真)

熊楠は運動の先頭に立ち、新聞に神社合祀を批判する投書を書き、民俗学者・柳田國男らに協力を求めた。1910年、合祀推進の官吏に面会を要求した際、家宅侵入の容疑で拘留されてしまう。運動も挫折し、熊楠は在野の碩学として研究生活を再開する。

自宅の柿の木から新種の変形菌（ニアメーバ状でバクテリアを食べて増殖する動物的な性質と、胞子を作って増殖する植物的な性質を併せ持つ生物）を発見し、「ミナカテラ・ロンギフィラ」と命名された。1926年に「南方閑話」など著書3冊を出版。太平洋戦争開戦直後の1941年12月、74年間に及び「巡礼」のような生涯は幕を閉じた。



熊楠が愛用した眼鏡

田辺市中屋敷町の一角に、熊楠が病没するまで四半世紀を過ごした居宅が丁寧に保存されている。顕微鏡を覗きやすくするためなのか、書斎の机の脚2本は短く切れ傾いていた。居宅の隣には「南方熊楠顕彰館」があり、年間6000～7000人の熊楠ファンが国内外から訪れる。熊楠が遺した2万5000点に及び書籍や日記、手紙、論文などを収蔵し、こうした膨大な資料をデータベース化する作業を続けている。

南方熊楠顕彰会事務局の西尾浩樹さんがこの超人を分かりやすく解説してくれた。「熊楠の頭の中には数えきれないほどの引き出しがあり、その中にデータが完璧に整理されていました。現代風と言えば、『人間ウィキペディア』でしょうか」一。田辺市内の高台にある高山寺（こうざんじ）で、熊楠はこよなく愛した熊野の山と海に囲まれて眠り続けている。

※南方熊楠については、「世界を駆けた博物学者 南方熊楠」（南方熊楠顕彰会）を参考にさせていただきました。



熊楠の書斎と傾いた机



南方熊楠邸の母屋



南方熊楠顕彰館の収蔵資料は2万5000点



南方熊楠や植芝盛平の眠る高山寺

田辺が生んだ偉人の三人目は植芝盛平である。1883年に富裕な農家に生まれ、幼少時から武術に励んだ。前述した神社合祀反対運動に共鳴し、熊楠に協力したという。北海道開拓に参画した後、武術修行の旅に出て1922年に独自の合気武術（合気道）を確立した。合気道は相手と勝敗を決するのではなく、「お互いに切磋琢磨し合って稽古を積み重ね、心身の錬成を図るのが目的」（公益財団法人合気会）。優劣を競い合わない「和合の心」が世界的に評価され、今では約130カ国に合気道関連の組織・団体があるという。盛平も熊楠と同じく高山寺に眠る。



随所で「歴史」と出会う旧市街



植芝盛平像（田辺市扇ヶ浜公園）



田辺の旧市街を歩いていると、随所で「歴史」と出会い、文化の香りがする。御三家の一つ紀州徳川家の重臣が治めた城下町であり、風情のある商店や家屋も少なくない。熊野の神々のオープンな精神を受け継ぐのか、開放的で親切的な市民気質を感じる。

田辺観光ボランティアガイドの会に頼むと、個人旅行であれば無料で1時間案内してくれる。会の立ち上げから参加している、澤井民子さんもその一人。干しシイタケの卸売りをを行う傍ら、月6回もガイドを引き受ける。「色々な方にお会いできるから、楽しくて仕方ないんです。40歳代の男女が仲間に加わり、後継者の育成も始めました。でも、『引退してくれ』と言われない限り、ガイドを続けますよ」



ボランティアガイドの澤井民子さん

自然・歴史・文化に恵まれた田辺市だが、戦後の高度成長期以降は若年人口が都会に流出し、過疎化に苦しんできた。2017年12月末の人口は約7.5万人。1990年の約8.6万人からおよそ1.1万人減少した。この間の2005年に近隣2町2村と広域合併、面積は約1027平方キロと近畿地方の市では最大になる。少子高齢化が加速する一方で市域が拡大し、JR紀伊田辺駅前の商店街はシャッターも目立つ。



田辺駅前商店街

当地で喫茶店「べる・かんと」を営んで40年になる大野貴生さんに聴くと、来店客は1977年の開業時に比べると一割程度にまで激減したという。最盛期はパートタイマーを含め10人雇用していたが、もはや人を雇う余裕はない。今は大野さんが独り朝9時30分から夜9時まで切り盛りする。人口減少に加えて郊外の大型店舗に人が集まるようになり、さらに市街地でもコンビニがコーヒーの販売を始めるなど、大野さんのように一杯一杯に魂を込める喫茶店には逆風が吹き荒れ続けている。

「高速道路が開通して京阪神方面から2～3時間に短縮されたが、田辺を通過する人・自動車が圧倒的に多い。点から点だから面にならず、経済が活性化しない。駅前もタクシーの駐車場と化しており、人が集まる広場にしてほしい」一。大野さんは切実な表情で訴える。



喫茶店「べる・かんと」大野貴生さん

田辺市の真砂充敏（まなご・みつとし）市長に街づくりの展望を聴いた。「市民から『市長は子どもに田辺に帰って来いと言うけど、仕事が無いやないか』とよく言われてしまう。観光を中心にいかに職を創っていくかが最大の課題」という。現在4期目の市長は厳しい制約条件の下でも、様々な手を打ってきた。



田辺市の真砂充敏市長

例えば、2006年に田辺市熊野ツーリズムビューローを設立し、観光情報の発信機能を格段に強化した。第二種旅行業の認可を取得し、旅行契約の取り扱いもスタート。カナダ人職員の採用などで外国からの個人旅行者のニーズにもキメ細かく対応し、年商は3億円を超えた。国内外の旅行者・旅行者・消費者と、地元の観光協会・行政・NPO法人・商工会議所・農林水産業者の間に入り、地域全体のプロデュースを担う。こうした努力が実を結び、熊野古道は海外の観光サイトで人気が高まり、田辺市における外国からの宿泊客数は2012年の約3400人から2016年には3万人を突破した。

インターネットを活用し、地元農家も民泊に乗り出した。梅やミカンを生産していた高垣幸司さん・千代子さん夫妻は長男の元樹さんが後を継いでくれたことから、2008年に農家民泊「未来農園」を始めた。幸司さんは英語と格闘しながら、海外サイトから宿泊予約を受ける。今では年間数百人を受け入れ、その半数が熊野古道お目当ての外国人という。当初は米欧からの客が主体だったが、最近は中国や香港、台湾、チリ、イスラエルなど多岐にわたる。タイからは僧侶を含めて22人が一度に宿泊したという。



高垣幸司さん・千代子さん夫妻、
長男の元樹さん、孫の杏実ちゃん

田辺特産の梅干しも外国人は苦手と思われがちだが、徐々に人気が高まっているという。そのトップブランド「南高梅」を生産する「みなべ・田辺の梅システム」は2015年に世界農業遺産に認定された。幸司さんは「梅干しにはまだまだ未解明の効能がたくさんあるはずなんです」と南高梅の未来に期待を膨らませる。

食卓には漁船を持つ幸司さんが釣ってきた新鮮な魚が並び、客が望めばクルーズに連れて行くし、食後は得意のギターを演奏して国際交流に努める。夫妻は誠心誠意もてなすから、疲れ果てるのではと心配になるぐらいだ。だが、幸司さんは「定住人口の減少は避けられず、（外国人旅行者などの）交流人口を増やさないと田辺はやっていけません。将来、この街を『世界のタナベ』にするのが私の夢です」と熱く語り続ける。



「未来農園」の自慢は新鮮な魚料理



高垣さん夫妻とミカン農園

真砂市長は中心部市街地の再生にも乗り出した。国土交通省から「景観まちづくり刷新モデル地区」の指定を受け、「国内外からの旅行者が弁慶や南方熊楠、さらには植芝盛平ゆかりのスポットを楽しく歩いて回れるようにする」と意気込む。広大な市域を抱えるが、中心市街地にはコンパクトシティの考え方を導入するようだ。JR紀伊田辺駅のクラシックな駅舎はできる限り維持しながら、駅前広場を言えば「インスタ映え」するよう整備。老朽化した武道館を移転・新築し、合気道の「聖地」としてもPRしていく。



クラシックなJR紀伊田辺駅舎

だがいくらハードを整備しても、街づくりの担い手がいなければ、絵に描いた餅で終わってしまう。そこで田辺市は「たなべ未来創造塾」を創設し、若きビジネスリーダーの育成も始めた。5年後には塾の卒業生50人が街の課題解決の先頭に立つてくれることを期待している。

国内外からの旅行者という「交流人口」だけでなく、真砂市長は田辺市と接点を持つ他自治体からの「関係人口」の拡大を目指す。堺市（大阪府）とは友好都市提携し、「堺市民に田辺に来てもらうだけでなく、セカンドハウスを構えてもらえれば」という。このほか、合気道で縁のある自治体とも関係を強化していきたいという。

真砂市長は「住民票の登録者数（＝定住人口）だけで街の勢いをカウントするのではなく、田辺と関わる人を増やすことで、市民が豊かに暮らせる方策を考えていく」と強調する。実現が難しい定住人口の増加政策を打ち上げるのではなく、いかにして交流・関係人口を地道に拡大していくか。こうした地に足の付いた施策こそが、地方再生の成否を握るカギになる。田辺市にはそのフロントランナーになってほしい。



コバルトブルーがまばゆい田辺湾

（写真）筆者
PENTAX K-S2

瀬戸内海が育んだ「箱庭」的都市／尾道市（広島県） コンパクトシティが地方を救う（第15回）

リコー経済社会研究所 副所長・主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長

中野 哲也

はこにわ【箱庭】 浅い箱に土砂を入れ、家・橋などの模型を置いたり小さい木を植えたりして、山水の景色や庭園をかたどったもの。（岩波国語辞典）

海、山、川、線路、駅、道路、バス停、港、家屋、商店街、繁華街、学校、工場、寺社…。こうした街に必要な要素がぎゅっと詰め込まれた「箱庭」には、子供から大人までを魅了する不思議な力がある。それは何でも揃っているという安心感なのか。その一方で、将来の変化を予兆する緊張感も…。箱庭が突然目の前に出現したら、どんなにか楽しいだろう。そんな子供の頃からの夢をかなえてくれる街が瀬戸内海で見つかった。尾道市（広島県）である。



中世からの箱庭的都市、対岸が向島



尾道市街地と向島を結ぶ渡船



尾道の市街地からロープウェイに乗り、空中散歩も東の間、およそ3分で千光寺山の頂上に着いた。そして眼下に広がる大河…。いや、そうではない。それは市街地と対岸の向島（むかいしま）を隔てる、れっきとした海峡「尾道水道」なのだ。その幅はわずか200メートル程度。今年4月、逃走中の受刑者が向島から泳いで本州側に渡り、全国から関心を集めた。

千光寺（創建806年）には1200年を超える歴史があり、鮮やかな朱塗りの本堂は風格が漂う。そこから坂道を下ると、室町幕府第二代将軍・足利義詮の建立（1367年）とされる天寧寺。その三重塔（国指定重要文化財）から尾道大橋を望む「箱庭」も絶景である。



千光寺本堂から向島



天寧寺から尾道大橋

市街地の東部にある浄土寺は聖徳太子の開基（616年）と伝えられ、足利尊氏が必勝を祈願したという古刹。朱塗りの多宝塔や本堂は国宝に指定されている。



浄土寺・多宝塔



西國寺・仁王門の大草鞋



金剛院・カラス天狗



浄土寺・本堂



西國寺・三重塔

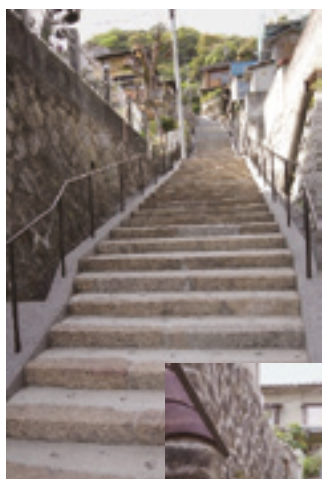
太平洋戦争中も尾道は戦火を免れたため、立派な門構えの古寺が今も多数健在である。この街は天然の良港に恵まれ、12世紀に第一期黄金時代を迎える。江戸時代には北前船の寄港地となり、白壁の蔵が立ち並んで商人の街として繁栄した。それが第二期黄金時代。巨万の富を得た豪商たちが、競い合うように寺に寄進したというわけだ。

西國寺（開山729年）は古来「西国一の寺」と称賛されてきた名刹。まずは仁王門に奉納されている2メートルの大草鞋（わらじ）が出迎えてくれる。「坂の街」を歩く旅行者が健脚を祈願し、仁王門をくぐって108の石段を上ると、荘厳な三重塔（国指定重要文化財）がそびえ立つ。

尾道の市街地には平地が非常に少ないため、コンパクトシティにならざるを得ない。海と山の間の斜面に民家や寺社がへばり付き、狭い路地が点と点を結んでいる。ただし、路地の主役は必ずしも人間ではない。そう、尾道はネコの街でもあるのだ。



坂の街と路地



坂の難工事、尾道市立大のバイト学生が活躍



「ネコの街」としても知られる

尾道水道に面した海沿いの平地では、商都として栄えた証（あかし）が随所で見つかる。旧住友銀行尾道支店として1904年に造られた建物は、激動の近代史を今に伝える。住友家が本拠地としていた別子銅山（愛媛県新居浜市）は瀬戸内海の対岸。1895年、大阪の住友本店と別子銅山の重役たちが尾道に集まり、銀行業への参入を決定したという。



旧住友銀行尾道支店

このほか、現在の広島銀行の前身の一つである旧尾道銀行本店（現おのみち歴史博物館）や旧尾道商業会議所など、レトロモダンな建造物が実に丁寧に保存されている。中心部の商店街では後継者不足などでシャッターが徐々に閉められているが、見事に再生した店舗も少なくない。市民気質が開放的なせいか、市外から移住してお洒落なショップを経営する人も目立つ。



旧尾道銀行本店（現おのみち歴史博物館）



旧尾道商業会議所



中心部の商店街では店舗再生も進行中



この街は歩いているだけで楽しい。絵になるスポットが数えきれないほどあり、独特の情景が映画監督の心を驚つかみにしてきた。小津安二郎や新藤兼人、山田洋次らの巨匠がこの街を舞台に数々の名作を生みだしている。

だが何と言っても、尾道を映画の街として有名にしたのは地元出身の大林宣彦監督。同氏が撮った尾道三部作（「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」）と新尾道三部作（「ふたり」「あした」「あの、夏の日」）のロケ地は、市街地の至る所で見つかる。おのみち映画資料館によると、1929～2014年に劇場公開された映画のうち、実に46本が尾道市内でロケが行われたという。



おのみち映画資料館

この街に魅了された文豪も少なくない。林芙美子（1903～1951年）は幼少期から高等女学校卒業まで尾道で過ごし、代表作「放浪記」の中で、林は「海が見えた。海が見える。5年ぶりに見る尾道の海はなつかしい。汽車が尾道の海へさしかかると、煤けた小さい町の屋根が提灯のように…」と、街の美しさを情景豊かに表現している。



林芙美子像

志賀直哉（1883～1971年）は1912年に一時、東京から尾道・千光寺山の中腹に移り住み、「暗夜行路」の構想をまとめ上げた。志賀はこの名作の中で街の情景を「景色はいいところだった。寝転んでいていろいろな物が見えた。前の島に造船所がある。そこで朝からカーカーンと…」と愛情たっぷりに描写している。その中で「三軒の小さな棟割長屋の一番奥」と記された尾道時代の旧居は丁寧に保存されており、文豪の視線で「箱庭」を味わうことができる。



志賀直哉旧居



海と山の幸に恵まれた尾道はグルメの街でもあり、最近ではブタの背脂が特徴的な「尾道ラーメン」が全国ブランドになった。

100年以上前の志賀の好物は、瀬戸内海の新鮮な魚から作られる蒲鉾だった。「暗夜行路」に登場する、志賀が世話になった「隣の親切な婆さん」が小林マツさん。その孫の村上桂造さんが「桂馬蒲鉾商店」を1913年に創業し、店は今も伝統の味を守り続けている。



尾道ラーメン



瀬戸内の地魚は絶品
(鮭と魚料理「保広」)



創業105年「桂馬蒲鉾商店」



高級スイーツのような蒲鉾

2代目の村上隆さん(92)に取材すると、父の桂造さんは文学好きで志賀の旧居をたびたび訪問。志賀が東京に帰ってからも、桂三さんは車で上京して蒲鉾を届けていた。志賀はたいそう喜んで写真や書籍を贈ったという。

「ほかの店では作れないものを作れ！」一。桂造さんの教えを守り、隆さんは朝4時起きで魚をさばいた。高級スイーツのように美しくて甘みのある蒲鉾を作り続けた。経営は3代目に譲ったが、英国紳士のような出で立ちで元気いっぱい。若い頃は相撲で体を鍛え上げ、今でも相撲甚句を大きな声で歌い上げる。長寿の秘訣を尋ねると、「腹八分目で酒・タバコはやらないことだね。でも、お饅頭とか甘いものはいいんだよ」一。店頭では、孫のひかるさんが看板娘。隆さんは嬉しくて仕方がないという表情で撮影に応じてくれた。



2代目の村上隆さんと孫のひかるさん

ほかにも尾道では、シニアが生き生きと活躍していた。今回の取材でお世話になった、尾道市シルバー人材センター観光ガイドの二人も、古希を過ぎたとは思えない若々しさである。坂道もどんどん上っていくから、50歳代の筆者が置いてきぼりにされてしまう。

このうち、岡田隆史さんは天文台で長年勤務した後、定年後に地元の歴史を学んで観光ガイドに。街の隅から隅まで知り尽くし、「生き字引」的な存在である。「ある面では京都や奈良に負けない、尾道の神社仏閣の素晴らしさを観光のお客様に知ってほしいんです」と話す。一方、中林美津子さんは若い頃に神奈川県内でバスガイドの経験があり、「観光ガイドの仕事が楽しくて仕方ありません」と素敵な笑みを絶やさない。



シルバー観光ガイドの岡田隆史さんと中林美津子さん

シニア人材が活躍する背景には、尾道市の政策努力がある。「住みなれた地域で元気でいきいきと安心して暮らせるまち」を目指し、「おのみち幸齢プロジェクト」を推進しているのだ。「高齢」ではなく「幸齢」？平谷祐宏市長（65）に取材すると、「『高齢』という言葉にはマイナスのイメージがあるじゃないですか。歳を重ねるごとに幸せを感じられる『幸齢社会』を実現したいのです」—

これは単なる市のスローガンではない。例えば、①幸齢者学校（地域全体を支えあうコミュニティモデルのネットワーク構築を図り、地域力を高めるための研修・講演会）②シルバーリハビリ体操（指導士を養成して地域で介護予防の体操）③お役立ち情報誌「出たもん勝ち」（地域とのつながりや生きがいの発見を促す）—といったユニークな施策を幾つも展開し、高齢者の生きがいづくりや介護予防に積極的に取り組んでいるのだ。中でもシルバーリハビリ体操は台湾に伝えられ、平谷市長が現地で講演すると、「日本の小さな港町が高齢者の楽園をつくっている」と高く評価されたという。



高見山（尾道市・向島）から望む瀬戸内海



しまなみ海道（多々羅大橋）



ONOMICHI U2

尾道市の人口は13.8万人（2018年4月末）にすぎないが、年間700万人に近い観光客が訪れる。「箱庭」のような風景や古代からの神社仏閣といったキラコンテツに恵まれるだけではない。市民や行政が最も大切なもの＝住みやすさ＝を守るために、常に変化を追求してきたからだろう。この「不易流行」こそ、人口減少時代で生き残りを目指す地方都市に求められる哲学だと思う。



尾道市の平谷祐宏市長

平谷市長は尾道をサイクリストの聖地としてもアピールしてきた。今治市（愛媛県）まで約70キロの「しまなみ海道」では、瀬戸内海に浮かぶ島々を巡りながら、サイクリングを満喫できる。JR尾道駅近くには、各種サービスを提供する複合施設「ONOMICHI U2」を整備。市長が先頭に立ち、世界最大の自転車メーカー、ジャイアント（台湾）のストアを誘致した。今では連日、海外からも多くのサイクリストがやって来る。



世界中からサイクリストが集結

（写真）筆者
PENTAX K-S2

「笑顔」で暮らせる街づくり／坂井市（福井県） コンパクトシティが地方を救う（第16回）

リコー経済社会研究所 副所長
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

「さかい」市を取材して歩いてきた。と言っても、大阪府にある政令指定都市の堺市ではなく、福井県北部に位置する坂井市のことである。人口は約9.2万人で県内自治体では福井市に次ぐ。名勝の東尋坊や最古の天守を誇る丸岡城、日本遺産に認定された三国湊など、魅力あふれる観光スポットも少なくない。こうしたキラコンテンツを活用しながら、坂井市は「だれもが『笑顔』になり、みんなが住みたくなる街づくり」（坂本憲男市長）という実に個性的な行政を推進している。



2006年3月、坂井市は三国町、丸岡町、春江町、坂井町の旧4町が合併して発足し、面積は約210平方キロに達する。東京・山手線の内側（約63平方キロ）を3個分以上のみ込む広さであり、市全体でのコンパクトシティ化は現実的ではない。

坂井市も「市街地の立地条件や場所が異なるため、国土交通省が提唱するコンパクトシティ構想をそのまま本市に当てはめることは困難。ただし、超高齢化社会を迎えるにあたって、自家用車に頼らない生活圏の構築は必要であるため、地域医療の充実や商店街の振興、二次交通の充実など様々な取り組みを実施していきたい」（坂本憲男市長）という。

坂井市は坂井町の本庁舎のほか、三国、丸岡、春江の各町に支所を置く。将来は旧4町に必要な機能を残した上でそれぞれを結ぶ「ネットワーク型コンパクトシティ」を視野に入れるべきだろう。



東尋坊

このうち三国町には、国内外から観光客が押し寄せる東尋坊がある。約1キロにわたる断崖絶壁から日本海を見下ろすと足がすくむ。また、遊覧船から見上げる岩壁も迫力満点。火山岩の柱状節理（マグマが冷えて固まる時にできる五～六角形の柱状割れ目）がこれほど大規模に続く奇跡的な地形は、世界でも極めて珍しいという。

三国町は江戸～明治時代にかけて北前船の寄港地「三國湊」として繁栄した。今も往時の面影が残り、文化庁から先に日本遺産の認定を受けた。明治初頭に来日したオランダ人技師、G・A・エッセルが設計した「三国港突堤」（通称＝エッセル堤）は優美なカーブを描き、今なお九頭竜川の氾濫を防いでいる。また、エッセルが設計した小学校の外観は郷土博物館「みくに龍翔館」として忠実に復元された（エッセルは「だまし絵」で有名な天才画家エッシャーの父である）。日本の夕日百選に選ばれた、サンセットビーチに沈む夕陽も三国町の自慢の一つだ。



九頭竜川（左）と日本海（右）の間に突き出るエッセル堤



みくに龍翔館



三國湊のレトロな町並み



日本海に沈む夕陽



旧森田銀行本店

古い町並みの一角で、家族の絆（きずな）によって伝統を守り続ける提灯職人と出会った。創業230年「いとや」の畑峰雄さん（63）である。妻と娘二人と力を合わせ、一つ一つに愛情を込めて絵付けしながら、年間1200～1300個もの提灯を作り上げる。秋の祭りシーズンを控えた8～10月は超繁忙期になり、作業は朝から深夜にまで及ぶという。

畑さんは「一日8時間の仕事では利益が出ない。晩御飯を腹三分にとどめ、16時間働くこともあるから、はやりの“ブラック企業”かな」と苦笑する。長時間労働だけでなく、「納期を考えると眠れない」「（提灯の売り上げがほとんどない）冬場の資金繰りは大丈夫か」「今年は忙しいけど来年は仕事があるのか」…。常に心労が絶えない。

それでも、畑さんは「70歳まで現役で頑張り、孫が継いでくれるなら創業300年に向けた礎（いしずえ）を築きたい」と還暦を過ぎてなお意気軒昂。提灯職人のDNAを受け継いだ二女の小島まりやさんは「このままでは家族のだれかが体を壊すのではないかと心配。冬場も稼げる絵付け体験に力を入れ、将来は欧州など海外でも販売したい」と経営の多角化を視野に入れる。



「いとや」と畑さん一家

このように三国町は魅力あふれる街だが、人口減少の荒波からは逃れられない。だが過疎化が進む中でも、街の再生を目指す若き経営者が現れている。伊藤俊輔さん（30）もその一人である。高校時代に起業の夢を抱いて関西大学商学部に進学。経営の基礎を学ぶ一方で、関大発祥の日本拳法に取り組みんで全日本学生拳法選手権大会（団体）で三連覇。大阪でキャンパスライフを満喫していたが、急に地元が恋しくなって卒業後にUターン。福井商工会議所（福井市）に就職し、様々な経営者と交わりながら6年間ビジネスの実際を学んだ。

実は、伊藤家は江戸時代に庄屋として活躍した名家であり、伊藤俊輔さんは11代目に当たる。5代目の伊藤五右工門は初めてお国入りした越前福井藩主・松平茂昭をもてなすため、鯛や大鰯を載せた「舟盛り」を考案。それが全国に伝わったという。

また、五右工門は屋敷を開放して「隠居処（いんきょじょ）」と名付けた娯楽施設を営み、北前船で寄港した船員や地元の漁師らに集い・語り・楽しむ場を提供していた。

故郷に帰ってきた伊藤さんは祖先が営んでいた娯楽施設の復活を思い立ち、2017年4月に新形態の温泉旅館「みくに隠居処」を開業した。三つの宿泊室にレストランを併設。2階のテラス席では、サンセットビーチの絶景を楽しみながら、新鮮なアワビやサザエ、イカなどのバーベキューを楽しめる。「海釣り」「魚のさばき」といった体験教室も開催しており、利用客は自分で釣上げた魚をすぐに調理して味わえる。

伊藤さんは故郷の再生への思いを熱く語ってくれた。「三国町は身近な海とともに発展してきたのに、いつの間にか海が遠い存在になっていた。郊外に出現した大型商業施設が地方のテーマパークになり、市民が地元の良さを忘れたからだ。どこに行っても全国チェーンの店があり、日本の街はコモディティ化して面白さを失っている」

「お客様が釣って調理するというモデルを普及させたい。他の店に真似してもらって大いに結構、相乗効果で人を集められる。非日常的な風景を国内外に発信できれば、周遊滞在型の観光がビジネスとして成立し、三国の街も必ずよみがえる」



伊藤俊輔さんと「みくに隠居処」



天守からの眺望



海岸部の三国町から内陸に入ると、坂井市は異なる“顔”を見せてくれる。丸岡町のシンボルは、全国に現存する12天守のうち最古の天守を誇る丸岡城である。織田信長の家臣・柴田勝家の甥・勝豊が1576年に築城。1934年に国宝に指定されたが、1948年の福井地震で倒壊してしまった。関係者の必死の努力により、倒壊材が元通り組み直されて1955年に修復。今、地元は「再国宝化」を求めて熱心な運動を展開している。

「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」一。これは徳川家康の功臣・本多作左衛門重次が陣中から妻に宛てた手紙である。短い文章の中に、①妻へのリスペクト②家内安全③息子（お仙＝後の初代丸岡藩主・本多成重）に対する愛情④馬を育成する重要性一といったメッセージが凝縮されており、「日本一短い手紙」や「手紙文のお手本」と称される。

坂井市と公益財団法人・丸岡文化財団は日本の優れた手紙文化を維持するため、日本一短い手紙（1～40文字）を一般公募する「一筆啓上賞」を主催。住友家初代・住友政友が丸岡出身という縁から、住友グループ広報委員会が特別後援する。第26回となる2018年のテーマは「先生」（応募締め切り2018年10月26日）。丸岡城の斜め向かいには「日本一短い手紙の館」があり、過去の応募作品などが多数展示されている。



最古の天守を誇る丸岡城



日本一短い手紙の館

丸岡町山間部の竹田地区は過疎化に悩まされてきたが、坂井市や地元関係者の尽力によって個性豊かな観光スポットが登場した。「竹田水車メロディパーク」の二連水車は地区のランドマークになり、廃校になった小中学校校舎は体験型宿泊施設「ちくちくぼんぼん」に生まれ変わった。また、「千古の家」は中世末期の建築とされる福井県内最古の民家。地方豪族の生活がしのばれる貴重な史料である。



竹田水車メロディパーク



体験型宿泊施設「ちくちくぼんぼん」



千古の家

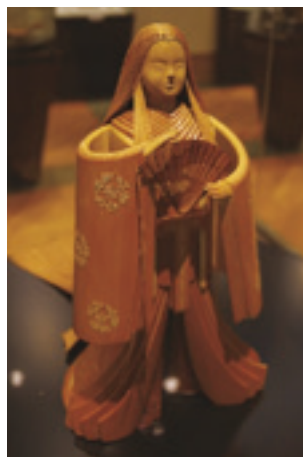
丸岡町上久米田にある「越前竹人形の里」では、匠（たくみ）の技をじっくり見ることができる。竹人形職人の山岸高音さん（50）はイラストやアニメが好きで京都の美術学校で絵画を学び、故郷の福井市に戻ってこの道に入った。

山岸さんによると、手の込んだ人形の制作には1カ月以上かかる。傑作の一つである芸妓の頭には極細の竹が4000本も使われており、完成までに5カ月を要した。

このため、山岸さんは「採算のとれない芸術性の高い人形を作るためには、干支などをデザインした汎用品をたくさん作って収益を上げなくてはならない」という。また、「1ミリ径の竹を削って3本にできるまでに5~6年かかるから、若い人が入門してもなかなか定着しない」と話し、後継者育成を課題に挙げる。



竹人形職人・山岸高音さん



芸術性の高い越前竹人形

坂井町には坂井市役所の本庁舎があり、市政の中心になる。坂本憲男市長（71）は旧三国町長を経て、個性豊かな旧4町の合併をまとめ上げて2006年に坂井市の初代市長に就任、現在4期目である。インタビューに応じていただくと、「合併前の旧町名のほうが全国的に知られており、大阪府の堺市と間違えられてしまう」と話し、知名度向上を課題の一つに指摘した。



常連客も増えたアンテナショップ

このほか、坂井市は福井銀行、福井信用金庫とともにリコージャパン（RJ）と「地方創生に係る包括的連携に関する協定」を締結。RJは坂井市が東京・丸の内にて実施したイベントを企画・運営したほか、坂井市内での里山保全活動や観光資源再発掘事業なども支援している。

ところでコシヒカリは福井県が発祥であり、坂井市は質量ともに有数の米作地帯としても名高い。また、越前おろし蕎麦やソースかつ丼などソウルフードも充実しており、グルメも飽きることのない土地柄である。



坂井市は有数の米作地帯



坂井市の坂本憲男市長

このため、坂井市はシティセールス推進課を設けるなど、情報発信やPR活動を積極的に展開している。その東京の拠点となるのが、レトロな風情が人気の戸越銀座商店街（東京都品川区）に開いた「坂井市アンテナショップ」。店内に新鮮な野菜や魚介、名産の油揚げや蕎麦（そば）、日本酒などが並び、11月上旬からは高級食材の越前ガニも入荷する。オープンから2年、常連客も増えてクラシックな商店街にすっかり溶け込んでいる。



坂井市アンテナショップ
（東京都品川区・戸越銀座商店街）



越前おろし蕎麦

ソースかつ丼

坂本市長は3期目に市政運営のキーワードとして「笑顔」を打ち出した。その理由を訪ねると、「人は支え合うことで喜びあい、頑張ることができ、それが『笑顔』となり、人の心を豊かにする。『笑顔』が街への深い愛着と誇りを生み、これがふるさとへの思いにつながる」という。

坂井市・三国港と福井市内を結ぶローカル線「えちぜん鉄道」（坂井市などが出資する第三セクター）の駅名板にも「笑顔で暮らせるまち」と書いてある通り、アポ無し取材に対しても市民は飛び切りの温かい「笑顔」で迎えてくれた。



えちぜん鉄道（三国港駅）

しかも、「笑顔」は単なるスローガンではなく、ユニークな政策も講じられている。坂井市は、よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属の若手お笑い芸人「パナマ海水浴場」と契約。パナマは今年4月、「坂井市専属住みます芸人」になり、当地へ移住。市内で開かれる祭りやイベントなどで司会を務めたり、漫才を披露したりして市民に「笑顔」を提供している。

パナマはボケ担当の阿部拓也さん（25）とツッコミ担当の石田真都さん（25）のコンビだ。ともに吉本総合芸能学院（NSC）の38期生で芸歴3年目。同期約400人のうち1年後の卒業までに300人近くが脱落したという狭き門をくぐり抜け、2016年にプロになった。

ところが、仕事はほとんど無くて給料も出ない。このため、カラオケボックスやパチンコ店のアルバイトで生活費を稼ぐという苦しい生活を続けていた。

今は坂井市から毎月定額の手当てが出るし、仕事も格段に増えた。市が用意してくれた空き家に住み、家賃は住人5人で分担するから一人月2000円で済む。ただし、寝室にエアコンが無いため、猛暑の今夏は「仕事の無い日、夕方5時まで寝ても疲れが取れない」（阿部さん）一。だが、コメや野菜は近隣農家が差し入れてくれる。釣りの得意な石田さんは早朝、民宿の船に同乗させてもらい、おかずの材料を調達する。取材前日の食卓にはお手製のアジの一夜干しとカワハギの煮付けを並べたという。

敬老会などお年寄り向けのイベントが多いため、「最初はお客さんの心をつかめず、スベリまくっていた」（石田さん）一。それでも、「なるべくお客さんをいじらない」（阿部さん）「大きな声でゆっくり話す」（石田さん）といったコツを次第につかみ、ネタも東尋坊や丸岡城などを題材にした御当地モノを作り上げた。最近ではスーパーで買い物をしていると、「パナマさんや、がんばれ！」と声を掛けられる。市民の声援を励みにして「笑顔」を提供しながら、よしもとの大先輩「中川家」を目標に修業を積む毎日だ。



「パナマ海水浴場」阿部拓也さん（左）、石田真都さん（右）



（写真）筆者
PENTAX K-S2

「米粉」発祥の地、洋上風力発電に挑戦／胎内市（新潟県） コンパクトシティが地方を救う（第17回）

リコー経済社会研究所 副所長
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

新潟県北東部の胎内（たいない）市は、旧中条町と旧黒川村の合併で2005年に発足した。市名は市内を流れる胎内川に由来し、豊かな自然と肥沃な土地に恵まれる。「コシヒカリ」で有名な稲作が盛んで、日本の食糧自給を支える重要な穀倉地帯である。また、コメを微細粉に加工して作る米粉（こめこ）発祥の地として知られ、それを使ってパンや菓子、麺など多彩な食品が続々と生み出されている。この街を歩いていると、市名が示す通り、母なる大地から新たな「命」が生まれる予感がしてくる。



新潟県は国内有数の稲作地帯を抱えるため、1970年代以降、国民の米食離れや国の減反政策（＝コメの生産調整）への対応に苦慮してきた。コメの一人当たり年間消費量は1962年度の118キロをピークに減り続け、2016年度には54キロまで半減した。だが、必要こそが発明の母。新潟県農業総合研究所食品研究センターが、従来の米粉よりも微細で滑らかに製粉する画期的な技術を開発。それが今日の米粉産業の基礎となる。

胎内市内の米粉関連の工場は、中条中核工業団地の一角に集積する。その中心となる新潟製粉（本社胎内市）の藤井義文・常務取締役は「ミスター米粉」というべき存在。農業高校で甲子園を目指した後、旧黒川村役場に就職。スイスで1年間研修を受ける機会を得て牛の世話をしながら、「スイスでは農業が強く、農作物を作る人が食べる人からリスペクトされている。なぜ日本では…」という思いを抱いた。



新潟製粉の藤井義文・常務取締役



市内平野部に広がる稲作地帯

村役場に帰任した藤井さんは、減反対策の一環として米粉事業を担う。スイスで学んだことを胸に秘めながら、その育成に全身全霊を傾けた。前述した微細粉技術を活用した新型米粉を世界で初めて実用化するため、新潟製粉の工場設立に尽力。それだけでなく、生活の安定が保証されていた村役場を辞め、同社へ転職を決断した。

藤井さんら関係者による必死の努力が実り、米粉で作ったパンや麺などの「ふんわり」「しっとり」といった新鮮な食感は徐々に消費者の心をつかんでいく。新潟県内外の学校給食にも採用された。また、米粉は小麦粉と比べると油の吸収率が低い。このため、揚げ物の衣（ころも）に使うと食感が「サクサク」になり、摂取カロリーも抑えられるという効果も注目を集める。

普通のパンの原料となる小麦粉には、タンパク質の一種であるグルテンが含まれており、それが原因で食物アレルギーを引き起こす人も。一方、米粉はグルテンフリーのため、アレルギー対応食品として海外でも関心が高まる。藤井さんは「国内で米粉の知名度を向上させると同時に、海外でも勝負したい」と力を込める。実際、米国の有力スーパーが着目し、グルテンフリーのコーナーに米粉関連商品を導入する意向を示してきたという。



米粉から食材が続々誕生

この新潟製粉の隣が、タイナイ（本社新潟市）の米粉パン・米パン粉工場。「コシヒカリパン」や「玄米パン」を1日2000個も焼き上げ、東京都内の高級スーパーなどに連日出荷中。供給が必要に追い付かず、2019年春には隣に第二工場を着工する。また、向かい側で操業している小国製麺（本社山形県小国町）も米粉入り生パスタ「エチゴッティ」のほか、新潟県内の有名ラーメン店などとタイアップした米粉入りラーメン・焼きそばを開発。米粉で差別化を図りながら、中食（＝食品を持ち帰って家で味わう食事形態）市場をめぐる、大手の食品メーカーやコンビニと競い合う。



タイナイの大関勝彦・常務取締役



小国製麺の齋藤公美・常務取締役

このように胎内市においては、米粉が農業の6次産業化（＝1次産業の農林水産業が2次産業の食品加工と3次産業の流通・販売にも取り組み、付加価値の高度化を目指す）の優等生である。

近年はワインも急速に実力を付けてきた。市が直営する胎内高原ワイナリーは2007年設立と歴史は浅いが、赤も白も既に日本ワインコンクールで入賞。標高250メートルの急傾斜地の畑で、2.4万本に上るブドウの樹を育成する。日当たりが良く、昼夜の温度差が大きい上、吹き下ろしの風が空気を淀ませない。素人目には好条件が揃っているように見えるが、佐藤彰彦・栽培責任者は「結果的に土が良かったが、ワインは作って見ないと分からない。何よりも自然に対するリスペクトがなければ、良いワインは生まれない」という。



出荷を待つ胎内高原ワイン

農業の6次産業化について、胎内市の井畑明彦市長（57）に聞いた。米粉に関しては、「全国的にコメ余剰で過当競争が続く中、米粉はキラークンテンツになった。小麦アレルギーの方も召し上がれるため、万能感のある食材としてPRしていきたい」。ワインについても、「おかげさまで苗木が足りないぐらいの人気になり、クラウド・ファンディング（＝インターネット上で不特定多数から事業資金を調達）を活用して山全体をブドウ畑にできれば…。そして夢のまた夢になるが、山の上から絶景を眺めるワインレストランを造りたい」と期待を膨らませる。



胎内市の井畑明彦市長



ブドウ畑から望む絶景（胎内市街と日本海）

胎内市内には、時空を超えて歴史ロマンを実感できるスポットも多い。古墳時代（3世紀後半～7世紀初頭）のこの地域は、現在の奈良県周辺を中心とするヤマト政権の勢力と、それに属さない北の勢力との境界に位置した。政治的に重要な地域だから、ヤマト政権は同盟関係を結んだリーダーには巨大な墳墓の構築を許した。その一つが4世紀前半に築かれたとされる「城の山古墳」（文化審議会が国の史跡に指定するよう答申）である。発掘調査を進めてきた水澤幸一・胎内市教育委員会生涯学習課参事は「文字が無い時代なので分からないことが多いが、それだけにロマンを掻き立てられる」という。水澤さんら関係者の尽力により、市内には中世の荘園遺跡「奥山荘」に歴史館や歴史の広場も整備されている。



古墳時代前期の「城の山古墳」



遺跡発掘調査を担う水澤幸一さん



「乙まんじゅうや」11代目の久世俊介さん

7世紀の日本書紀には、越の国から燃える水（＝原油）が天智天皇に献上されたという記述があり、旧黒川村は日本最古の油田として発展してきた。今も原油の湧き出る池があり、「油壺」と呼ばれている。



今なお原油が湧き出る「油壺」

乙宝寺（おっぼうじ）は8世紀代聖武天皇の勅願による開山とされ、17世紀建立の優美な三重塔は国の重要文化財である。門前で1804年に創業した「乙（きのと）まんじゅうや」は、糰（こうじ）を発酵させる江戸時代からの伝統製法を守り続ける。朝5時から作業に入り、普段は1日1500個、元旦は参拝客向けに5000個の酒饅頭を作る。11代目の久世俊介さん（30）は地元をこよなく愛し、乙宝寺のガイドを無料で引き受ける。「この地区も人口が減り、ウチ以外の土産物店は消えてしまった。これからは観光客など関係人口を少しでも増やしていきたい」――



乙宝寺の三重塔

江戸時代、市内の桃崎浜地区は北前船の寄港地として大いに栄えた。当時の航海は命懸けだから、船主や船頭は有名な絵馬師に自分の船を描いてもらい、海上安全を祈願して神社に奉納した。桃崎浜文化財収蔵庫には80枚を超える「船絵馬」が保管されており、国の重要民俗文化財である。管理・説明員の伊藤貞夫さん（84）は「この地区は江戸時代に250戸あったのに、今では150戸まで減って限界集落になりつつある。船絵馬や北前船をPRすることで、一人でも多くの方に訪れてほしい」と熱く語ってくれた。



史料価値と芸術性の高い「船絵馬」



船絵馬の宝庫を守り続ける伊藤貞夫さん

市の中心部にある旧中条町の本町通りは江戸時代、米沢街道の宿場町として繁栄した。その一角にある荒惣（あらそう）は1824年に両替商として創業した後、現在のOA・IT機器販売に至るまで時代の変化を先取りしてきた。その一方で、店舗兼主屋や海鼠（なまこ）壁の見世蔵、内蔵を大切に守り、2017年に国の有形文化財として登録された。

この街も少子高齢化の荒波に呑み込まれ、荒惣7代目の須貝隆・代表取締役は「歴史の街として観光案内板などを整備し、再び人が集まるようにしたい」と話す。また、胎内市（旧中条町、旧黒川村）出身者が郷土の発展を願い、親睦を深める「中条郷会」は2018年に創立100周年を迎えたが、小野武司会長は「実に良い街なのに、これまでPRが上手だったとは言えない」と指摘する。



国の登録有形文化財「荒惣」の店舗

2005年の町村合併で発足した際、胎内市の人口は約3万3000人だったが、2018年10月末時点では3万人を切っている（住民基本台帳）。人口減少に伴い、上下水道などインフラの老朽化もこれから深刻化する。井畑市長は「今は過渡期で見定めないといけないが、市民にある程度集まって住んでいただくコンパクトシティの考え方も必要かもしれない」と話す。

2018年夏、胎内市はJR中条駅舎を橋上化し、東西自由通路を整備した。踏切を渡る必要がなくなったため、利便性が一気に高まり、開発が遅れていた駅西口に飲食店が進出。井畑市長は「市民の移動経路が変わり、コンパクトシティのきっかけになるかもしれない」とみる。市は予約制乗り合いタクシー「のれんす号」（大人300円）を導入し、運転困難な高齢者らの「足」の確保にも努めている。



東西自由通路が整備されたJR中条駅

こうした中でも、次世代を担う人材の育成では明るい材料が出てきた。2014年に開校した開志国際高校は医学科進学、国際、アスリートという3つのコースを整え、各分野で未来を切り拓く人材の育成を目指す。寮を備えて市外からの学生、あるいは中国やベトナムなどからの留学生も多数受け入れている。

また、2018年4月に開学した新潟食料農業大学（胎内キャンパス）は農・食・ビジネスを一体的に学ぶことで、世界をリードする食料産業の構築を目指す。井畑市長もこの2校に期待を寄せ、「学生には思春期に胎内市内で学び暮らした思い出が残るはず。卒業後に市内に住まなくても、旅行先やビジネスの関係先として選んでくれれば、関係人口の増加につながるのでは」――



開志国際高校



新潟食料農業大学（胎内キャンパス）



胎内市ゆるキャラ「やらのちゃん」

さらに、井畑市長は「地球温暖化が進んでいることにはほぼ疑いがない。次世代に遺す付加価値あるいは地域の誇りとして、再生可能エネルギー事業に取り組んでいきたい」として環境政策を推進する。なお、胎内市とリコージャパンは2017年に地域活性化に関する「連携協定」を締結。両者の持つ資源を効果的に活用しながら、主に「環境にやさしいまちづくり」と「観光の活性化」に取り組んでいる。

井畑市長が視野に入れる再エネ事業のうち、柱となるのが、胎内市沖合の日本海における洋上風力発電の構想である。庁内にプロジェクトチームを設け、導入決断の前提となる諸条件について調査・検討を始めた。市長は「ある程度の風に恵まれている上、海底部が砂浜だから（コストが比較的安価とされる）着床式の導入が可能といわれる。また、首都圏への供給距離も比較的小さいため、需要と供給をマッチングできる。何としましても実現まで漕ぎ着けたい」と力を込める。



陸上では既に稼働中の風力発電



胎内市は食の宝庫！グルメも満足

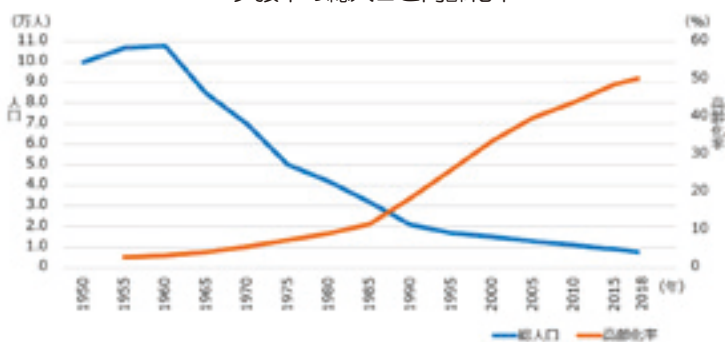
（写真）筆者
PENTAX K-S2



バブル期に整備されたスキー場

ついに夕張市は350億円超の借金を抱えて財政破綻。2007年に財政再建団体(現在は財政再生団体)になり、市政は国に手足を縛られた。行政サービスは徹底的に削られ、逆に市民の負担は大幅に増加。市外流出と少子高齢化によって、人口減少率は全国ワースト1位に。市域は東京23区よりも広いのに、2010年は人口が1万人余にまで減った。

夕張市の総人口と高齢化率



(出所) 国勢調査と夕張市住民基本台帳を基に作成

こうした中、東京都から夕張市へ応援派遣されていた若き都庁マンが、現在の夕張市長・鈴木直道氏(37=現在2期目)である。都庁に戻った後、一部市民の熱意に動かされて2011年の夕張市長選に出馬。当選後、鈴木市長は背水の陣で改革を断行した。市内の小中高校はそれぞれ1校に集約し、市民会館や図書館、児童館を閉鎖。市長の給与も自ら7割削減して年収約250万円、退職金は任期務めても出ない。

その後の夕張市は財政再生計画を厳格に守り、誠実に借金返済を続けた。だが、鈴木市長は「緊縮財政だけでは街は復活しない」と判断し、財政再建と地域再生を両立させる方針(=リスタート)に転換。厳しい交渉の末、2017年に国から財政再生計画見直しの同意を取り付けた。結果、向こう10年間で総額113億円に上る新規事業を実施できるようになった。



夕張市の鈴木直道市長

実は、リスタートを宣言する前年、鈴木市長は各方面に張り巡らした人脈からの情報を基に、JR北海道が夕張支線を存続困難な路線のリストに入ると独自に判断していた。年間赤字が1.8億円に上り、老朽化したトンネル・橋梁の補修に億円単位の費用が見込まれるからだ。市長は「民間企業であるJRが存続という経営判断をするのか」と自問を繰り返した末、「攻めの廃線」という大胆な手を打って出た。

JRローカル線の廃止問題では、①JRが廃線を表明②地元自治体が存続を要望③紆余曲折を経て結局、JRが「民間企業」を大義に自治体を押し切って廃線—というプロセスが一般的だ。このため、JR北海道が存続困難を表明する前の2016年8月8日、鈴木市長は先手を打ってその本社(札幌市)に乗り込み、夕張支線の廃止を「逆提案」したのである。

その際に鈴木市長はJR北海道に対し、①市の公共交通政策への協力(廃線後の代替交通確保=夕張支線1日5往復→代替バス同10往復)②JR施設の有効活用(市が使える土地・建物を無償譲渡)③市への人材派遣(人件費はJR全額負担)一の条件を突きつけた。この3つが実現しなければ、市長は廃線に納得しないというわけだ。

そしてわずか9日後、今度はJR北海道の社長が夕張市役所を訪れ、3条件に対して事実上の満額回答。廃線後の支援額についても、市は3億円規模と予想していたが、7.5億円を引き出すことができた。

鈴木市長は「逆提案」まで極秘に準備を進めていた。“外交交渉”だから止むを得ないと思うが、メディアからは「市議会を軽視」「市民に説明不足」といった批判を浴びた。今回、鈴木市長は筆者のインタビューに対し、「(廃線に関する)情報源は秘匿するしかないため、(逆提案した)当初は謝罪するしかなかった。しかし2年経ってみると、予想した通りの展開になっており、最近は市民から『よく言ってくれた』と声を掛けられる」と話した。

「攻めの廃線」を決断した理由について、鈴木市長は「夕張支線と地元の夕鉄バスが並行して走り、減り続ける乗客を奪い合ってきた。JRの鉄道が無くなっても、地元のバス会社は存続するし、且つ運行頻度が上がるので利用客を増やせる」「『鉄道もバスも両方残せ』と言うのは簡単だが、ガラガラの列車に貴重な市税を投じてよいのか。子育てや高齢者対策などやることは山積しているのに…」と説明する。



並行して走るJR夕張支線と夕鉄バス (JR夕張駅)

夕張市の年間税収は8億円規模にすぎない。その一方で国からの交付税などを使って毎年26億円の借金を返済し、2027年には完済する計画である。鈴木市長は「1秒間に夕張市は借金を71円返し、夕張に『財政を再建しなさい』という国は借金を61.2万円も増やしている。しかも国は返す当てがないのに…」

少子高齢化が加速するこの国で、鈴木市長は夕張市を「課題先進地域」と名付け、8200人まで減った人口がさらに半分になる事態を覚悟の上で街づくりを進める。市内では炭鉱ごとにコミュニティがつくられていたため、拠点が分散していた。今後はコンパクトシティ化で拠点を集約し、街全体の効率性を高める。

例えば、老朽化した旧炭鉱住宅に住む市民を説得し、新設した賃貸住宅に移転してもらう。それによって除雪や施設補修にかかるコストを極力抑えるというわけだ。

コンパクトシティの核として、夕張市は中心部に複合施設や認定こども園、病院などを整備する。また、「幸福の黄色いハンカチ」に代表されるように、かつての炭都は映画のロケに活用されており、「映画の街」としても国内外への発信力を強化する。もちろん、「夕張メロン」というキラーコンテンツは頼もしい存在だ。



夕張市の借金時計 (出所) 夕張市ホームページ



老朽化した旧炭鉱住宅と新設された賃貸住宅



ゆうばりキネマ街道



ゆるくない! ガチャキャラ「メロン熊」

夕張駅に隣接する喫茶店・和（なごみ）は心温まるコーヒーや軽食を提供する。市民や来訪客にとって貴重な憩いの場である。店主の中本満さん（71）は夕張支線の廃線について「子供のころは、朝一番に蒸気機関車が発する『ポーッ』という汽笛が目覚まし時計代わりだった。今回、市長が先手を打ったと聞いてびっくりしたが、地元の人がどれくらい利用しているかを考えると、仕方がないかなとも思う」と話す。ホームに列車が来なくなっても、中本さん一家は店を守り続けていくという。「店名の通り、これからも和（なごみ）の場を提供していきたいから…」



夕張駅に隣接する喫茶店・和（なごみ）
左はバブル期に建設されたリゾートホテル



貴重な憩いの場を守り続ける中本さん一家

鈴木市長がリードしながら、夕張市は歯を食いしばって借金を返し続け、コンパクトシティに活路を見出す。65歳以上の高齢化率が50%を超えた市民も、市長に引っ張られる形で街の再生に本腰を入れ始めた。

さらに市外の「ヨソモノ」が再生事業に手を差し伸べ、市民とともに汗をかく。佐藤真奈美さんはその一人である。大分県出身で京都の大学を卒業後、JR北海道に就職。夕張市清水沢地区の旧炭鉱住宅の街並みに魅せられ、一般社団法人・清水沢プロジェクトを立ち上げた。有形無形の炭鉱遺産を活用しながら、地域の活性化に取り組んでいるのだ。札幌市内で夫とともに2人の子供を育てながら、夕張市内まで往復3時間のマイカー通勤を続ける。



旧北炭・清水沢火力発電所



一般社団法人・清水沢プロジェクト代表理事の佐藤真奈美さん



佐藤さんらが階段などを整備した清水沢ズリ山（採炭時に発生する不要な岩や石を積み上げた山）



清水沢ズリ山から望む旧炭鉱住宅群

佐藤さんは「炭鉱と鉄道は表裏一体の関係だったから、地元の喪失感決して小さくない。しかし乗車率は高くなかったため、市民生活にそれほど大きな影響はないと思う。『駅に行くまでが大変』というお年寄が多かったので、廃線後の代替バスなどでドア・トゥ・ドアに近い『足』が実現すればよいが…」と指摘する。この街の将来については、「高齢化率は50%を超えたが、お年寄りが生き生きとしていれば、街にとってそれほどマイナスにはならない。地域の文化や築いてきた歴史の厚みを大切にすれば、それ自体が産業の一つになり得る」と話す。

「借金と課題は売るほどある」（鈴木市長）という街の再生を目指し、地元市民とヨソモノが知恵を出し合い、行動をとる。夕張の人々から温かい「何か」をもらい、寒風吹きすさぶ夕張駅ホームから千歳行き列車に乗った。



2019年3月末で使命を終えるJR夕張支線

（写真）筆者
PENTAX K-S2

「海洋深層水」夢が膨らむ南海の離島／久米島町（沖縄県） コンパクトシティが地方を救う（第18回）

リコー経済社会研究所 副所長
RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

沖縄県・那覇空港からプロペラ機で30分足らず、エメラルドグリーン的大海とサンゴ礁に囲まれた久米島に到着した。1月中旬なのに気温は20度を優に突破。東京から着てきたコートは出番を失い、半袖ポロシャツで取材を始めた。クルマで40分も走れば一周する小さな島の中に、琉球王朝時代前からの歴史が凝縮。このためシャッターを切りたくなるスポットが、連続して目の前に飛び出してくる。そして何より島の人々の心が温かく、飛び切りの笑顔が美しい。たった数日歩いただけで、久米島町観光協会の素敵なコピー「実家よりあったかい、ゼロになれる島」を実感した。

久米島空港から島めぐりを始める場合、時計回りがお勧めのコースだという。それにしたがって進むと、まずは「ミーフガー（女岩）」に出会う。波と風が長い時間をかけて巨岩の中央部に大きな穴を開けた「作品」で、子宝に恵まれるというパワースポット。合計特殊出生率（1人の女性が生涯に産む子どもの数）が高い沖縄県にあっても、久米島のそれは特筆すべき2.31に達する。全国の市区町村別ランキングでも伊仙町（鹿児島県・徳之島＝2.81）に次ぐ全国2位であり、全国平均（1.38）を1近くも上回る（厚生労働省「平成20年～平成24年人口動態保健所・市区町村別統計」）。

次に向かった「比屋定（ひやじょう）バンタ」は、風光明媚な久米島でも有数の展望台である。バンタとは沖縄の方言で絶壁を意味する。東シナ海はコバルトブルー、サンゴ礁内側の海はエメラルドグリーン。両者のコントラストは見ていると飽きることなく、時の経過を忘れてしまう。



比屋定バンタ



子宝パワースポット「ミーフガー」



久米島の東岸から橋を渡り、奥武島（おうじま）に到着。奇岩群が幾何学模様を形成する「畳石（たたみいし）」に目を奪われた。数百万年前の火山噴火の際、マグマが地下でゆっくり冷えて収縮し、五角柱あるいは六角柱のひび割れが生じたという。五角形や六角形の石が隙間なく並び、巨大な亀の甲羅のように見える。自然による造作物とはとても思えない、不思議な空間である。また島南部のトクジム自然公園には、地元の人が「鳥の口」と名付けた奇岩がそびえる。鳥というより、怪獣ゴジラのように見えたが…



畳石（奥武島）



鳥の口（トクジム自然公園）※A+HDR撮影

「イーフビーチ」は久米島を代表する砂浜海岸。キメが非常に細かくて真っ白い砂浜が2キロも続き、日本の渚百選の一つに数えられる。遠浅で海水浴に最適なほか、各種マリンスポーツの拠点になる。



サラサラの砂浜が2キロ続く「イーフビーチ」

そして久米島最大の見どころが、船で約30分の沖合にある「ハテの浜」。全長7キロに及ぶ真っ白い砂浜だけの無人島である。真っ白い砂、エメラルドグリーンの海、鮮やかな青い空…。それ以外には何も存在しない。まるでSF映画を撮影するスタジオのようであり、何とも贅沢な光景が眼前に広がる。「東洋一美しい無人島」というキャッチフレーズも、大げさではないように思う。



東洋一美しい無人島「ハテの浜」

久米島の魅力はこうした自然の美しさだけではない。その歴史も、訪れた人の心をつかんで離さない。久米島町観光協会によると、久米島が初めて登場する歴史書は8世紀後半の「続日本紀」。その中に珠美（くみ）の人が奈良の都を訪れたという記述がある。「くみ」とは沖縄の方言で米を指すため、珠美＝久米島と考えられている。実際、古代からこの島は岩の間から湧き出る泉に恵まれたため、稲作が盛んに行われていた。

14世紀ごろ、按司（あじ）と呼ばれる豪族が、久米島の山間に幾つものグスク（城）を築き上げた。ただし、按司が元々の島民を支配し始めた時期や、沖縄本島のどの地域からどんな目的でやって来たのかは分かっていないという（久米島博物館）。久米島で最も高い宇江城岳（310メートル）の山頂に築かれた宇江城城（うえぐすくじょう）跡からは、眼下に南国の絶景が広がる。





宇江城城跡からの絶景

グスクは石垣に囲まれた施設。「城」の字を充てることが多いが、必ずしも戦闘のための城ではなく、祭祀などにも使われていたらしい。その実態は依然としてベールに包まれている。その石垣の工法は元々、加工していない自然の石や岩を積み上げる「野面（のづら）積み」だったが、やがてブロック状に加工した石を使う「切り石積み」に発展した。隙間なく積み上げられた堅固な石垣からは、往時の建築技術力の高さがうかがえる。その材料はサンゴが生み出す琉球石灰岩であり、比較的柔らかくて細工しやすいため、アーチ形の門なども造られた。



野面積み（宇江城城跡）



切り石積み（旧仲里間切の蔵元跡）

15世紀後半、中国から久米島に養蚕技術が伝来し、絹織物の製作が始まった。それが久米島紬（つむぎ）であり、ここから沖縄本島や奄美大島などへ伝えられたという。糸を紡いだ後、島内に自生する草木で染め、さらに泥で染める。それを洗って乾燥させてまた泥で染める—という工程を数十～百回も繰り返す。そしてすべて手で織り上げ、ようやく反物が出来上がる。



すべて手作業「久米島紬」
（久米島紬の里「ユイマール館」）

16世紀に入ると、沖縄本島を統一した尚氏が久米島の按司を討伐。この島は琉球王朝の政治体制に組み込まれる。琉球王朝が中国や朝鮮半島、東南アジア、日本との交易を活発化させる中、久米島は貿易船の寄港地として大いに繁栄した。当時、島民の精神的な支柱は君南風（ちんべー）と呼ばれた最高神女であり、各集落で祭祀を執り行うノロ（神女）を統括していた（「久米島町の文化財」久米島博物館）。



君南風の祭祀殿「君南風殿内（ちんべーどうんち）」



17世紀以降、久米島は島津氏が治めた薩摩藩の支配下に入る。当時、島内は間切（まぎり）と呼ばれる行政単位に区分けされ、それを地頭代が治めていた。このうち上江洲（うえず）家は代々、具志川間切の地頭代を務めた名家。今も15代目が、18世紀半ばに建築された屋敷を大切に維持している。上江洲艶子（うえず・つやこ）さんに取材すると、「これからも一族のだれかが守ってってくれるよ、なんくるないさ（=大丈夫だよ）」—



上江洲家住宅と
上江洲艶子さん



明治維新（1868年）以降、琉球王国は琉球藩、さらには沖縄県になり、久米島も歴史に翻弄され続ける。第二次大戦末期の沖縄では大規模な地上戦が展開され、沖縄県民約15万人が尊い命を奪われる中、久米島出身者も1101人が犠牲になった（久米島博物館）。戦後、久米島を含む沖縄県は1972年に日本へ返還されるまで、米国政府の統治下に置かれた。米国統治時代、島内では米ドルが決済通貨であり、共栄タクシー代表者の嘉手苅正さん（かてかる・ただし=65）は「高校時代、稲刈りを手伝うと親から5セントもらい、それでコーラを1本買えました。映画は10セントだったかな…」と少年時代を振り返る。



共栄タクシー代表者の嘉手苅正さん（天后宮で）

久米島は仲里村と具志川村に分かれていたが、平成の大合併で2002年に久米島町が誕生した。面積は約64平方キロで東京・JR山手線の内側面積とほぼ同じ。人口は1950年代のピーク時には1.6万人を数えたが、その後は出生率が高くて過疎化の波に抗し切れず、今ではその半分の7846人（2019年2月末）。なお、リコー・ジャパンは久米島町と2017年5月、地方創生に関する協定を締結。両者は①賑わいの創出②産業や観光など地域振興③庁舎内におけるさまざまなコスト縮減—などについて連携・協力している。

前述したように久米島では稲作が盛んだったが、今では水田はほとんど姿を消した。返還後の日本政府の減反政策によって、農家が稲作からサトウキビ栽培へ転換したからだ。毎年1～3月がサトウキビ出荷の繁忙期。牧志実（まきし・みのる）さんは50年以上、機械を使わず手作業で大量のサトウキビを収穫してきた。「毎日、朝8時から夕方まで刈り続け、年明けから3月まで一日も休みはありません」と苦笑い。元気一杯で今年83歳とは思えない身のこなしである。



サトウキビ手刈りを続ける牧志実さん

新垣清昂（あらかき・せいこう）さんは、キャリア40年を超える三線（さんしん）の職人。中国伝来の三弦から発展した三線は三味線よりも歴史が古く、胴にニシキヘビの皮を張るなどの特徴がある。新垣さんも元気なシニアで、「三線を弾きながら大声で歌うのが一番の健康法です」—

また、久米島の豊かな水は特産品の「泡盛」（タイ米を原料とする蒸留酒）を生み出した。米島酒造では若き蔵人の嘉数昂斗（かかず・あきと）さんが秘伝の手造り工程を丁寧に説明してくれた。「天気や気温、湿度などによって泡盛の味は微妙に変わってしまいます。だから1年365日、交代でだれかが必ず蔵を見守るんです」—

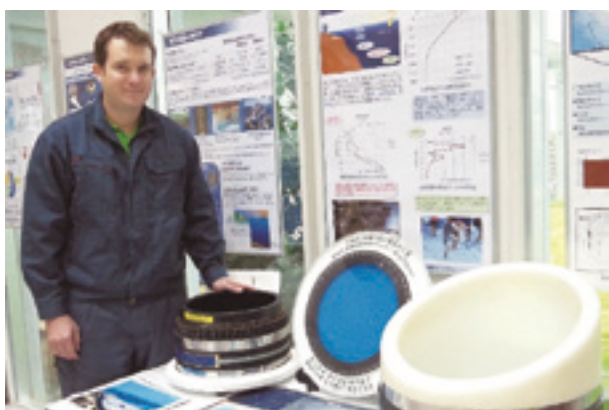


三線職人の新垣清昂さん



米島酒造の嘉数昂斗さん

歴史に翻弄されながらも、古き良き伝統を守り続けてきた久米島町。だが、決してそれに固執しているわけではない。最先端技術の研究開発にも挑戦し、新たな産業の振興によって島の人口や雇用を増やそうと奮闘している。その切り札が海洋深層水である。島の東部に建設された沖縄県海洋深層水研究所を訪れ、来場者対応を担当しているマーティン・ベンジャミンさんから説明を受けた。米国アリゾナ州出身で英語教師として来日。「空気や水を含めて自然が素晴らしい」という久米島の魅力にはまり、テレビのお見合い番組で知り合った日本人女性と結婚した。



海洋温度差発電実証設備のマーティン・ベンジャミンさん

この研究所は久米島の沖合2.3キロ、水深612メートルの地点に取水口を設置。そこから国内最大の1日1.3万トンの深層水を汲み上げる。海洋の深層部には太陽光が届かないため、水温は極めて安定。久米島の場合、表層水は22～29度の幅で変動するが、深層水は年間を通じて9度程度、すなわち家庭用冷蔵庫の中の温度と変わらない。

また、深層水には植物の生長に必要な窒素やリン、ケイ酸などの無機栄養塩が豊富に含まれ、その含有率は表層水の十数倍に達する。逆に細菌などの微生物や水質悪化の原因となる有機物などの含有率は、表層水の100分の1～1000分の1しかない。

こうした深層水の三つの特長（低温性、富栄養性、清浄性）は、久米島町の水産業や農業などに大きな付加価値をもたらした。例えば、クルマエビは沖縄県が日本最大の産地。その種苗生産に冷たくて清浄な深層水を使うことにより、健康で安全な稚エビを育成できるようになった。南西興産では170万～180万匹ものクルマエビを養殖中。場長の城田誠さんは「お歳暮需要が入る年末が最も忙しくなります。価格変動の激しさが悩みの種ですが…」という。



南西興産の城田誠さんと養殖クルマエビ

沖縄特産でプチプチした食感が人気の海ブドウ。その養殖にも深層水は貢献する。従来は夏場の海水温上昇がネックになっていたが、久米島海洋深層水開発は表層水に深層水をブレンドすることで、水温を栽培に最適な24～25度に制御している。場長の仲道司さんは「まだまだ謎の多い生き物。歩留まりにはばらつきがあり、50%ならますますです。生長を見ているとほんと可愛くて、大きく育ってくると嬉しくなります」と話す。



久米島海洋深層水開発の仲道司さんと養殖海ブドウ

深層水は牡蠣（かき）の陸上養殖の実証実験も成功に導いた。その高い清浄性によって、「全く当たらない生牡蠣」が食卓に上る日も夢ではない。久米島では気温が高くて夏場は収穫できなかったハウレンソウも、深層水で土壌を冷やすことによって通年栽培が実現した。このほか化粧品や飲料水、塩など深層水の応用範囲は実に幅広い。これまで深層水のプロジェクトには総額60億円が投じられたが、既に年間25億円もの経済効果をもたらしているという。

だがそれでも、深層水は潜在能力を未だ十分に発揮していない。その一つに海洋温度差発電があり、沖縄県ではその実証実験に取り組んでいる。その大まかな仕組みは、①蒸発器＝日光によって温められた表層水の熱を使い、沸点の低い液体（アンモニアや代替フロン）を蒸発させる②発電機＝①から発生するガスの圧力によって、タービンを回して発電する③凝縮器＝深層水でガスを冷やし、元々の液体に戻す一になる。



海洋温度差発電の実証設備

夢のような再生可能エネルギーだが、実はそのアイデアは140年以上も前の世界的に有名なSF小説の中に隠されていた。ジュール・ヴェルヌが「海底2万里」の中に登場させた潜水艦ノーチラス号の動力として、表層水と深層水の温度差を利用した発電が候補に挙がっているのだ。

この古くて新しい技術を使い、久米島町はエネルギーを自給し、産業振興と雇用創出を目指す「久米島モデル」を実現しようと動き始めた。大田治雄町長にインタビューを行うと、「深層からの取水量を引き上げ、2030年には久米島で消費するエネルギーをすべて再生可能エネルギーで賄えるようにしたい」と熱く語ってくれた。「沖縄は観光資源に恵まれているが、それに頼るだけでいいのか。地域創生には新たな産業の振興も欠かせないはず。『久米島モデル』を確立し、それをODA（政府開発援助）として発展途上の島嶼国を支援したい」と夢を膨らませている。

まずは、深層からの取水量を現在の日量1.3万トンから10万トンに引き上げたいが、それには80億円規模の資金が必要になる。人口8000人を切った町にとって、それは一般会計の規模を超える途方もない金額。国や沖縄県、民間企業などからの支援や資金提供が不可欠であり、大田町長は理解と協力を求めて飛び回る。琉球王国の末裔（まつえい）の志（こころざし）は久米島の空のように高く、その海のように透き通っていた。



久米島町の大田治雄町長



（写真）筆者
PENTAX K-S2

3.11を乗り越えて…陽はまた昇る 震災復興と構造改革 不撓不屈の釜石市・大槌町

社会構造研究室 主席研究員
RICOH Quarterly HeadLine 編集長

中野 哲也

2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0という国内観測史上最大の地震が発生し、巨大津波が牙をむいて太平洋沿岸に襲いかかった。死者・行方不明者は1万8000人を超える。岩手県三陸沿岸取材して歩くと、東日本大震災から3年が過ぎても、被災地には深い傷痕が残されたまま。しかし、市民は陽がまた昇る未来を信じ、不撓不屈の精神で復興に粘り強く取り組んでいる。

壊滅した岩手県大槌町 立ち上がったのは…

「包丁一本見つからない…俺はすべてを失ったのか…」一。40年にわたり三陸海岸中央部の岩手県大槌町（おおつちちょう）で芳賀鮮魚店を営んできた芳賀政和さん（70）が瓦礫（がれき）の山に入ると、そこには変わり果てた自分の店が…。すると、金縛りにあったように体が動かなくなった。

芳賀さんは3.11を外出先の岩手県宮古市内で迎えた。未だかつてない激しい揺れに耐えようと、沖合で立ち上っていた「白い煙」が視界に入った。突然、幼いころ父親から聞かされていた教訓が頭の中によりみがえり、「大津波が来る」と咄嗟に判断。車を捨てて近くの中学校を目指して崖を登り、辛うじて一命をとりとめた。

しかし、家族や店が気がかりで、芳賀さんは居ても立ってもいられない。車に戻って必死でハンドルを握り続け、翌日未明、へとへとで故郷に転がり込んだ。幸い、妻の洋子さん（70）は無事だったが、町の中心部は「焼け野原」。地震と津波と火災により、跡形もなく壊滅していた。大槌町では人口の1割近い約1300人が犠牲になった。



崩壊した大槌町役場旧庁舎が3.11を今に伝える



未だに大槌町中心部は…

電気・ガス・水道のライフラインは断絶した。芳賀さん夫妻は冷え切ったコタツに体を突っ込み、ただただ震えるだけ。巨大津波は親類や仲間の命を一瞬にして奪い、人生の糧である店舗を破壊した。それでも、芳賀さんは「自分でも不思議だと思うんだけど、海を憎むことはなかった」一。15歳で漁師になり、30歳からは鮮魚の販売・加工で生計を立ててきた。「半世紀以上、海の恵みのおかげで俺は生きてこられた。だったら、店を再開して魚を売るしかないじゃないか！」と自分に言い聞かせると、ようやく立ち上がることができた。

とはいえ、店舗も機械も道具もない。ゼロからのスタートを考えると、芳賀さんは再び途方に暮れる。そんな時、行政からインターネットを活用する再建策を助言された。デジタル技術とはほとんど無縁の生活を送ってきたし、キーボードもたたけない。だが、覚悟を決めて鮮魚販売の仲間にネット通販の共同事業を提案。資金はないから、ネットを通じて全国から「サポーター」（一口1万円）を募ることにした。それを再建資金に充て、成功すれば「配当」として大槌産の鮮魚を宅配するという仕組みである。

大震災から5カ月後、こうして芳賀さんと3つの業者が「立ち上がれ！ど真ん中・おおつち」プロジェクトを発足。パソコンの得意な女性職員を雇い入れ、メールマガジンのほか、ツイッターやYouTubeなどもフル活用した。朝日新聞が全国版でとり上げたこともあり、サポーターの輪は予想をはるかに超えるスピードで拡大。ネット販売は軌道に乗りはじめ、サポーターに旬のサンマなどを「配当」できるようになった。プロジェクトは協同組合に発展し、芳賀さんが理事長に就いた。

ところが、芳賀さんはサポーター5000人達成の寸前で、募集を突然打ち切ってしまった。「水産業界の革命なのに、どうしてやめたのですか」と尋ねると、芳賀さんは「次の大津波がいつ来るか俺には分からない。その時は、サポーターに『配当』ができなくなる。そう考えると胸が締めつけられ、眠れない夜が続いたんだ…」とその心境を明かした。

サポーター募集をやめても、芳賀さんの店は回復軌道を維持している。だが、原発事故に伴う風評被害にも苦しめられ、売上高は大震災前の半分にも届かない。また、崩壊した冷凍施設の再建にめどが立たないし、芳賀さんは古希になっても後継者が見つからない。難題が山積しているのだが、「やる気とノウハウがある限り、仕事は続ける。妻と喧嘩しながらね…」という芳賀さん。キラキラ輝く夫妻の笑顔が、復興に向けて最強のエンジンとなる。

人の生死は「運命」で片づけられない

大槌町に隣接する岩手県釜石市。かつて市内の橋の上には、鮮魚やその加工品、野菜を扱う店がたくさん並んでいた。今は駅前橋上市場「サン・フィッシュ釜石」に生まれ変わり、市民の台所や観光スポットとして賑わう。

昆政商店の菊池フサ子さん（71）は橋上市場時代から三十年余、海産物を販売している。3.11では、「小船が台風にもてあそばれているような強烈な揺れ」に襲われた。外を見ると、頑丈な街灯柱が右に左にグニャグニャ曲がっている。携帯ラジオを聴いていた市場のだれかが大声を張り上げ、「津波が来るぞ!!!」一。しかし、1960年のチリ地震津波を経験した菊池さんも、どの方向に逃げるべきか迷いに迷った。

結果として逃げた方向は正解だった。だが、菊池さんは「人の生死を『運命』で片づけたくない。そんなものはないと思うから…」と声をつまらせ、目頭を押さえた。首都圏から地元に戻り家業を継いだ、愛する弟夫妻を亡くしたという。大震災後、菊池さんは不眠や吐き気、めまいに悩まされ続けてきた。「もう3年、いやまだ3年。どっちなのかわからない…」一



壊滅から立ち上がった芳賀さん夫妻



(上) 駅前橋上市場「サン・フィッシュ釜石」
(下) 市場で販売30年 菊池フサ子さん



岩手県釜石市・大槌町周辺地図 (作成) 花原 啓



釜石市長も「茫然自失」 頭の中が真っ白に…

大震災発生直後、釜石市の野田武則市長（61）が市庁舎の2階から外を見ると、まさに巨大津波が街に襲いかかろうとしていた。「自分の手の届く世界ではなく、別の世界で起きている気がした。頭の中が真っ白になってしまい、事実として受け入れられない。『茫然自失』という言葉しか思いつかなかった…」一。しかし次の瞬間、頭の中のスイッチが「市長」という現実に取り替わる。対策本部を立ち上げ、無我夢中で陣頭指揮を執りはじめた。

街は瓦礫の山となり、電気や水道などは寸断。緊急時に備えていた衛星携帯電話が役に立たず、通信も完全に遮断。対策本部は孤立無援となり、頼みの綱はロウソクの灯りだけ。湾岸部は最大20メートル近い津波にのみ込まれ、死者・行方不明者が1000人を超えた。

海に近い街の中心部が壊滅する中、過去の津波の教訓は生きていた。釜石の子どもは普通の授業から、「想定にとられるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」を三原則とする防災教育をたたき込まれている。だから大震災でも小中学生は冷静に行動し、ほとんどの児童・生徒が無事避難した。釜石小学校では、9割以上の児童が既に下校していたが、全員が教えを守り自らの命を守った。野田市長は「子供が親を説得して、より高いところさらに高いところまで逃げ、命を守った家族が少なくない」と振り返る。



3.11直後、陣頭指揮を執る野田武則釜石市長（左）
（提供）釜石市役所



現在の釜石市街

釜石の中心街を歩いて回ると、瓦礫はきれいに片づけられ、道路は概ね復旧しており、復興作業が急ピッチで進められていた。その一方で、3年経っても空き地が目立ち、放置されたままの建物に衝撃を受ける。



（上）「青いライン」まで津波が襲ってきた（釜石港湾合同庁舎）
（下）崩壊後も放置されたままの書店

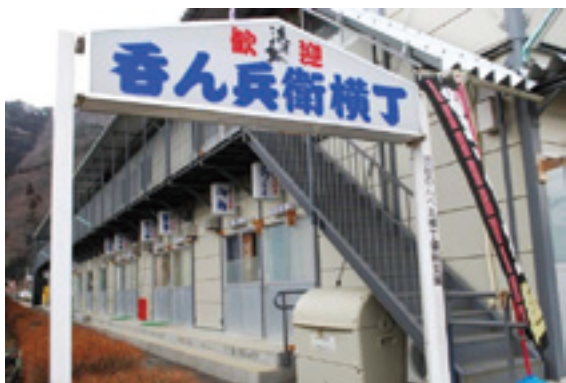


復興計画を作っても、市と国の各省庁、県、地権者などとの調整が容易でなく、何度も作り直さなくてはならない。最近、建設資材や労務単価の高騰が苦勞して作った計画に影を落としている。野田市長の自己採点では復興の進捗度は30%にすぎない。しかも住居に限れば、「ゼロ%」と言い切る。なぜなら人口約3万7000人のうち、5000人を超える市民が依然、仮設住宅での生活を強いられているからだ。

家賃無料でも、仮設入居者は「断熱効果が乏しいため、冬は非常に寒い。暖かくしようとすれば、自己負担の光熱費が二倍以上かかってしまう」「狭いから、受験生がいても勉強部屋を確保してやれない」と不満を訴えている。新設された公営復興住宅への入居は始まっているが、立地や家賃などに問題点も指摘される。仮設暮らしが解消されて初めて、釜石市民は復興、いや「復幸」を成し遂げたと言えるのだろう。



(上) 釜石市中心部の仮設住宅
(下) 仮設酒場は復興の「エネルギー源」



日本初の洋式高炉から「鉄の街」に発展

釜石市教育委員会によると、釜石という地名の由来はアイヌ語の「クマウシ」。クマ＝「魚干し棚」あるいは「飛び跳ねる」、ウシ＝「存在する」を意味する。古代から複雑で優美なリアス式海岸に魚が集まり、それが生活の糧となってきた。年間平均気温は11.2度と東北地方では比較的温暖な気候であり、積雪も内陸部より少ない。

江戸時代中期、釜石西部の大橋で磁鉄鉱が見つかった。その後、大島高任が従来の砂鉄ではなく、鉄鉱石を原料とする洋式高炉を築き、1857年に日本で初めて銑鉄の製造に成功した。以来、釜石は「鉄の街」として急速に発展する。

太平洋戦争末期、製鉄所は連合軍による艦砲射撃の標的となる。壊滅的な打撃を受けたものの、戦後は鉄鋼産業が高度成長の波に乗り、「北の鉄人」こと新日鉄釜石ラグビー部（現在はクラブチーム「釜石シーウェイブス」）は日本選手権7連覇。釜石市の人口も最盛期には9万2000人に達し、「鉄と魚とラグビーの街」として繁栄した。

しかし、その後のグローバル化の波には抗し切れず、新日鉄は1989年に高炉の火を消し、鉄鋼の一貫生産を中止。街では「鉄冷え」との闘いが始まった。今も新日鉄住金釜石製鉄所を維持しているが、線材の生産にとどまり、従業員も約220人（本体のみ）にすぎない。



新日鉄住金釜石製鉄所

人口は最盛期の4割 3人に1人が高齢者

釜石市の人口は最盛期の4割まで激減する一方で、市民の3人に1人が65歳以上のお年寄りになった。市は困難な復興事業を加速させると同時に、「企業城下町」から脱却し、少子高齢化も克服しなくてはならない。

野田市長は「一本足打法」だった地元経済の構造改革を打ちだし、バランスのとれた産業構造への転換を急いでいる。具体的には、①高齢者包括ケアによる、安心感のある街づくり②太陽光発電など再生可能エネルギーの拡大による、エネルギー供給基地化③コバルト合金の生産や水産業6次化（生産、加工、販売の総合化）などによる、新産業の創出が釜石の未来を担う。

既に構造改革は芽を出しはじめた。釜石市にトヨタ自動車が協力したオンデマンド型の小型バスが走り、交通の便の悪い仮設住宅の高齢者には貴重な足になっている。市民は登録証を発行してもらった上で、予約すれば希望の停留所・時刻で利用できる。タクシーと路線バスの中間的な公共交通システムであり、運営者は需要に応じて運行を柔軟に変更できるため、過疎地でも効率的な事業が期待されている。

かつて釜石にも街中にショッピングセンター（SC）があったが、その撤退後は市内から大規模商業施設が消えた。このため週末になると、2000台ものマイカーが盛岡市などのデパートやSCまで出掛けるという。これでは貴重な復興資金が市内で循環せず、市外へ流出してしまう。大震災後、市はSC誘致に乗りだし、「イオンタウン釜石」（56店舗、駐車場1240台）が3月14日、新日鉄住金の所有地にオープンした。従業員約620人の7割を、釜石市や近隣市町村の住民から採用したという。

一方、地元商店からは「客をSCに奪われてしまう」「イオンタウンに出店したくても、テナント料が高過ぎる」といった不安や不満が聞こえてくるが、野田市長は「地元での購買率を何とかして引き上げたい。イオンの集客力を販路拡大のチャンスととらえ、やる気のある事業者には業態転換や新商品開発などを積極的に支援する」と市民に訴えている。



中心街にオープンした「イオンタウン釜石」（建設中に撮影）

このほか、市は「スマートコミュニティ」計画にも着手している。学校や復興住宅などに太陽光パネルを設け、平時でも災害発生時でも電力の自給自足を目指す。また、広域風力発電や木質バイオマス発電といった再生可能エネルギーの市外供給力を増強し、地元雇用の拡大を視野に入れる。また、電力供給者と各家庭を「賢い送電網」（スマートグリッド）で結び、ICT（情報通信技術）をフル活用して節電やCO₂排出量の抑制に取り組むという。

しかし、インフラ整備に代表されるハード面の復興だけでは、釜石の未来は拓かれない。都市間競争の時代では、観光やスポーツ、芸術といったソフトパワーが街の命運を握るからだ。市も橋野鉄鉱山のユネスコ世界遺産登録や、日本で開催される2019年ラグビーW杯の試合誘致を目指し、ロビー活動に力を入れはじめた。それを後押しするように、JR東日本が4月12日に「SL銀河」（花巻⇄釜石）の定期運行を始める。NHKドラマ「あまちゃん」の舞台となった三陸鉄道もようやく全線再開する。



（上）試運転中の「SL銀河」（JR釜石駅）
（下）全線再開を待つ三陸鉄道（北リアス線小本駅）



民間企業から市へ出向 「助っ人」が人材育成

震災復興と構造改革を同時に進めている釜石市だが、最大の問題は「人」の確保である。市内に大学がなく、若い人材の大半が市外に流出してしまう。このため、市が頼みとする強力な「助っ人」が、各企業からのボランティア社員である。

リコーから経済同友会経由で市産業振興部に向中の野村卓哉さん（34）と堀部史郎さん（37）は仮設住宅で暮らしながら、復興事業に取り組んでいる。「仮設住宅から最寄りコンビニまで歩いて45分」「ファストフード店がないから、残業後の夕食は酒も飲まず独り居酒屋で」「朝干した洗濯物が乾く前に凍りつく」一。都会暮らしの長い2人は、赴任当初から戸惑いの連続。それでも顔には充実感があふれている。

野村さんは妻を東京に残して単身赴任。「(宮城県仙台市の) 東北大出身だから、大震災直後から居ても立ってもいられず、被災地で貢献したかった。特許関連の仕事で身につけた戦略的思考が、復興事業でも役立っている」という。堀部さんはリコーでコンピューターのプログラマーとして働いていたが、同社が立ち上げた復興支援室への異動を志願。当初、釜石市内には寝る場所がなく、車で2時間かけて岩手県奥州市から市役所まで毎日通い続けた。「仕事相手がパソコンから人、それも復興に挑む市民に変わり、刺激的な勉強をさせてもらっている」



リコーから経済同友会経由で釜石市役所出向中の野村さん(右)と堀部さん(左)

経済同友会が特別協力し、人材育成と復興計画の具体化に取り組む「東北未来創造イニシアティブ」の運営が、この2人の重要なミッションである。その人材育成道場「未来創造塾」の門をたたいた塾生の「伴走者」となり、野村さんと堀部さんは釜石の未来を担う若手経営者10人と体を張って付き合う。徹夜も辞さず議論を重ね、誉めたり、怒ったり、笑ったり、泣いたり…

2014年3月1日、第一期生の卒塾式が釜石市内で開かれた。卒業論文となる事業構想の発表では、「焼き魚のアジア輸出」「和菓子で世界中に笑顔を創造」「釜石をSOBA(蕎麦)の里に」「三陸産ホタテ貝のブランド化」「街の(空き地、空き家、墓の)見守り隊」…。いずれの構想にも故郷への強烈な愛情と危機感があふれており、式会場では称賛する拍手が鳴り響いた。



人材育成道場「未来創造塾」の卒塾式

塾長の大山健太郎アイリスオーヤマ社長が「一人の力は大きくなくても、10人が束になれば、釜石が変わっていく第一歩になる」、副塾長の高橋真裕・岩手銀行頭取は「進むべきか退くべきか迷ったら、進んでいくべきだ。なぜなら失敗したとしても、得るものがあるからだ」とそれぞれエールを送った。そして最後に、野田市長が第一期生を「釜石維新の志士」と命名した。「志士」一人ひとりの夢が実現する時、この街もよみがえり、陽はまた昇る。



陽はまた昇る(釜石湾の日の出)

(写真) 筆者
※提供分を除く

トリプル被災地を駆けめぐるスーパー医師

「〇〇さん、きょうは4月23日です。桜の花はもう終わりですが、これから鯉のぼりの季節になりますね」一。大きな声でゆっくりと声を掛けているのは、福島県にある南相馬市立総合病院の小鷹昌明（おだか・まさあき=47）医師。ベッドの上の女性は言葉を発しないが、視線を真っ直ぐにして先生の顔をじっと見つめる。

この女性は60代後半。パーキンソン病を患い、寝たきり生活が続いている。脳内ドーパミン（神経伝達物質）の減少によって発症するが、その原因は現代医学でも分からない。この家では娘が働きながら難病の母の介護を担い、老いた父の面倒もみている。高齢化社会で急増中の光景だが、一点だけ他の街とは違う。巨大地震、巨大津波、原発事故に見舞われた「トリプル被災地」なのである。

埼玉県出身の小鷹氏は獨協医科大学卒業後、同大学病院で神経内科医を務めていた。准教授まで順調に昇進したが、「管理職である教授を目指すことに意味があるのだろうか…」と悩み悩む。2011年3月11日の東日本大震災の後、南相馬市など福島県内を視察し、マンパワーが決定的に不足している被災地の医療現場を目の当たりにする。

決断に時間はかからなかった。大学病院を辞めて南相馬市へ移り、翌年4月に市立総合病院で診療を始めた。東京電力福島第1原発の北23キロに位置する「原発が一番近い病院」である。小鷹氏は「最初は1年ぐらいのつもりだったけど…」と苦笑するが、今や南相馬で抜群の行動力を発揮し、21世紀の「赤ひげ先生」として市民から愛されている。

人口6.3万人の南相馬市内でパーキンソン病患者は80人に上るといふ。自宅で父や母、夫や妻の介護をしながら、病院に連れて行く家族の労力は並大抵でない。そこで小鷹氏は超多忙な病院診療の合間を縫い、毎週木曜日に往診を始めた。使っている電気自動車は、小鷹氏が面識もない日産自動車のカルロス・ゴーン最高経営責任者（CEO）に直訴し、提供してもらったという。

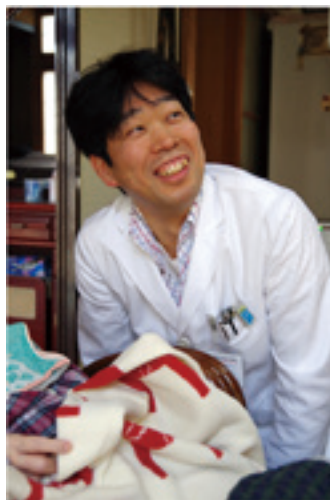
元船乗りの男性は「南氷洋まで出かけたし、スエズ運河は何度も航行したんだ」一。家を空けてばかりだったが、今は70歳を過ぎたパーキンソン病の妻の介護に専念する。小鷹氏から「罪滅ぼしなんですよね」と言われると、男性は照れくさそうに下を向いた。往診を受ける家庭は介護と震災復興を両立させ、放射能という「見えない敵」とも闘う。ヘルペス脳炎を患う妻の介護に従事する男性は「家内を病院に連れて行けば半日仕事になる。先生が往診してくれるから、私の負担は80%も減った」一

患者の家族は二週間に一度の往診を待ちわびており、先生が到着すると近況を一生懸命に報告する。小鷹氏の勤めによってパーキンソン病の妻を病院に預け、13年間に及ぶ介護生活で初めて温泉に行ったという男性はこう話した。「痰（たん）が喉（のど）に引っかかりはしないかと、一日24時間家内から目を離せない。温泉に浸かって本当に久しぶりにゆっくりできた」一

小鷹氏の活動は医療分野にとどまらない。大震災後、中高年の男性が引きこもり、アルコール依存症に陥る姿を見て、HOHP（ホープ=引きこもり お父さん 引き戻せ プロジェクト）を立ち上げた。「男の木工教室」や「男の料理教室」などを小鷹氏がプロデュースし、お父さんたちに生きがいを見つけてもらい、自信を回復させようというわけだ。

小鷹氏は、千年以上の歴史を持つ伝統行事「相馬野馬追（そうまのまおい）」に参加しようと決意し、乗馬を一から習得。昨夏、甲冑（かっちゅう）に身を固めて騎馬武者デビューを果たした。休日を返上し寝食を忘れて地域に溶け込もうとする姿を、市民がリスペクトしないわけない。今や、地元経済界から推されて南相馬市物産振興会の会長でもある。

名刺には「エッセイスト」の肩書きもあり、南相馬から情報や洞察を精力的に発信する。今年4月、精神科医の香山リカ氏との往復書簡をまとめて刊行した（「ドクター小鷹、どうして南相馬に行ったんですか？」七つ森書館）。スーパーマンのような活躍だが、気負ったところが全くない。「元々の街の文化を活かしながら、地元の人と一緒に楽しんでいるだけです」一。このさわやかな笑顔が、困難に立ち向かう市民に勇気を与える。



（写真）筆者
PENTAX K-50

ゼロからの3.11復興 長くて短い5年間

巨大津波を生き抜いた「奇跡の一本松」 岩手県／陸前高田市

産業・社会研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

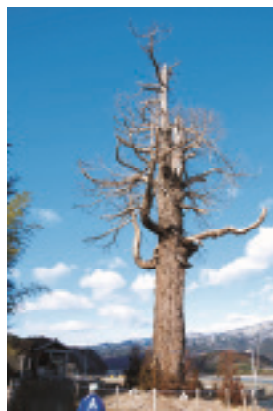
2011年3月11日の東日本大震災では、1万5000人を超える無辜（むこ）の命が奪われ、2500人以上が行方不明になった。それから5年が過ぎても、被災地では今なお多くの市民が仮設住宅での生活を余儀なくされ、将来への不安を抱えたままだ。中でも三陸海岸南部の陸前高田市（岩手県）は、巨大津波によって中心部が壊滅した結果、復興事業が困難を極める。全国的に3.11の風化を否めないが、この街にとっては現実以外の何物でもない。

東北新幹線の一ノ関駅（岩手県一関市）からJR大船渡線で約1時間20分、気仙沼駅（宮城県気仙沼市）で途中下車した。ここで線路が寸断されているからだ。大震災で駅舎や橋梁が流失し、気仙沼～盛（岩手県大船渡市）間は不通になったまま。過疎化が加速するこの地域では、復旧工事に数百億円を投じて採算が取れない。このため、JR東日本はBRT（Bus Rapid Transit = バス高速輸送システム）を導入した。線路を撤去した専用道の区間は信号や渋滞が無いいため、バスは列車並みのスピードで快走する。一般道の区間では遅くなってしまいが、鉄道に比べて駅（=停留所）や運行本数を容易に増やせるという利点がある。



気仙沼駅からBRTに乗り、陸前高田市内に入った。大震災前、太平洋に臨む高田松原は2kmにわたって白い砂浜が続き、東北有数の海水浴場としてにぎわい、日本百景の一つにも数えられていた。だが、3.11の巨大津波によって7万本の松の木が流失し、高田松原は消滅した。この中で、高さ約27.5メートル、樹齢約170年という老木が唯一生き残り、「奇跡の一本松」と名付けられた。陸前高田市は浸水高で最大17.6メートルもの津波に襲われ、死者・行方不明者が1700人を超えた。市街地は壊滅状態になり、市外への転出者が急増。その結果、大震災前に2万4000人を数えた人口は、今や2万人を切っている（国勢調査の速報値）。打ちひしがれた市民にとって、奇跡の一本松は復興を目指す上で精神的な支柱となった。

市内を歩き始めると、3.11から時が止まっている光景に何度も出会う。今泉天満宮の杉の巨木は驚異的な生命力を発揮したが、神社の碑はなぎ倒されたまま。内部が滅茶苦茶に破壊された「道の駅・高田松原」は、今も水の恐怖を生々しく伝える。気仙中学校（当時の生徒数93人）は屋上まで津波に呑み込まれたが、生徒は高台に逃げて全員が無事だった。その朽ち果てた校舎は、日常の防災教育と危機管理の大切さを教えてくれる。総延長3kmのベルトコンベヤーは既に使命を終えたが、膨大な量の土砂を運んで市街地のかさ上げ工事に大いに貢献した。





新沼さんは多くの友人や親類を失い、絶望の淵に突き落とされた。「こんな状態で観光客なんか来るはずもない」と思い、ガイドを廃業しようと考えた。3カ月後、旧知の観光会社から「大震災の『語り部』をやりませんか」と促され、悩み抜いた末に「地元のためになるのなら…」と立ち上がった。だが、瓦礫（がれき）だらけの市街地には客を案内できず、山の頂上に連れて行って懸命にガイドを続けた。話し始めると涙があふれ出し、言葉にならない。そして客も涙を流す一。その繰り返しだった。

新沼さんは「市民が歯を食いしばり、あきらめないで復興に取り組めた原動力は、手弁当で来てくれた国内外のボランティアの皆さんです。そのもの凄いパワーに市民が動かされました」と振り返る。また、自衛隊の尽力にも頭が下がったという。「瓦礫からの救出作業や遺体処理は自衛隊しかできません」一。今、新沼さんは全国各地から講演を頼まれ、愛して止まない故郷を懸命にPRしている。「陸前高田は海、山、川すべての幸に恵まれ、緯度が高いわりには寒くないし、雪もほとんど積もりません。そして何より人情に厚い土地柄なんです」一

3.11で壊滅した陸前高田市では今、海岸部で東京湾平均海面から最大12.5メートルの防潮堤の整備が、市街地では最大12メートルのかさ上げ工事が進められている。ただ、いずれも難工事で長い時間を要するため、5年経っても中心部は広大な「空き地」のように見える。高田、今泉両地区の土地298.5ha（東京ドーム約64個分）には約1122億円が投じられ、区画整理事業が進行している。この両地区に2120戸、約5900人が居住する計画だ。その一方で、タクシー運転手に聞くと、「巨大な防潮堤によって海が見えなくなり、津波が来ても目で確認できないのではないかと不安に思う。それに広大な空き地は本当に（住宅や商店などで）埋まるのだろうか」と複雑な表情を浮かべた。



「語り部」を務める観光ガイドの新沼岳志さん（中央）
陸前高田市観光物産協会の浅沼ミキ子さん（左）
佐々木真紀さん（右）

陸前高田市の戸羽太市長（51）は2011年2月に初当選。その翌月、東日本大震災に見舞われ、最愛の妻を失くした。一瞬にして壊滅した街の復興に向け、寝食を忘れて陣頭指揮を執りながら、子ども二人の父として奮闘を続ける。戸羽市長にインタビューを行い、3.11から5年間の総括や街の再生ビジョンなどをうかがった（2016年2月4日取材）。

地元で観光ガイド歴15年の新沼岳志さん（70）は「語り部」として巨大津波の恐ろしさを伝えている。3.11当時は市民会館で確定申告をしていたが、「ガラガラガラ…」という激しい揺れを感じると、一目散にマイカーで帰宅した。「自宅は高台にあったが、築100年以上の古民家のため、妻が下敷きになったのではないかと…」と案じ、背筋が凍ったという。幸い、妻も自宅も無事だった。しかし高台から見下ろすと、市街地は見たこともない黒い激流に呑み込まれ、大量の煙があちこちから上がっていた。



戸羽 太氏（とば・ふとし）
1965年神奈川県生まれ。1995年陸前高田市議会議員（3期12年）、2007年陸前高田市助役から副市長、2011年2月陸前高田市長当選、2015年2月再選。

——まず、この5年間で総括していただけますか。

個人的には様々な後悔がたくさんあります。大震災は市長就任直後の出来事ですから、当選さえしなければ、家族は犠牲にならなくて済んだのではないかと…。モヤモヤしたものが消えない5年間でした。多数の市民が犠牲になり、もっと速く復興を進めたかった。しかし国も態勢が整っておらず、しかも「既存の法律の中でやりなさい」と言うばかり。ジレンマあるいは歯がゆさとの戦いでした。長いようで短く、短いようで長い5年間です。

当初、自分を励ますためにも、「明日が見えない。けれども、2～3年後の陸前高田は絶対に良くなっているはずだ」と信じ、復興に取り組みました。しかし、そのような私のイメージ通りにはいきませんでした。「5年も経てば、少なくとも住む所ぐらいはできているだろう」という思いでやってきましたが、現実にはなかなか…

※注＝2015年10月末の応急仮設住宅の入居者数は3411人（最大時から2224人減）



——復興を進める上で最大の問題点は何でしたか。

被災地のやろうとすることが、（永田町・霞が関に）うまく伝わらないシステムです。はっきり言うと、国は地方自治体を100%は信用していません。国は地方分権を掲げる一方で、「自治体にお金と権限を預けて大丈夫なのか」と疑っています。だから、国の関与が中途半端になります。私は「国がそこまで言うなら、好きなようにやってくださいよ」と申し上げたことがあります。すると、「いやそうじゃない。住民の皆さんの意向に沿って国は寄り添うだけ」という。「それじゃ、こういうことがしたい」と要望すると、「いや無理です。ダメですよ」

ダメならダメでいいんです。それならその理由を明らかにしてほしい。「今の法律の枠内でできる方法を一緒に考えてくれませんか」ということなのです。被災地からすると、「ほれみろ、国は『寄り添う』なんて言っているが、本当にそんな気持ちがあるのか」という絶望感ががっくりする。「だったら、最初から期待なんか持たせるな!」と言いたくなります。しかも、ちょっとした話で私も職員も（列車を乗り継いで）6時間かけて上京しなくてはなりません。

安倍晋三首相にも申し上げてきたのは、「被災地の立場でものを考えてください」ということです。そうすれば、（政策や事業の）優先順位も見えてきます。「自分の親が陸前高田で被災して仮設住宅にいたとしたら、何が求められているだろう」と考えてくれば、自ずと想像できるはずです。大きなギャップというより、ちょっとした言葉足らずなどが、（国と被災地が）しっくりいかなかった大きな要因ではないかと思います。

——今、被災地で最も必要なものは。

もう5年になり、復興事業で手を付けられていないものは基本的にありません。今、政府に対しては、「なぜ次に備えないのですか」と申し上げています。南海トラフ地震などの発生が懸念されているからです。皆さん、5年経った陸前高田を見てください。スーパーゼネコンが最先端の技術を使っているのに、これしか復興が進んでいません。「やはり何か制度に問題があり、復興の妨げになった法律がある」と分かったから、それを今のうちに炙り出して南海トラフに備えようということです。そうしなければ、東日本大震災で亡くなった人々は犬死にじゃないですか。国には真剣に考えていただきたい。



——「集中復興期間」が2015年度末で終了し、2016年度から5年間の「復興・創生期間」では国が被災自治体に一部財政負担を求めることになりましたが。

5年で復興が終わった自治体もありますが、それは「軽傷」だったからです。一方、われわれは「意識不明の重体」から少しずつ復活している状態。傷が深くゼロからのスタートを余儀なくされた自治体に、どうして国は負担を求めのでしょうか。私は「名医が来て大手術しても、助かるかどうか分からない。傷に塩を塗るようなものではないか」と主張したのですが…。これからは「創生期間」というが、やはり国は3.11を過去の話と認識しているのではないのでしょうか。その一方で、5年も経つのにボランティアで来てくださる方がたくさんいます。本当にありがたく思います。



——他の被災地に比べると、陸前高田市の復興は難航しているように見えますが。

難航しているのではなく、やられ方が他とは全然違うのです。（リアス式海岸では珍しく広い平野があだになり）市街地では民家が一軒も残っていません。（広田湾には）島がなくて湾口も広いので、もの凄い津波が襲いかかり、気仙川を8キロも上っていきました。土地を最大12メートルかさ上げし、（東京湾平均海面から）最大12.5メートルの防潮堤も整備します。コンパクトな街づくりを進めると同時に、3.11級の巨大津波が来ても絶対に家屋が浸水しないようにします。しかし、区画整理事業には長い時間がかかります。2000人を超える地権者一人ひとりに対し、職員が全国を飛び回って「どこに住みたいですか」と聞いているところです。



——なぜ復興計画を8年間と決めたのですか。

正直言うと、根拠はありません。家がすべてなくなり、瓦礫が積み上がり、戦場の跡のような光景が広がりました。その中で、号泣するおじいちゃんとおばあちゃんに「あと10年頑張ろう」と言えますか。逆に、5年と言ったらウソになります。だから、8年なんです。時間がかかればかかるほど、市民はあきらめの境地になります。国にもそういう視点を持ってほしいと切に願います。

——今後、どのような産業や雇用を創っていきま

すか。
高田松原が流失した海岸沿いに津波復興祈念公園を整備し、観光・防災教育の拠点にします。その中には国の追悼・祈念施設も造られ、将来は3.11の式典も開かれる予定です。（原爆の爆心地に設けられた）長崎市の平和公園のイメージになります。奇跡の一本松・ユース hostel や気仙中学校、雇用促進住宅、道の駅などを遺構として保存し、「どの地域にもこういう事が起こり得る」と伝えていきます。既に、大手企業が陸前高田を新人教育などの開催地に選んでくれ、研修を実施しています。



また、「ノーマライゼーション（正常化）」という言葉の要らない街をつくりたい。日本の中では、障がい者や高齢者、言葉の分からない外国人、妊婦といった社会的弱者に対する扱いが非常に悪い。陸前高田は分け隔てなく、だれとでも仲良くなれる街を目指します。街が壊滅してしまったので、歩道も公共施設も店舗もゼロから造ることができますから。今までは「うちは狭いから、車椅子の人はごめんなさいね」と言っていた店も、今後は許されません。人が訪ねてくる所にすべて筆談ボードを置くよう、行政も応援していきます。

昨年7月、ふるさと納税を再開し、御礼の品の梱包作業を知的障がい者に行っていたいただいています。それまで1カ月1万5000円しかもらえなかった手当を、最低5万円に引き上げます。家族の中で、障がい者が「自分の食べる分ぐらい、自分で稼いでいるよ」と胸を張って言えるようにしたいのです。昨年末、ボーナスが出たら、みんなすごく喜んでくれました。地元ではリンゴを生産していますが、担い手の大半が高齢者です。今後、障がい者やシングルマザーに2～3年ぐらい住んでもらい、手伝っていただきたい。自分の人生を考えられる機会を提供したいのです。

最終的な私の夢は、すべての人が街へ出られるようにすることです。日本の障がい者は外に出ない・出られない状態にあります。買い物や図書館に行くとか、当たり前前の方が当たり前前に行けるようにしたいのです。例えば、東京で悩みを抱えている人に対し、「そんなに悩んでいるなら、1週間ぐらい陸前高田にいらっしやい」と声を掛けます。来てみたら、障がい者がニコニコしているし、おじいちゃんやおばあちゃんも何だか分からないけど元気一杯。「俺の悩みなんて大したことなかった。ボロボロのどん底からでも、人間は立ち上がれるんだ。もう一回頑張ってみようか……」。そう思ってもらえる街にしたいのです。

陸前高田
ふるさと納税サイト
www.taka-furu.com



(写真) 筆者
PENTAX
K-S2使用

いま、ベトナムが熱い！ 遅れて来た新興国 日本のレンズ技術を継承 ハノイ育ち「匠」の素顔

社会構造研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長

中野 哲也

まだ5月上旬というのに、亜熱帯だから最高気温が40度超、湿度は80%以上。額から流れた汗が止まらない。それでも人々は笑顔を決やさず、きょうも元気一杯。日が沈むのを待っていた子供たちが、歩道で一齐に遊びはじめる。数え切れないほど点在する路上カフェでは、老若男女が酒を飲みながら大声で議論を続ける。ベトナムの人口は9000万人を突破し、近い将来、日本を追い越す。平均年齢28歳の「遅れて来た新興国」は急成長を遂げ、首都ハノイ（人口約645万人）の街角には活気が満ちあふれていた。いつの間にか忘れていた懐かしさを覚えるのは、高度成長期の東京と重なり合うからだろうか…



ベトナム戦争で米軍を退け、1975年にベトナムは南北に分断されていた国家を統一した。しかし国土は荒廃し、経済は行き詰まった。このため共産党独裁の社会主義国家は1986年にドイモイ（刷新）政策を導入し、市場経済へ大転換した。そして今や、在ハノイの日本外交筋が「日本のほうがよっぽど社会主義に近い」と苦笑するほど、競争原理と自己責任原則が浸透している。

本来、計画経済が社会主義国家の柱となるはずだが、ハノイの都市開発は「虫食い」状態であり、およそ計画性が感じられない。建設が途中でストップしたままの工事現場も少なくない。地元の日本企業幹部は「固定資産税などがないから、未完成でもコストが負担にならない。急騰した作業員の労賃が下がるのを待っているか、ベトナム共産党の命令で別の工事が優先されたのだろう」と推測する。

社会主義国家でも…競争原理と自己責任

ハノイ市内の至る所でクレーン車が作業を続けている。韓国資本の超高層ビルは地上72階建て、さらに65階建てのビルも完成間近である。6年前のリーマン・ショック後にベトナムもバブル崩壊を経験したが、外資が引き続き流れ込んでくるから、立ち直りは早いように見える。



市街では朝夕、バイクの「洪水」が発生する。急成長を遂げたとはいえ、市民の足は未だ二輪車である。大通りでも信号や横断歩道がほとんどないため、運転者も歩行者も事故を起こさないよう実に巧みに動き回る。筆者は伝統的な笠帽子（ノン）を被ったお年寄りに先導してもらい、ようやく通りを渡ることができた。やがてモータリゼーションの波はこの地にも押し寄せ、バイクにとって代わる自動車の巨大市場が誕生するかもしれない。



一方、ハノイの旧市街では時計の針が止まったまま。市場に立ち並ぶ商店には冷蔵庫が普及していない。肉や魚介類は氷で冷やされ、店先で次から次へとさばかれていた。地元の人々は「朝売れ残ったものは昼までに捨ててしまい、夕方は改めて新鮮な商品を並べるから、衛生上も問題ない」というが、屋台で勧められた惣菜は遠慮した。



猛暑で頭の中がクラクラするせいもあり、市場は混沌としているように見える。しかし、改めて観察してみると、同じ食材や衣類、雑貨を扱う商店がエリアごとに集積しており、客への配慮や計画性もうかがわれる。混沌の中でも「秩序」を保っているのは、真面目な国民性か、あるいは社会主義体制の為せる業なのか。



幹線鉄道でも一日に何本も走っていないから、たくましい市民は線路端も生活空間として利用する。魚を焼いたり、踏切でおしゃべりを楽しんだり…。路上のあらゆる所に「臨時商店」が突然現れ、そしていつの間にか居なくなる。「よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし」ー。草の根経済のダイナミズムを体感していると、久し振りに方丈記の一節を思いだした。

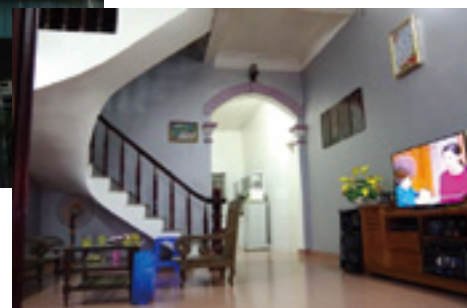


ハノイの中流家庭を訪問 エアコンはなくても…

ハノイの典型的な中流家庭取材で訪れた。トアンさん(46)さん、チン(36)さん夫妻は同じ外資の工場に勤めている。この街には間口が狭く、ウナギの寝床のような家が多い。昔は間口に應じて税金を徴収されていたから、その「節税策」の名残りだという。

玄関に入ると、ピカピカの大型液晶テレビが出迎えてくれた。トアンさんは30歳でテレビを初めて手に入れ、今年に入り42型を約6万円で購入したという。夫妻の合計月収に相当する思い切った買い物だ。小学校5年の長女チャンさん、1年の二女ザンちゃんと米国のアニメを見るのが、夫妻の日課になっている。姉妹はテレビゲームを持っていないが、別に欲しくもないという。手に入れたいものを尋ねると、チャンさんは即座に「携帯電話!」と両親に訴えた。

エアコンはないが、高い天井と大きな扇風機のおかげで意外なほどのしぎやすい。それでも、トアンさんが次に欲しいものはエアコンだ。ただし、それを聞いていたチンさんが「わたし専用の日本のバイクが欲しいんです」と身を乗りだしてきた。今はバイクが1台しかないため、通勤は夫妻で二人乗りしているからだ。チンさんは「毎日の買い物は近所の公設市場で済ませます。スーパーマーケットは高いから、ほとんど行きません」という賢妻である。



休日は親戚の家に行くことが多い。夫妻が招く際は、3LDKのこじんまりした自宅に30人もやって来るという。ベトナムでは血縁が非常に強く、お金に困った時も親戚が融通してくれることが少なくない。それだからか、トアンさんに貯金を聞くと、「ありません」ー。また、この国では住宅や自動車を買う時も現金払いが一般的であり、ローンやクレジットカードは普及していない。

別れ際、夫妻に将来の夢を聞いた。「ベトナムは急激に発展したけれども、収入に波があるから早く安定させたい。そして、子供たちを大学まで行かせてあげたい」。ベトナム人は教育熱心であり、放課後も学校の先生が有料の「塾」を開いて生徒に勉強を教えているという。



チャイナ・プラスワンの「本命」だが…

前述したドイモイ政策の導入以降、ベトナム経済は中国に及ばないものの、高度成長を実現した。2008年のリーマン・ショックを乗り越え、近年も5～6%台の成長を維持している。人件費は高騰した中国に比べるとまだ安い。外資にとっては中国製造拠点を分散する「チャイナ・プラスワン」の対象国として魅力的な存在である。

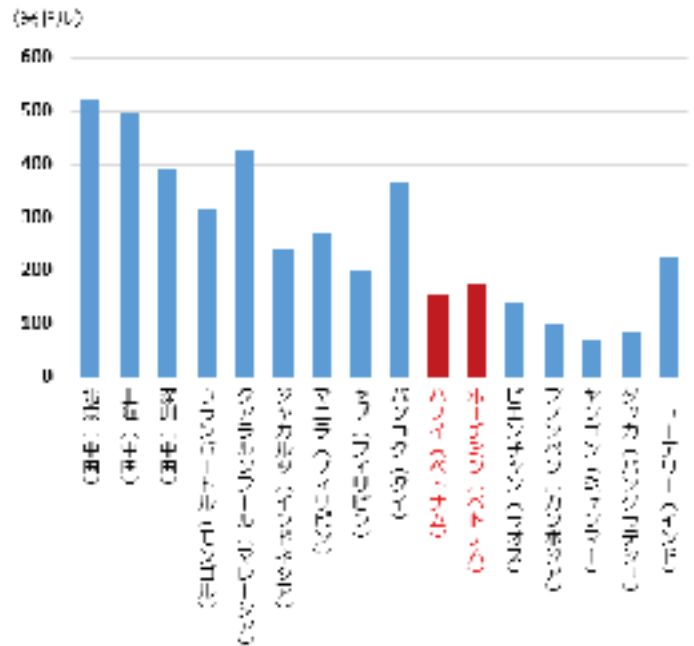
ベトナムと日本の通商には長い歴史がある。徳川幕府は鎖国の実施直前まで認めていた朱印船貿易により、日本からベトナムへ大量の銅を輸出していた。これが、今のベトナムの通貨「ドン」の由来である。ドイモイ政策を機に、日本企業は直接投資を積極化させ、日本貿易振興機構（JETRO）ハノイ事務所によるとその累計額は3兆円を突破。進出企業は1800社を数え、在留邦人は1万1000人を超えている。

川田敦相所長はベトナムへの投資の魅力について、賃金のほかに豊富な労働力とその若さ、潜在的な成長力、「以心伝心」が比較的容易な親日的な国民感情などを挙げ、「チャイナ・プラスワンの本命」と指摘する。ハノイ、ホーチミンの二大都市とその周辺ではコストが上昇しているため、日本を含め外資の熱い視線がベトナムの地方にも向きはじめた。

ただし、ベトナムの前途が必ずしもバラ色というわけでもない。ベトナムの労働コストも経済発展とともにジリジリと上昇する一方で、近隣のミャンマー、カンボジア、ラオスはより安価な人件費を武器に外国企業の誘致を強化している。来年、ベトナムも加盟する東南アジア諸国連合（ASEAN）が経済共同体を発足させると、競争が一層激しくなるのは必至だ。

また、ベトナムの基幹産業を牛耳ってきた多数の国有企業は、バブル崩壊後の不良債権処理に苦悩する。そして環太平洋経済連携協定（TPP）交渉では、米国が国有企業を甘やかしてきたベトナム政府に構造改革の断行を突きつけている。さらに、南シナ海の領有権をめぐる中国との緊張関係も予断を許さない。

工場労働者の月給



(出所) JETRO「第24回アジア・オセアニア主要都市・地域の投資関連コスト比較」(2014年5月)より抜粋

外国からの直接投資を所管する、計画投資省・外国投資庁のクアン副長官にインタビューすると、「現在、過去30年の間で最も良い成長が続いている」と笑顔で答えた。その一方で、「改革政策を徹底的に行い、経済の開放を進めてきた。今後は改革の対象を経済全体に広げ、外国からの投資をもっと促進する」と言うように、当面は外資頼みの成長戦略にならざるを得ない。



しかしながら、安価な人件費を武器に外資から組み立てを請け負う成長戦略には、限界も見えはじめる。一方、ベトナムはコメやコーヒーなど農産物の輸出大国であり、また民族衣装のアオザイが証明するように立体縫製の技術水準も極めて高い。このため、「やみくもに工業化を目指すのではなく、農業や縫製などの高付加価値化に取り組み、他の新興国と差別化を図るべきではないか」（在ハノイ日本外交筋）という指摘も聞かれる。



日本をはじめとする外資の直接投資とともに、ベトナム経済を牽引してきたのが、外国からの政府開発援助（ODA）である。この分野でも日本は最大の援助国であり、国際協力機構（JICA）はハノイに海外拠点では最大級のオフィスを置く。社会主義国とはいえ、ベトナムの貧困率は11%に達している。このため、JICAベトナム事務所は貧困削減や格差是正に向け、上下水道や病院などの整備に取り組んできた。ハノイ市内では国際空港新ターミナルや都市鉄道（写真下）、幹線道路などのインフラ建設も支援している。



日本の援助対象は多様化しており、必ずしも「ハコモノ」だけではない。無償資金協力でベトナムに導入された日本の税関システム（NACCS）は企業の輸出入業務を画期的に円滑化するほか、JICAはベトナムの行政や産業界の未来を担う人材育成にも力を入れる。森睦也所長は「今のベトナムは1970年代初めの日本の地方に似ている。ODAは日本企業の市場拡大にもつながり、両国はWIN-WINの関係を築くことができる」と話す。

PENTAX工場 従業員1000人の8割が女性

ベトナム全土でおよそ280の工業団地が稼働しており、外資系メーカーが生産・輸出基地とする。ハノイ市内のサイドンB工業団地もその一つ。PENTAXやRICOHのブランドでカメラ事業を展開しているリコーイメージングは、ベトナム生産子会社（RIMV）をここに置き、PENTAX一眼レフカメラ用交換レンズのほぼ全量を生産している。

リコーがPENTAXのカメラ・レンズ事業を買収する前、旭光学工業（当時）は1996年にこの工場を完成させ、操業を始めていた。漢字で「河内」と表記されるようにハノイは河川や湖に恵まれているため、研磨や洗浄の工程で大量の水を必要とするレンズ生産に適していたという。



（提供）リコーイメージング

RIMVでは約1000人のベトナム人従業員が働き、うち8割近くを女性が占める。RIMVの小林裕一社長に聞くと、「工場の現場というと、男性の熟練工のイメージを持たれやすいが、当社では加工から組み立てまで多くの女性従業員が重要な役割を担い、活躍している」という。現場取材して歩くと、日本の「匠」の技がベトナムの人々にしっかりと受け継がれていた。



小林裕一社長

組み立て工程のシニアマネジャー、ニュンさん（42）は、300人の部下を率いる働くお母さんである。工業専門学校卒業後、幹部候補の第一期生として採用され、操業開始からの社員である。今では幹部社員の中心的存在となり、ベトナム人従業員と日本人幹部の橋渡し役を務める。「ベトナム人は目標を達すれば『もういいじゃないか』と満足しますが、もっと高いところを目指すよう導くのに苦労します」一。帰宅は毎晩7時すぎになるが、高校生の長男が夕飯を作って待っている。家族であるバドミントンが休日の楽しみだ。

レンズの研磨後とコーティング後の検査工程では、アシスタントマネジャーのトゥーさん（39）が部下30人を指導していた。高校卒業当時は就職難で仕事を見つけられず、しばらく実家で服飾の作業をした後、1996年に入社した。彼女は目が大変良く、レンズに付着したミクロン単位の微小なゴミを見つけるのが得意だ。試作品や新製品の検査にはとりわけ神経を使い、責任も重くなるが、「ベトナムで生産したPENTAXレンズが世界中に認められることがうれしい」と話す。将来の夢を尋ねると、「ずっとここで仕事を続けて生活を安定させながら、息子と娘を大学まで無事卒業させたい」一

トゥアンさん（36）はレンズ研磨工程のスーパーバイザー。難易度の高いレンズを担当する「匠」である。細心の注意を払い、緻密な作業を求められる。彼は「ベトナムでは女性のほうがよく働きます」と笑いながら、「日本人は集中力がすごい。一方、最近のベトナムの若者はそれが弱いと感じます」一。帰宅すると、トゥアンさんは娘に算数や国語を教えるという教育パパ。「冷蔵庫やテレビは手に入れたから、次はクルマがほしい。ベトナムの成長スピードがあまりに速いため、どの水準まで到達するのか想像もつかない」という。



ニュンさん（中央）



トゥーさん（左）



トゥアンさん（右）

午前の勤務が終わると、工場の全員が社員食堂で会社支給のランチをとる。かつての配給制の名残りから、ベトナムではほとんどの企業で昼食が無料で提供されている。小林社長を含め日本人社員8人も、現地従業員と同じ内容の定食である。

トゥアン副社長（管理部門統括）はベトナム政府の国費留学生として旧ソ連で学んだ経験もあり、数カ国語を操る国際派。「幹部もワーカーと同じ作業服を着て同じランチをとる。組織の上から下までの距離を短くすることが、日系企業がベトナムで成功を収めている秘訣だろう」と分析している。



トゥアン副社長



小林社長は「PENTAX一眼レフカメラ用のレンズは、その付加価値の4割が当工場で生み出されている。今後は日本の技能検定制度と同じように制度を拡充し、ベトナム人従業員の技能をさらに高め、やる気をもっともっと引き出したい」と話す。

PENTAX一眼レフカメラは、「日本で製品の企画と開発→ベトナム・ハノイでレンズ加工、部品加工、組み立て→フィリピン・セブでカメラ組み立て」という国際分業体制を確立し、製品を世界市場へ送り出している。

このうちレンズ製造には人間の感性が不可欠なため、自動化やマニュアル化の難しい「モノづくり」といわれる。RIMVでは、日本からその技術を学び取った多くの「匠」が活躍していた。「Made in Japan」が難しい時代になっても、「Made by Japan」の精神はハノイで着実に育まれている。



(写真) 筆者
PENTAX K-50使用



国家の「ボトムライン」が問われる中国

日本危機管理学会（会長・池田十吾国土舘大学教授）と中国の災害管理・復興研究所（四川大学と香港理工大学が共同設立、執行院長・顧林生教授）は9月8～9日、第8回日中危機管理セミナーを中国四川省の成都市で開いた。筆者は危機管理学会の理事として参加し、中国西南部の中心的な都市に一週間滞在した。

22を数える中国本土の省の中で、四川は日本人にとって最も知名度の高い省かもしれない。ピリリと辛い四川料理の麻婆豆腐は日本の食卓でも定番メニュー。動物園の「永遠の人気者」パンダも四川省が故郷であり、成都市郊外の「大熊猫繁育研究基地」では赤ちゃんパンダを至近距離で見学できるため、日本からもツアー客が大勢やって来ていた。



また、成都是日本でも愛読者が多い「三国志」ゆかりの地でもある。劉備や関羽、張飛、諸葛亮（字は孔明）を祀った武侯祠博物館には、国内外から観光客が詰めかけていた。2500年を超える歴史を持つだけに、通り一本入っただけでタイムスリップを味わえる素敵な街だ。

成都を訪れた9月初め、中国経済の減速が日本をはじめ各国の株式市場を振り回していた。しかしながら、成都の街中は活気にあふれ、高層マンションやオフィスビルの建設ラッシュが続いており、いささか拍子抜けした。日本通の地元の人が「成都の銀座」と呼んでいる、中心街の春熙路は欧州高級ブランドの看板が目立ち、日本の百貨店やスーパーも進出している。

成都の人口は郊外を含めると1000万人をはるかに超え、中心部では激しい渋滞が発生している。中国の他の大都市に比べて地下鉄の建設が遅れたこともあり、クルマへの依存度が高い。ラッシュ時のバスは運転席まで乗客が進入するほど混雑し、停留所は長い列が出来る。2010年以降、地下鉄がようやく東西と南北の二路線開業し、市民の足として定着しつつある。駅構内は清掃が行き届いており、転落事故を防ぐホームドアも完備。ラッシュ時でも安心感がある。

乗客は手荷物とともにX線検査装置を通らなければ、地下鉄に乗車できない。この点、日本の地下鉄のテロ対策は大丈夫なんだろうか…。1人民元＝20円で比較すると、スターバックスのコーヒーは成都の方が東京より若干高い。このレートではホテルの料金も決して安くない。その一方で、成都の初乗りは地下鉄が2元（約40円）、タクシーが8元（約160円）に抑えられており、やはり社会主義国なのである。



成都の中心部を歩いている限り、街並みや利便性は自由主義の先進国とあまり変わりがない。公共交通の料金が安い分、より快適といえるかもしれない。街中のごみ箱は可燃・不燃の区別があるし、スーパーのレジでビニール袋をもらおうと0.2元（約4円）かかるなど、環境意識も高まっているようだ。



ところが、バーチャル空間に入ると、事態は一変してしまう。パソコンやスマホをインターネットに接続しても、中国では一部のサイトを閲覧できないのである。筆者の場合、出張時にはグーグルのGメールを使っているが、今回は役に立たなかった。

中国は1980年代の改革開放以来、劇的な高度成長を遂げ、日本を追い抜いて世界第二位の経済大国にのし上がった。もはや後進国ではない。しかし、言論統制で国民を縛りつける社会主義モデルを続けているは、いつかは壁にぶち当たり、持続可能な成長は実現できまい。旧ソ連の消長が教えるところである。

無論、習近平政権は百も承知のはず。実際、中国はリーマン・ショックを受けて高度成長路線と決別し、安定成長を容認する新常态（ニューノーマル）の下で経済や社会の安定を図ろうと試行錯誤を続けている。13億を超える人口、55に上る少数民族、日本の25倍の国土を抱える巨大国家だから、だれが為政者になってもその統治は並大抵でないだろう。

今回の日中危機管理セミナーでは、中国側の研究者から「国家として果たすべき底線（ボトムライン＝最低限やるべきこと）とは何か」という問題提起があり、議論も盛り上がった。大言壮語のスローガンで国民を動かし、国家を運営できる時代ではないという考え方が、中国でも浸透しつつあるように感じた。

セミナーの共同議長で、中国の危機管理学の第一人者である顧教授はこう語っていた。「中国は建国以来、劇的な変化を遂げ、とりわけ改革開放のこの30年間は市場経済の導入によって大きな成功を収めた。その一方で、道徳（モラル）が崩壊するリスクに直面している。今、『中国が守るべきボトムラインは何か』が問われている」

習政権は目下、「ハエもトラも叩く」という政官軍の腐敗一掃キャンペーンに全力を挙げ、共産党の大物も躊躇（ちゅうちょ）なく摘発し、国民から喝采を浴びている。だがその次に、国民は言論の自由の確立、すなわち完全民主化を要求してくる。共産党一党独裁と両立できるのか、あるいは…。いずれにしても、中国出張でGメールを自由に使えるようになる日が待ち遠しい。



災害管理・復興研究所
顧林生執行院長



(写真) 筆者 PENTAX K-S2使用
一部画像をHDR処理

チンギス・ハーンの末裔は今… ニ モンゴル・ウランバートル訪問記 ニ

産業・社会研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

モンゴルの首都ウランバートルからバスに乗り、ガタガタ道を東に進んでいく。冬場はマイナス30度にもなるため、未舗装のほうがスリップしにくい。郊外に出ると信号や渋滞がないのに、バスは時々停止する。ヒツジやヤギの横断を優先するからだ。

途中の草原でヤクの群れと遭遇した。人間が命じなくても、一団は草を食みながら整然と進んでいく。高原の川では、馬が連れ立って水を飲みに来た。満足したら牧場に帰っていく。動物が大自然の秩序を自律的に維持する一方で、人間による干渉は最小限。だから、時間がゆっくりと流れていく…



モンゴル国 (Mongolia)

面積 156.4km²

(日本の約4倍)

人口 306.1万人

首都 ウランバートル

(人口134.6万人)

(出所) 外務省HP



ひたすら草原が続く中で、たまに「白い円盤」のような物体を見つける。これが「ゲル」と呼ばれる、遊牧民（ノマド）が発明した移動式住居である。円型の大部屋に家族で住み、肩を寄せ合いながら暮らしている。天井や壁には羊毛で作ったフェルトが使われ、断熱性能に優れるから、室内は夏涼しくて冬暖かい。

だが最近では、テクノロジーが大草原にも入り込んできた。ウランバートル市内の市場（ザハ）で並んでいたソーラー発電パネルと衛星放送受信用アンテナは、遊牧民がセットで買っていくという。





保養地には観光用ゲルが立ち並ぶ



観光用ゲルの外観と内部



遊牧民に人気のソーラーパネルと衛星放送アンテナ

騎馬隊と情報戦で世界征服したチンギス・ハーン

1時間半ほどバスに揺られていると突然、キラキラと銀色に輝く巨大な彫像が出現した。高さ40メートルに達する、チンギス・ハーンの騎馬像である。13世紀初め、彼は高原に点在していたすべての遊牧民を傘下に収める。それにとどまらず、彼と後継者のフビライらが中国や中央アジア、欧州にまで侵攻し、モンゴル帝国を樹立した。最盛期には地球上の人口の半分と、陸地面積の四分の一を征服したという。なお13世紀後半、日本に対しても九州に二度襲来したが、防風雨などの影響でいずれも失敗に終わった。



大草原に出現した巨大なチンギス・ハーン像



モンゴル帝国を支えた騎馬軍団の像

チンギス・ハーンは軍事の天才だった。騎馬兵は7~8頭の馬を与えられ、疲弊した馬を捨てては新しい馬に乗り換え、これを繰り返した。それによってモンゴル帝国の軍団は驚異的な進軍速度を実現し、中世欧州の軍隊はスピード面で歯が立たなかったという。モンゴル軍は中軍、右翼、左翼という三つの軍団に分かれていた。それぞれが先鋒・中堅・後方という三つの部隊を持ち、機動的で分厚い攻撃を展開した。

高度な軍事技術だけでなく、巧みな情報戦略によってチンギス・ハーンは版図を急激に拡大する。例えば、制圧した民族でも優秀な人材は積極的に登用し、各地域からの情報収集に力を入れた。ダイバーシティ（多様性）の重要性を認識していたのだろう。

また、非常に優れた駅伝制度も確立する。主要街道の途中に駅を設け、人と馬を用意したのである。モンゴル帝国が発した命令書は数カ国語に翻訳された上で、各駅をリレーしながら、領土内の隅々まで届けられた。20世紀にシベリア鉄道が開通するまで約800年間、この駅伝制度がユーラシア大陸で最速の情報伝達システムだった。

騎馬軍団に象徴されるハードパワーに加えて、情報というソフトパワーに着目したチンギス・ハーン。地球規模で衝撃を与え、世界史上に名を残す。だからモンゴル国民にとっては、永遠のヒーローなのである。ウランバートル中心部の広場にも、チンギス・ハーンの像が座り、訪れる人の波が絶えない。



中露両国に挟まれて翻弄されたモンゴル

モンゴル帝国が17世紀に滅亡した後、この国はロシアと中国に挟まれ、歴史の荒波に翻弄（ほんろう）されていく。18世紀に清（今の中国）の支配下に入ったが、1911年に清で辛亥革命が起こったのを契機に、モンゴルは独立を宣言する。

1917年にロシア革命が勃発すると、その影響でモンゴルも1924年に社会主義体制の人民共和国に移行した。1939年、モンゴルと満州国（日本が支配した今の中国東北部）の国境で、モンゴル軍・ソ連軍が満州国軍・日本軍と軍事衝突。このノモンハン事件で日本側は敗北を喫し、太平洋戦争に突入していく。



ソ連との蜜月時代に建てた記念碑
(ザイサン・トルゴイ)

第二次世界大戦後、モンゴルはソ連の衛星国として、社会主義体制下で近代化が進められた。ウランバートルはモスクワと北京を結ぶ国際鉄道の中継駅としても重要視される。

しかし、1989年にベルリンの壁が崩壊すると、モンゴルも民主化の津波に呑み込まれる。1992年には社会主義を放棄し、民主化と市場経済の確立を目指して歩み始めた。社会主義時代に弾圧を受けたチベット仏教のガンダン寺も、今は国内外から多数の参拝者や観光客を集める。訪れると、高さ25メートルの観音像が厳かなオーラを放っていた。



ウランバートル駅と社会主義時代のSL

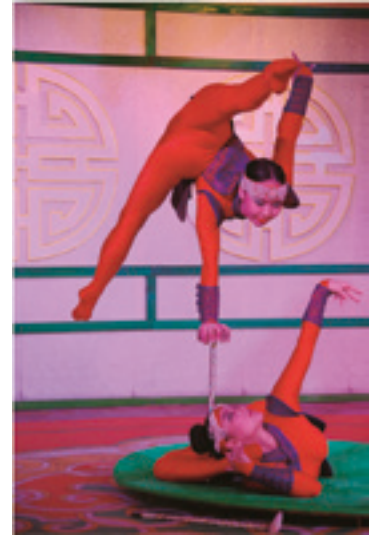




ガンダン寺と観音像



3~4歳で乗馬を習う



資源価格下落で経済は危機的状况に

ところで、モンゴル料理は羊肉が主体だが、意外なほど臭味がなくて食べやすい。草原では野菜をあまり食べない分、ベリーやスグリなどの木の実に栄養分を補う。大自然がサプリメントを提供してくれるわけだ。男の子は3~4歳から乗馬を始め、成人までに羊一頭の解体ができて一人前とされる。人々は酒を愛し、馬頭琴（ばとうきん）を奏でる。大きな声で歌い、時には激しく舞う。

モンゴルは銅や亜鉛など豊富な鉱物資源に恵まれている。その相場上昇に伴い、モンゴルの実質成長率は2004年に二ケタ台に乗り、2007年には20.6%を記録。ところが、翌年のリーマン・ショックで銅価格などが暴落すると、マイナス成長に陥ってしまう。その後の市況回復で2011年には17.5%まで回復したものの、再び資源価格が下落すると急ブレーキが掛かる。

国際通貨基金（IMF）はモンゴルの2016年の成長率がわずか0.4%にとどまると予測する。外貨準備高も減り続け、危機的な状況に直面している。資源頼みの一本足経済からの脱却が、この国にとって喫緊の課題である。

一方、モンゴルの国内政治も経済同様、アップダウンを繰り返してきた。新憲法で一院制の国家大会議（定員76人、任期4年）が創設され、この多数を制する政党が組閣する。実は市場経済へ移行した1992年以降、過去7回行われた選挙ですべて与党が敗北を喫し、毎回政権交代が起こっている。このため、政策の継続性に乏しく、経済が不安定になりやすいと指摘される。



今年6月の選挙でも野党の人民党が地滑りの勝利を収め、民主党から政権を奪還した。筆者は先に日本危機管理学会の訪蒙団の一員として、政府宮殿で人民党のドルゴルスレン・スミヤバザル議員と会見した。同議員はモンゴル日本議員連盟の会長を務め、元横綱・朝青龍のドルゴルスレン・ダグワドルジ氏の兄である。

ドルゴルスレン議員は「すべての政策を掘り返す。政治と経済はコインの表裏の関係にある」と述べ、今回の政権交代によって経済政策を抜本的に見直す考えを表明した。国内経済の現状については「危機に陥っている」と述べ、資源価格の乱高下をその主因に挙げた。このため、モンゴルが輸出する資源については国際市場で一定の価格決定権を握れるようにしたいとの意向も示した。

また、同議員は危機的な経済の再建や遅れているインフラ整備には、海外からの投資が不可欠だと強調した。そのために、外国の銀行や証券会社などに国内市場を開放していく考えも示唆した。さらに、「日本とモンゴルの関係が強くなってほしい」と強調し、日本の経済協力や直接投資の拡大に大きな期待を示した。



国家大会議のドルゴルスレン議員



政府宮殿

豪華マンションの裏に煙突のゲル地区

しかし、ウランバートルの中心部では高層マンション・オフィスビルの建設ラッシュが続いており、経済危機という印象は受けない。バブルが崩壊する前の宴（うたげ）でなければよいのだが…



ウランバートルの人口は130万人を超え、総人口の4割以上を占める。東京の一極集中どころではなく、慢性的な交通渋滞と深刻な大気汚染が発生している。地方から流れ込んでくる人の多くは、遊牧民と同じくゲルを市街地に建てる。中心部の豪華なマンションと煙突が並ぶゲル地区の対比は、市場経済移行後に急拡大した格差の象徴に見えた。

ゲル地区を訪れると、「白い円盤」が密集していた。上下水道は整備されておらず、水は井戸から汲む。電気は通じているが、暖房は伝統的な薪ストーブ。このため、ゲルの煙突から煤煙が排出され、大気汚染の元凶になっている。

こうした現状にモンゴル政府も危機感を強める。政府宮殿で国家開発庁のバンズラガチャ・バイアルサイハン長官に取材すると、「ウランバートル市内で下水処理がなされているのはマンションやアパートだけ。このため、汚水による土壌汚染が深刻化している」一。また、ゲルからの煤煙も憂慮しており、「火力発電所からスチーム（蒸気）を供給するようにしたい」という。



次に、モンゴル社会思想史の授業には飛び入りで参加させてもらい、二年生の男女に日本に対するイメージを質問した。すると、次々に手が挙がる。「先進国」「ファッションが素敵」「京都。伝統を守っている」「几帳面な国民性」「若者がアルバイトをしている」「親切。東京のデパートで道を聞くと、言葉が通じないのに目的地まで連れて行ってくれた」…。学生の日本に対する知識や関心は想像以上。チンギス・ハーンの末裔（まつえい）は頼もしく見えた。

モンゴルの国土は日本の4倍もあるのに、300万人余しか住んでいない。しかも、半分近くが首都に集中しているから、人の居ない部分が圧倒的に大きい。だが発想を転換すれば、日本の北海道と同様、クルマの自動運転やドローン（無人飛行機）の適地になるかもしれない。

手付かずの貴重な大自然が残され、来年5月にはウランバートルに新国際空港が開業する予定。外国人旅行客は増えるだろうし、カシミヤ製品などの販売拡大も期待できよう。若者の瞳が輝き続ければ、モンゴルは潜在能力を発揮して「小さくてもキラリと光る国」になるのではないかと思う。

目指せ！「小さくてもキラリと光る国」

ウランバートルの中心部にあるモンゴル国立大学。ジャーナリズム論の授業をのぞくと、学生が先生の話に熱心に耳を傾け、質問を浴びせていた。その瞳はキラキラと輝き、スマートフォンをいじっている者はいない。エリートを養成する名門大学の授業とはいえ、日本の大学でこうした光景をどれぐらい見られるだろうか。



モンゴル国立大学



(写真) 筆者 PENTAX K-S2 使用

東京から最も近い「欧州」 ウラジオストク（ロシア） ＝戦前6000人が居留した日本人街は今…＝

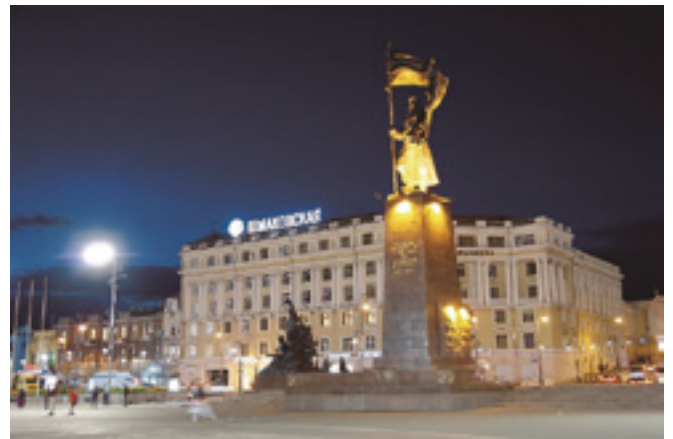
産業・社会研究室 主席研究員

RICOH Quarterly HeadLine 編集長 中野 哲也

成田空港を離陸したシベリア航空の直行便は、2時間足らずでロシア沿海地方の中心都市ウラジオストクの国際空港に着陸した。なるほど東京から最も近い「欧州」である。日本は明治維新直後、日本海を挟んで向き合うこの街と貿易を始め、1919年頃には6000人も日本人が現地に居留していた。だが、幾多の戦争や動乱によって引き揚げを余儀なくされる。第二次大戦後の旧ソ連は、太平洋艦隊の基地である「軍都」ウラジオストクを「閉鎖都市」に指定。外国人はもちろん、市外の自国民でさえ立ち入りを禁止したため、この街は人々の記憶から消えてしまう。旧ソ連崩壊後の1992年ようやく開放され、今再び日本との関係を強め始めている。

ウラジオストクという街の名は、ロシア語のヴラジ（支配する）+ヴォストーク（東）＝「東方を征服せよ」が由来とされる。帝政ロシアは1860年にウラジオストクを建都し、極東の太平洋岸進出と不凍港の確保という宿願を果たした。ちなみにモスクワからウラジオストクまでは直線距離で6400キロを超え、東京からの6倍以上になる。

もちろん、当時のロシアは極東に満足な港やドックを持っていない。このため、船舶の修理や燃料・水・食糧の補給は、長崎をはじめとする日本の港に依存した。江戸時代末期の1855年に締結された日露和親条約によって両国間では外交が始まり、明治維新から3年後の1871年にはウラジオストク～長崎が海底電信線で結ばれた。



中心部にある中央広場と噴水通り



黄金橋とウラジオストク港



一方、明治政府も農産物などの輸出先として期待を懸け、1876年にはウラジオストクに日本国政府貿易事務所を開設した（1907年領事館、1909年総領事館に昇格）。今、旧総領事館は一等地の角にあり、「築101年」とは思えない美しさだ。ロシアは法律に基づいてきちんと保存し、地方裁判所として活用している。貿易事務所開設から2年後、北海道開拓使長官・黒田清隆（後の首相）らの使節団はウラジオストクで北海道物産展を開催。麦粉やサケ、シカ肉などが高い評価を受け、中でも「サッポロカ」と呼ばれたビールが人気だったという。メディアが発達する前の時代に日本の地方と海外を直接結ぶという大胆な発想は、人口減少に苦悩する現代の日本が学ぶべきだと思う。

こうして日本人居留民は言語の厚い壁や冬の厳しい寒さを克服しながら、ウラジオストクで活躍していた。ところが1904年2月に様相が一変する。日露戦争の勃発である。居留民はパニックに陥り、大半が引き揚げ船で日本へ帰国を余儀なくされた。



旧日本総領事館（現在は地方裁判所）



1904年全通したシベリア鉄道の終点・ウラジオストク駅



日本の貿易会社が入居していた建物 旧堀江商店（左）旧杉浦商店（右）

1881年、ウラジオストク～長崎に蒸気船の定期航路が開かれ、日露貿易は一段と活発になる。また、シベリア鉄道の建設が始まると、日本から多数の出稼ぎ労働者が作業に従事した。1904年の完成後、ウラジオストクは鉄道でモスクワと結ばれ、日本との貿易も一層拡大した。一方、京都の西本願寺はウラジオストクで布教活動を始め、「浦潮本願寺」が日本人居留民の精神的な支柱となる。当時、この街の日本語表記には「浦潮斯徳」などの漢字が当てられた。1900年に居留民の人口は2000人を超え、市内では日本人の貿易会社や商店が繁盛し、「日本小学校」も開校する。



旧日本小学校



モスクワまで9288kmのキロポスト、今も6泊7日の長旅



日露戦争前に築かれた要塞の跡

翌1905年の日露戦争終結後、ウラジオストクの日本人社会は復活し、戦前にも増してビジネスを積極的に展開する。例えば、ウラジオストク～青森に定期船が就航すると、青森県の関係者は「青浦商会」を設立してリンゴを盛んに輸出した。明治人の起業家精神には脱帽するほかない。日本人居留民の人口も増え続け、ピークの1919年には6000人規模に達した。

日本からは銀行も進出する。今も長崎市に本店を置く十八銀行はウラジオストク支店として「松田銀行部」を開設。後に、朝鮮銀行（日本債券信用銀行の前身→現あおぞら銀行）がこれを買収する。一方、横浜正金銀行（東京銀行の前身→現三菱東京UFJ銀行）は独自に支店を置く。各行は駐留日本兵から預金を受け入れたり、中国東北部・満州からの農産物輸出に資金を供給したりした。こうした銀行支店の重厚な造りは、戦前の日本版「産軍複合体」のパワーを今に伝える。



旧横浜正金銀行（現在は博物館）

第一次大戦中の1917年、ロシアではレーニンが主導する世界初の社会主義革命が起こり、ソビエト政権が誕生する。大混乱が続く中、ウラジオストクの商店で強盗が日本人を殺害する事件が発生。それを口実に日本は「シベリア出兵」に踏み切った。軍事干渉を強める日本に対し、共産主義ゲリラのバルチザンが激しく抵抗。日本は1922年撤兵し、居留民のウラジオストクから日本への引き揚げが続いた。

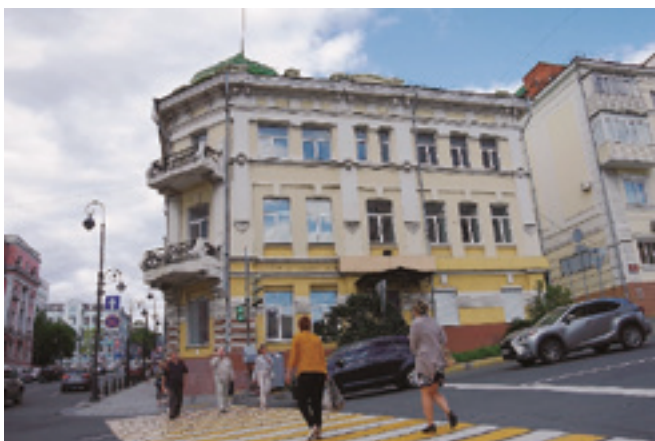
結局、1937年までに総領事館職員などごく一部を除き、ウラジオストクから日本人の姿が消えた。第二次大戦後、旧ソ連軍は数十万人の日本人をシベリア各地に抑留する。市内の競技場「ディナモ・スタジアム」も、抑留者の強制労働によって建設されたものだ。

日本人居留時代の面影を残す建物を取材していると、「声なき声」が聞こえてくる気がした。人間の本质とは何なのか？国家とは？自由とは？…。胸を締めつけられ、シベリアの大きな空を見上げて考え込んだ。



ディナモ・スタジアム
（サッカー場）

【注】ウラジオストクと日本の間の近代史については、「ウラジオストク 日本人居留民の歴史 1860～1937年」（ゾーヤ・モルグン著、藤本和貴夫訳、東京堂出版）を参考にしました。厚く御礼申し上げます。



十八銀行の支店「旧松田銀行部」



旧朝鮮銀行支店

冒頭で紹介したように、第二次大戦後の「軍都」ウラジオストクは旧ソ連によって「閉鎖都市」に指定されたため、その実態は厚いベールで包み隠されていた。観光ガイドのオリガ・ソルダトワさんは「市外に住む祖母も市内に入れず、会うことができなかった」と当時を振り返る。だが今、この街は取り残されてきたロシア極東地域の開発拠点として脚光を浴び始めた。



潜水艦C-56博物館と
観光ガイドのオリガ・
ソルダトワさん

ウラジオストクの人口は約63万人（2016年1月）でロシア極東地域では最大の都市である。札幌市とほぼ同じ緯度に位置し、1月の平均気温はマイナス12度まで下がるが、8～9月は30度を超える日も少なくない（在ウラジオストク日本総領事館「ウラジオストク市案内」）。

ウラジオストクは港と坂の街であり、日本の長崎の雰囲気とよく似ている。その急な坂を、ちょっと懐かしい乗用車が走る。市内を走行する自動車の実に9割超が、日本から輸入された中古車なのだ。トラックも「〇〇運送」といった漢字を付けたまま活躍中。ただし関税が高いため、安い買い物ではない。地元で大人気のトヨタ自動車「プリウス」の場合、良質なものなら200万円ぐらいするから、大卒初任給（6万円程度）の30倍以上になる。

坂の多い市街地では駐車場不足が深刻であり、違法駐車が激しい渋滞を招く。また、市内ではマツダと現地企業ソレルスの合弁工場が2012年からSUVや乗用車を生産している。



坂の街で日本の中古車が活躍



裏通りは憩いの場



講道館柔道の創始者・嘉納治五郎に師事した
ワシーリー・オシチェプコフ氏の像

ウラジオストクはプーチン大統領も愛するロシア柔道の発祥の地でもある。この街は日本とは浅からぬ関係があり、今も親日家が少なくない。ジャーナリストのオリガ・クスコワさんもその一人だ。彼女はシベリア鉄道と数奇な縁があり、55年前にその車中で産声を上げた。15歳の時は車内で日本人の新婚カップルと出会い、ロシア語の苦手な二人の面倒をみた。そして日本に興味を抱き、わずかな手掛かりを頼りにこの夫婦の居所を探り、何と34年後の2011年に日本で再会を果たす。今、オリガさんは観光をテーマにしたインターネット・マガジンを編集しながら、ウラジオストクと日本の懸け橋になる。

旧ソ連時代の1980年代後半に建設された高層アパートを訪問すると、オリガさんが自慢の家庭料理を振る舞ってくれた。一家は日本食とりわけラーメンが好物で、通信会社エンジニアの夫が腕を振るうという。オリガさんは「ウラジオストクの観光客の大半は中国からの団体客だが、日本人にもっと来てほしい。そのために、ビザ無しで日露両国間を往来できるようにしてほしい」と訴えている。



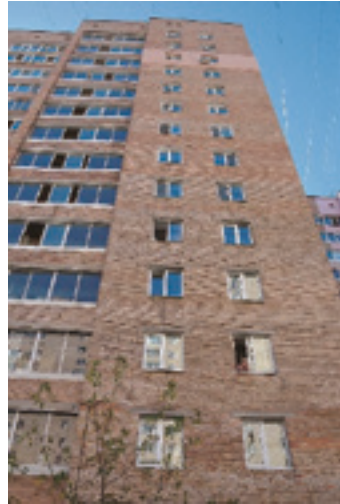
約40円で全線乗車できるバス



市内に1路線だけ残る路面電車



市民の台所「自由市場」



ジャーナリストのオリガ・クスコワさんと高層アパート



帝政時代から続く「グム百貨店」



オリガさん自慢の家庭料理

オリガさんのアパートは70平方メートル程度の3LDKで、内装はきれいにリノベートされていた。旧ソ連の住宅政策は手厚いものだったが、今はマイホームに市民の手が届きにくい。郊外のマンションでも大卒初任給約250倍の1500万円程度もするし、住宅ローン金利も二ケタだからだ。このため、社会人になっても親と同居する若者が多いという。約40円でバスに全線乗れるなど公共交通は今もしっかりしているが、無料が原則だった教育費や医療費が家計を圧迫する。社会主義から市場経済への移行に当たり、市民は自由を享受する一方で様々な歪（ひずみ）に苦悩し、ロシア正教の聖堂で祈りを捧げる。



ロシア正教の
ポクロフスキー聖堂

現在、市民は国境を超える問題も抱えている。ロシア革命後の1930年代、ウラジオストクには主にウクライナ地方から入植者がやって来た。今もウクライナ出身者がウラジオストクの中心的な存在だが、ウクライナへの帰郷や故郷にいる親戚縁者との通信が困難になっている。クリミア問題をめぐり、ロシアとウクライナが激しく対立するからだ。

ある中年の男性は80歳の母をウクライナに残している。しかし、ウクライナ当局は帰郷して会うことを許さない。国際電話や電子メールもブロックされてしまうという。「パソコンの不得手な母が親戚の家へ行き、スカイプによって辛うじてコミュニケーションはとれますが…」と明かすと、笑みが消えた。クリミア問題では米欧もロシアに経済制裁を科しており、筆者もウラジオストク空港でVISAカードを使えず、あわてて日本円をロシア・ルーブルに両替した。

今年9月6、7両日、極東への外国による投資を促すため、ロシア政府は東方経済フォーラム（EEF）をウラジオストクで開催した。安倍晋三首相とプーチン大統領による日露首脳会談も開かれ、極東開発を含む8項目の経済・民生協力プランについて合意に達した。

その際、安倍氏はプーチン氏に、嘉納治五郎の書「精力善用」（＝目的を達成するために心身の力を最も有効に使う）を贈った。両首脳は市内で開かれた柔道のジュニア大会もそろって観戦したという。

ウラジオストクは国内外の権力に翻弄され続け、ようやく今、飛躍する時代を迎えつつある。日本との間では複雑な歴史が存在するが、東京から最も近い「欧州」、あるいはロシア極東開発の「玄関」として注目度が高まるのは間違いない。シベリアの燃えるような夕日を見つめながら、この街の可能性を確信して帰国の途に就いた。



伝統民芸品
「マトリョーシカ」
も国際政治を反映

ウクライナとの対立は深刻だが、今のウラジオストクに「閉鎖都市」の面影はない。2012年のアジア太平洋経済協力会議（APEC）開催を機に、黄金橋やルースキー橋などの社会インフラが一気に整備された。旧ソ連共産党の最高権力者・フルシチョフ第一書記が1959年、「ソ連極東のサンフランシスコにする」と宣言してから半世紀余、この街は開放的な国際都市に発展し始めた。



ウラジオストクの夕景



主塔間1104メートルの「ルースキー橋」は世界最長の斜張橋



(写真) 筆者 PENTAX K-S2



●発行日 2019年3月29日 ●発行人 神津多可思 ●編集長 中野哲也
●発行所 リコー経済社会研究所 〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北ロビリング20F